

家ノ脇Ⅰ遺跡
岩内横穴墓

2010年2月

国土交通省中国地方整備局
奥出雲町教育委員会

序

斐伊川・神戸川総合開発工事事務所では、斐伊川・神戸川の抜本的な治水対策（3点セットと呼ばれる治水対策）の1つである、斐伊川上流部の尾原ダムと神戸川上流部の志津見ダムの建設事業を進めています。

尾原ダム建設事業の実施に際しては、島根県教育委員会、奥出雲町教育委員会をはじめ関係各位のご協力をいただき、埋蔵文化財の保護にも十分に留意すべく必要な調査の実施、記録保存につとめるものとし、平成11年から計画的に発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、平成20年度から着手した「家ノ脇Ⅰ遺跡」、「岩内横穴墓」の調査結果をまとめたものです。

本報告書が郷土の歴史教育や地域社会の諸活動のために広く活用されることを期待します。

最後に、今回の発掘調査並びに報告書のとりまとめに関係された皆様に深く感謝申し上げます。

平成22年2月

国土交通省 中国地方整備局
斐伊川・神戸川総合開発工事事務所
所長 中川 哲志

序

奥出雲町教育委員会は、国土交通省中国地方整備局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所の委託を受け、平成11年度から尾原ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施しました。本書は、平成20年度に実施した家ノ脇Ⅰ遺跡及び岩内横穴墓の発掘調査報告書であります。

ダム建設地が位置するここ斐伊川の上流はかつて「肥乃河上」と称され、神話の舞台の地として広く知られ、古くからの遺跡の数が増しつづあります。

家ノ脇Ⅰ遺跡では、近世末から近代の麻栽培とその一次加工過程とみられる遺構が確認されました。

また、岩内横穴墓では、1基の墓穴が認められたが多くが崩落破損しており残存したのは玄室半ばから奥へ約1mでありました。

これらの、成果は今後の当地方の歴史解明と歴史学習に活用され文化遺産の保護に役立つものと期待しております。

なお、本報告書刊行をもって当初に予定計画した文化財調査の作業をすべて終えたこととなります。

終わりに本調査にあたり国土交通省中国整備局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所、島根県文化財課をはじめ多くの皆様方の格別のご理解、ご協力を賜りましたことに改めて厚くお礼申し上げます。

平成22年2月

奥出雲町教育委員会

教育長 安 部 隆

例 言

1. 本書は奥出雲町教育委員会が、国土交通省中国地方整備局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所の委託を受けて実施した、尾原ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果報告書である。

2. 本書で扱う遺跡は次の通りである。

奥出雲町前布施1132－ 7 他	<small>いえのわき</small> 家ノ脇 I 遺跡
〃 佐白1483－ 40	<small>いわうち</small> 岩内横穴墓

3. 調査体制は次の通りである。

平成20年度 現地調査

調査主体者	奥出雲町教育委員会 教育長 若槻 慎二
事務局	川本健二（教育課長） 森山 昇（生涯学習係長） 平田昭憲（社会教育主事）
調査員	杉原清一
調査補助員	家熊 猛 井上賢治 藤原友子
調査指導	島根県教育庁文化財課 池淵俊一 島根県文化財保護審議会委員 蓮岡法暲 日本民俗学協会会員 浅沼 博

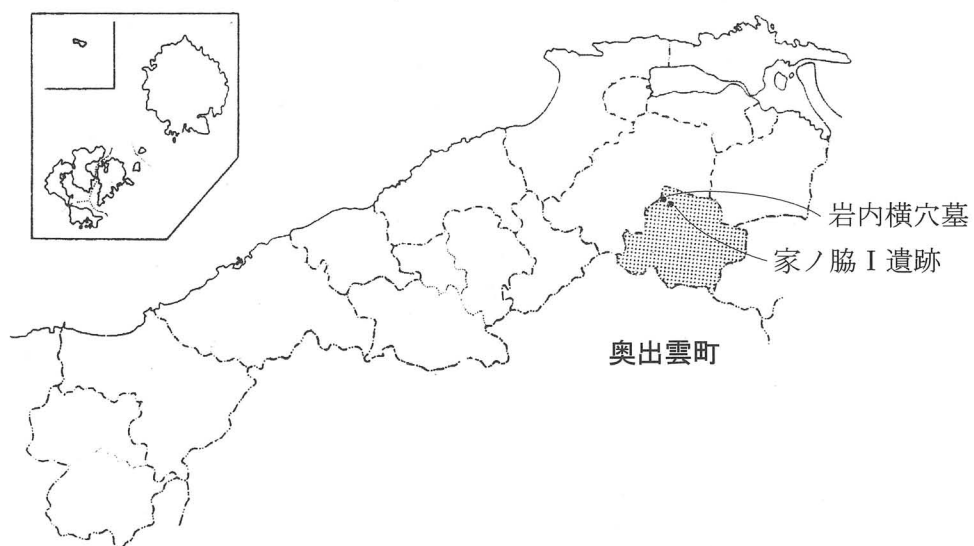
平成21年度 遺物整理・報告書作成

調査主体者	奥出雲町教育委員会 教育長 安部 隆
事務局	川本健二（教育課長） 森山 昇（生涯学習係長） 平田昭憲（社会教育主事）
調査員	杉原清一
調査補助員	家熊 猛 井上賢治 藤原友子 栗原久美子
遺物整理	藤原厚子

4. 発掘作業については、奥出雲町教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。

現場担当	祝部祥子 持田明典
事務担当	栗原久美子
発掘作業員	長谷川登 長谷川トミコ 福間新子 早戸 稔 山根知雄 石田安夫 藤原修至 藤原厚子 山本雅臣

5. 挿図中の方位は国土座標系の値を、又高さは標高で示した。
6. 遺物の実測は杉原と藤原が行い、浄書は藤原と栗原が担当した。写真撮影は現地調査を家熊が、遺物を井上が担当した。
7. 調査にあたって次の方にご協力を頂いた。記して謝意を表します。(敬称略)
植田 有 (株)内田工務店
西尾克己(島根県教育庁文化財課古代文化センター兼古代出雲歴史博物館)
8. 本書の執筆は杉原が行い、編集は杉原・藤原が行った。遺物図と図版中の個体No.は同じである。
9. 出土遺物や調査図・写真は奥出雲町教育委員会で保管している。



位置図

目 次

序

序

例言

家ノ脇 I 遺跡

I 調査の経緯	1
調査に至るまで 調査方法と経過	
II 位置と環境	4
III 遺物	9
縄文土器 複合口縁土器 土師器 須恵器 中・近世陶磁器 石類	
その他の遺物	
IV 遺構	31
桶遺構 火床遺構と集石遺構 柱穴遺構 小柱穴・杭跡等	
V 土馬	41
出土状況 現存部の観察 復元的所見	
VI まとめ	43
近世以前の遺物の検出状況 近世～近代の遺構	

付編

1. 斐伊川史（洪水）	46
2. 明治初年村々物産表	48
3. 糞桶の図	50
4. 麻の皮剥ぎ—山陰民俗より—	50
5. 麻蒸し—能義奥の民俗より—	51
6. 麻蒸し聞き取り記録	52
7. 桶内土の検鏡観察	53

岩内横穴墓

I はじめに	67
II 調査結果	68
遺構 出土土器	
III むすび	70

挿図・表 目次

家ノ脇 I 遺跡

図 1 区割りとトレンチ配置	2	図 18 中世～近世陶磁器 区別出土数	22
2 断面図	3	19 遺物図 (9)	23
3 周辺の遺跡	4	20 遺物図 (10)	24
4 地形図	6	21 遺物図 (11)	30
5 地形横断面図	7	22 遺構全図	32・33
6 調査地の小字地名	8	23～25 桶遺構	34・35
7 遺物図 (1)	9	26・27 火床遺構	36・37
8 弥生～古式土師器 区別出土数	10	28 集石遺構	37
9 遺物図 (2)	11	29～32 柱穴	38
10 遺物図 (3)	13	33 柱穴列	39
11 遺物図 (4)	14	34～39 柱穴	40
12 土師質・土師系土器 区別出土数	15	40 土馬	41
13 遺物図 (5)	15	表 1 遺跡一覧表	5
14 遺物図 (6)	16	2 土器観察表	25～29
15 遺物図 (7)	18		
16 須恵器 区別出土数	20		
17 遺構図 (8)	20		

岩内横穴墓

図 1 位置図	67	図 3 遺構図	68
2 地形図	67	4 遺物図	69

図版 目次

家ノ脇 I 遺跡

PL 1 調査区全景	54	PL 8 桶遺構	61
2 トレンチ壁面	55	9 桶遺構	62
3 遺物 1	56	10 火床遺構	63
4 遺物 2	57	11 集石遺構と小柱穴	64
5 遺物 3	58	12 大型柱穴と作業風景	65
6 遺物 4	59	土馬	42
7 遺物 5	60		

岩内横穴墓

PL 1 遠景と遺構	71	PL 2 出土遺物	72
------------	----	-----------	----

家ノ脇 I 遺跡

I 調査の経緯

1 調査に至るまで

家ノ脇Ⅰ遺跡は平成5年の分布調査で遺物散布地とされた区域である。

その後平成11年島根県埋蔵文化財調査センターの確認調査により、家ノ脇Ⅰ遺跡及び家ノ脇Ⅱ遺跡の2区に区分された。

その後家ノ脇Ⅱ遺跡は平成13年に島根県埋蔵文化財調査センターにより発掘調査^{※1}が行われ、さらにその後八代三沢線道路が遺跡の南側山腹に敷設された。

当該遺跡は道路完成後の平成20年に至って発掘調査の対象地とされた。

この時点で現地はもとの地形が大きく変貌し、指定されていた調査範囲内もほぼ全域が工事作業用地となったため、旧地形は全く残っていない状態となっていた。

奥出雲町はこれの発掘調査に先だって平成19年度に遺跡の残存状況を把握するためトレンチによる試掘調査を行った結果、表土層のほとんどが滅失、或は攪乱・置き換え等で遺物・遺構は残っていないとし、これを排除してから全面発掘調査を行うこととした。

2 調査方法と経過

発掘調査前の措置として予定範囲について攪乱表土の重機による除去を平成20年4月から行い、第1回の調査計画指導会を経て5月から発掘調査に着手した。

調査区域の設定は地形に準じて5m方眼区分とし、旧道路から川へA～G・下流部から上流部へ1～30の区とした。さらにこれに準拠した地形を横断するトレンチ10本を設けて土層序や遺物・遺構面の検討を行いながら全面発掘を進めた。

この間、近世～近代の生産遺跡も多くみられることから、調査指導に民俗学分野からも加わっていた。

現地調査の経過は次のようである

家ノ脇Ⅰ遺跡 作業工程

4/ 1 攪乱表土の排土作業開始

4/15 調査指導会（第1回）

4/21 区割り設定

5/ 1 発掘作業開始（区割りに沿ってトレンチ掘りから始める）

この間 ・ところにより表土層下面に土器細片散布を認める。

・多くの桶埋設跡や火床部分などの近世～近代遺構を検出。

5/30 奥出雲町文化財専門委員会視察

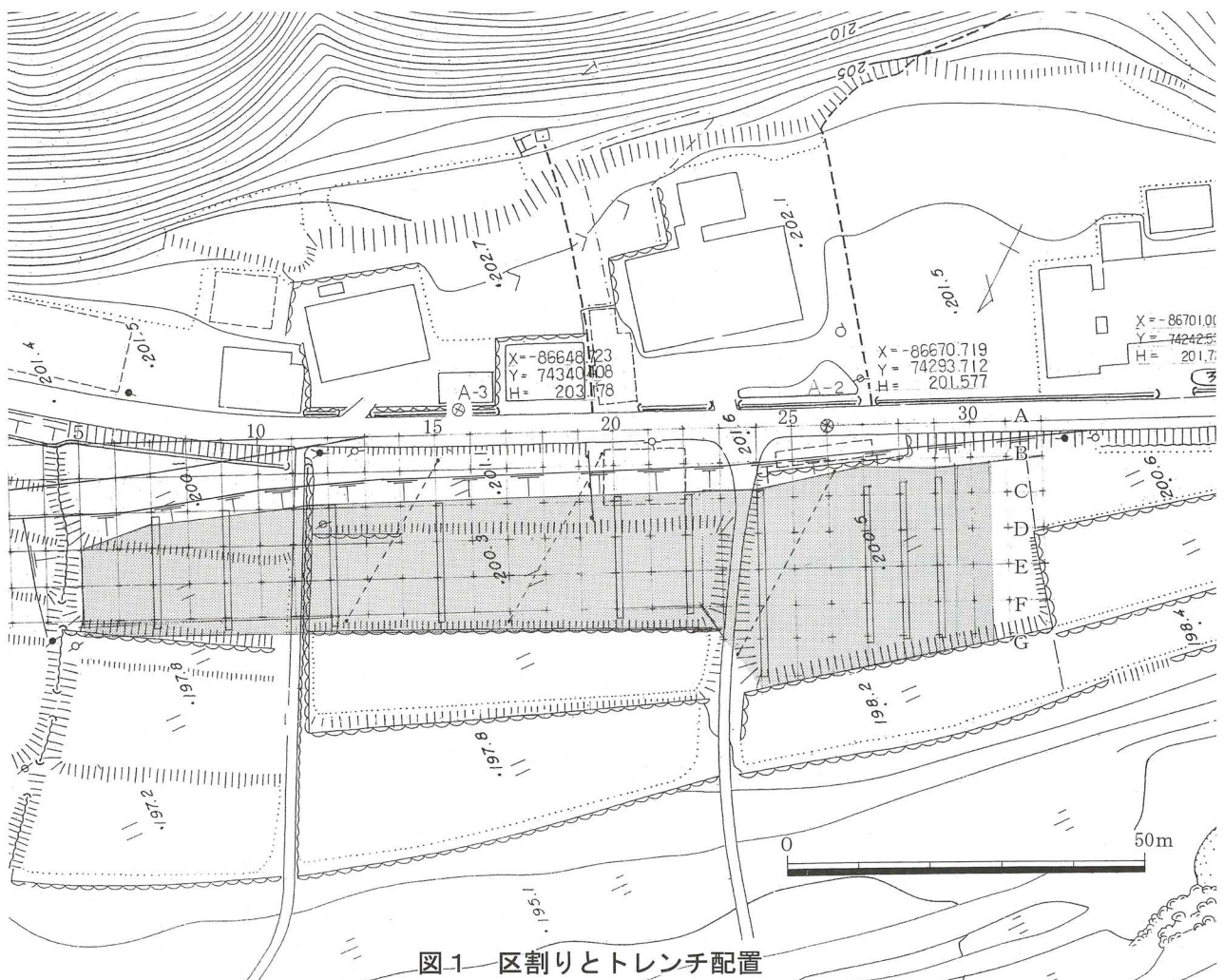
7/18 浅沼博氏 調査指導（民俗学） 遺構の多くは近世～近代の麻生産関係か

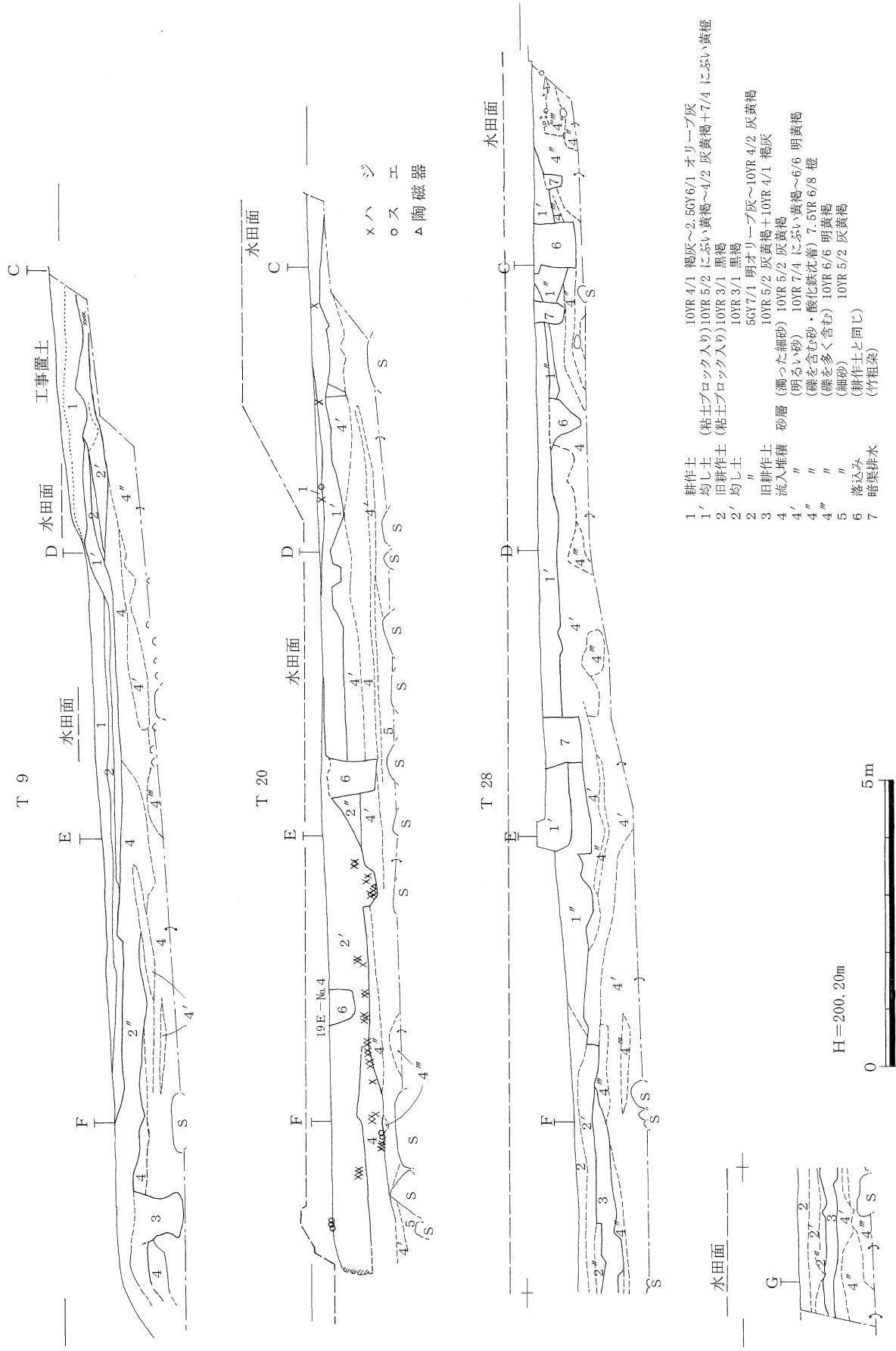
8/ 6 町内小学校教員研修 18名参加

- 8/28・8/29・9/5 仁多中学校生徒 体験学習 3名参加
- 9/3 調査指導会（第2回） 遺構・遺物の検討とこれからの調査の進め方について
- 9/13 ラジコンヘリによる空撮
- 11/1・2 町文化祭 展示に参加
- 11/11 調査指導会（第3回） 現地調査の完了確認
現場作業終了
- 11/19 調査概報を提出
- 以降、出土品・調査データ等の整理

調査対象面は川沿い一段高位の狭く長い水田区域で、概ね幅15~28m、長さ110mである。その間の高差は水田耕土を除いた調査開始時点で約1mほどである。

発掘調査は下流部から着手し、逐次上流方向へと進めた。なおこの区域内には真北方向に準拠した試掘トレンチ3本が先年に掘り込まれていて、これが設定した調査区の中を斜行する結果となった。





- 1 耕作土
- 1' 均し土
- 2 旧耕作土
- 2' 均し土
- 3 旧耕作土
- 4 流入堆積
- 4' 濁った細砂
- 4'' 明るい砂
- 4''' 礫を含む砂・酸化鉄沈着
- 5 礫を多く含む(細砂)
- 6 藤込み
- 7 暗渠排水
- 10YR 4/1 褐灰
- 10YR 5/2 灰黄褐
- 10YR 3/1 黒褐
- 5GY 7/1 明オリーブ灰
- 10YR 5/2 灰黄褐
- 10YR 5/2 灰黄褐
- 10YR 7/4 灰黄褐
- 10YR 6/6 明黄褐
- 10YR 6/6 明黄褐
- 10YR 5/2 灰黄褐
- 2.5GY 6/1 オリーブ灰
- 10YR 5/2 にぶい黄褐
- 10YR 3/1 黒褐
- 10YR 4/2 灰黄褐
- 10YR 4/1 褐灰
- 10YR 4/1 明オリーブ灰
- 10YR 4/2 灰黄褐
- 10YR 5/2 灰黄褐
- 10YR 7/4 にぶい黄褐
- 7.5YR 6/8 橙
- 10YR 6/6 明黄褐
- 10YR 5/2 灰黄褐
- 耕作土と同じ
- 竹粗朶

図2 断面図

設定した区割のラインに沿ったトレンチ（図）によってみると、基本的な土層序は上から石垣等で区画された農地耕作土や農地造成時の攪乱均し土（大部分は調査前に排土した）→旧表土（暗色土）下層部→砂～砂礫土（河川による流入堆積）→河床部（巨岩～礫）の順であった。このうち、遺物を包含するのは主として旧表土下面～砂質土上面であり、検出した遺構は近世～近代・現代のもので、最上層から掘り込まれた下底部位や杭～柱穴状ピットなどである。

II 位置と環境

家ノ脇 I 遺跡は斐伊川中流域の島根県仁多郡奥出雲町佐白（旧地名仁多町大字佐白地内前布施集落）に所在し、『出雲国風土記』の布施郷にあたり、斐伊川右岸に立地する。またこの付近には家ノ脇 II 遺跡、円満寺遺跡、原田遺跡などが、後背山丘の南面には時仏山横穴墓や殿ヶ迫横穴墓群が、そして山頂には水ノ手城跡（中世）が知られている。

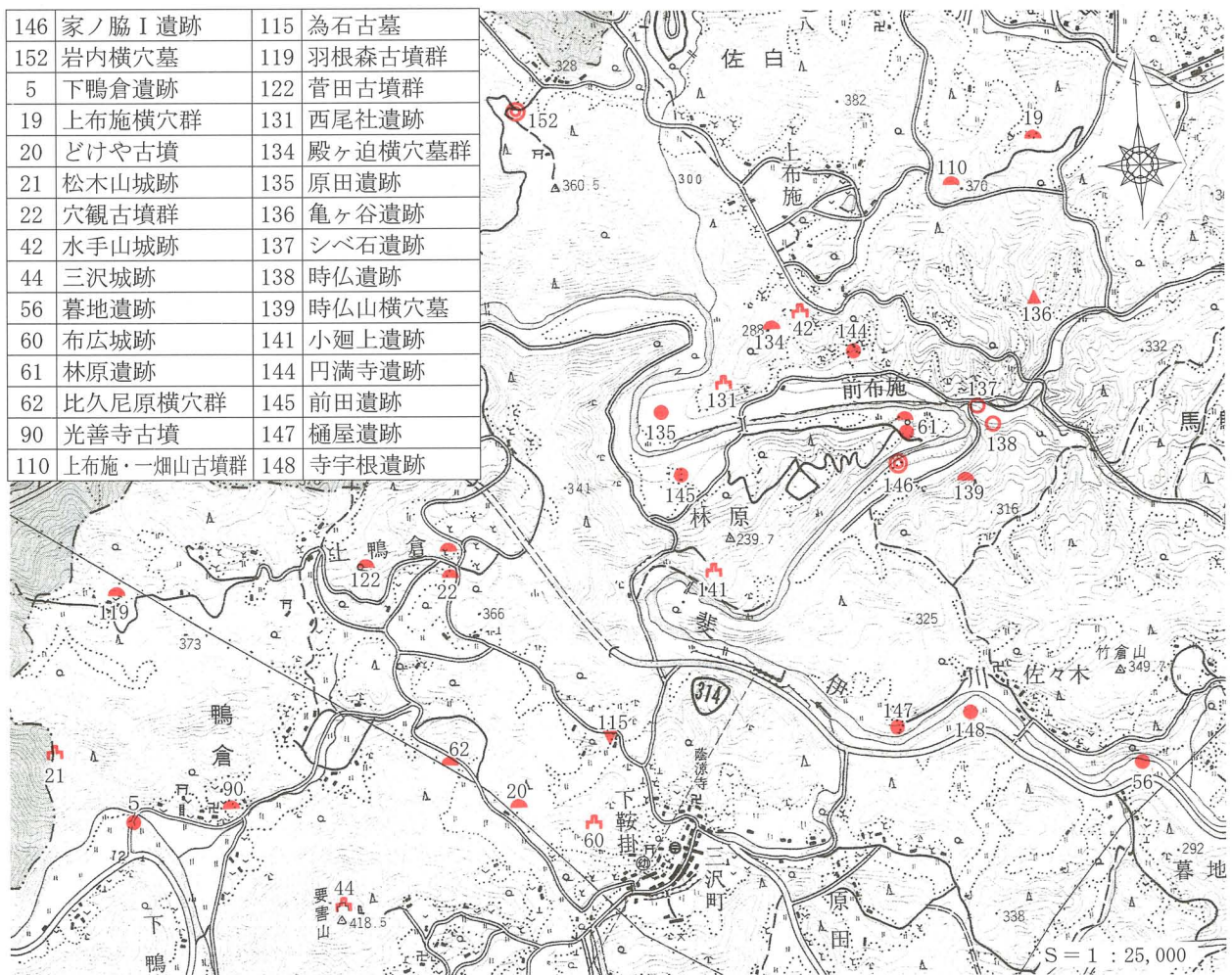


図3 周辺の遺跡

表 1 近隣地域の遺跡一覧

遺跡番号	名称	種別	主な時代	概要等
5	下鴨倉遺跡	散布地	縄文前期～晩期	縄文土器, 石錘, 土師・須恵器
19	上布施横穴群	横穴	古墳時代晩期	人骨, 土師・須恵器
20	どけや古墳	古墳		円墳
21	松木山城跡	城跡		山城, 郭, 帯郭, 土塁, 石垣, 堀切
22	穴観古墳群	古墳	古墳時代後期	前方後方墳・円墳各1基
42	水手山城跡	城跡	中世・近代	大堀切り, 炭窯跡・茶毘跡, 石臼等
44	三沢城跡	城跡	室町時代	山城, 郭, 土塁, 堀切, 櫓台, 石畳, 虎口等
56	暮地遺跡	散布地, 集落跡	縄文・弥生時代	縄文・弥生土器, 緑帯文土器, 土偶3体等
60	布広城跡	城跡		山城, 郭, 土塁, 堀切, 櫓台
61	林原遺跡	集落散布地	縄文・古墳終末期	縄文早期から晩期の土器・石器・土偶等
62	比久尼原横穴群	横穴	古墳時代末期	横穴5穴, 人骨, 須恵器
90	光善寺古墳	古墳	古墳時代後期	横穴石室か
110	上布施・一畑山古墳群	古墳	古墳時代	円墳5基
115	為石古墳	古墳	中世末	宝篋印塔7基以上
119	羽根森古墳群	古墳		円墳2基, 横穴式石室
122	菅田古墳群	古墳	古墳	宝篋印塔, 円墳2基, 五輪塔
131	西尾社遺跡	砦跡, 社祠跡	中世末, 中世	虎口, 社殿跡, 土師質土器, 古銭, 陶器
134	殿ヶ迫横穴群	横穴墓	古墳時代後期	横穴5穴, 人骨2体, 歯牙17ヶ, 耳環等
135	原田遺跡	古墳, 集落跡等	縄文～近世	縄文・弥生・須恵・土師・陶磁器, 馬具等
136	亀ヶ谷遺跡	製鉄跡, 散布地	古代	鉄滓, 縄文・弥生・須恵・土師, 石鏃等
137	シベ石遺跡	社祠跡	中世末～近世前	社祠基壇
138	時仏遺跡	マウンド		小マウンド
139	時仏山横穴墓	横穴墓	古墳時代	横穴1穴, 伏臥人骨1体, 玉類
141	小廻上遺跡	城砦跡	中世	物見郭
144	円満寺遺跡	寺院跡, 散布地	奈良～室町	土師・須恵・陶磁器, 柱根, 土馬, 甕, 横瓶等
145	前田遺跡	散布地	縄文～中世	縄文・弥生土器, 土師・須恵・陶磁器
146	家ノ脇I遺跡	散布地	縄文～中世	縄文・弥生土器, 土師・須恵・陶磁器
147	樋屋遺跡	散布地	縄文時代	旧河岸跡, 麻蒸土杭, 縄文土器
148	寺宇根遺跡	住居跡, 墓地等	縄文, 弥生時代	縄文・弥生土器, 垂飾り・耳栓, 配石墓
152	岩内横穴墓	横穴墓		土器敷屍床

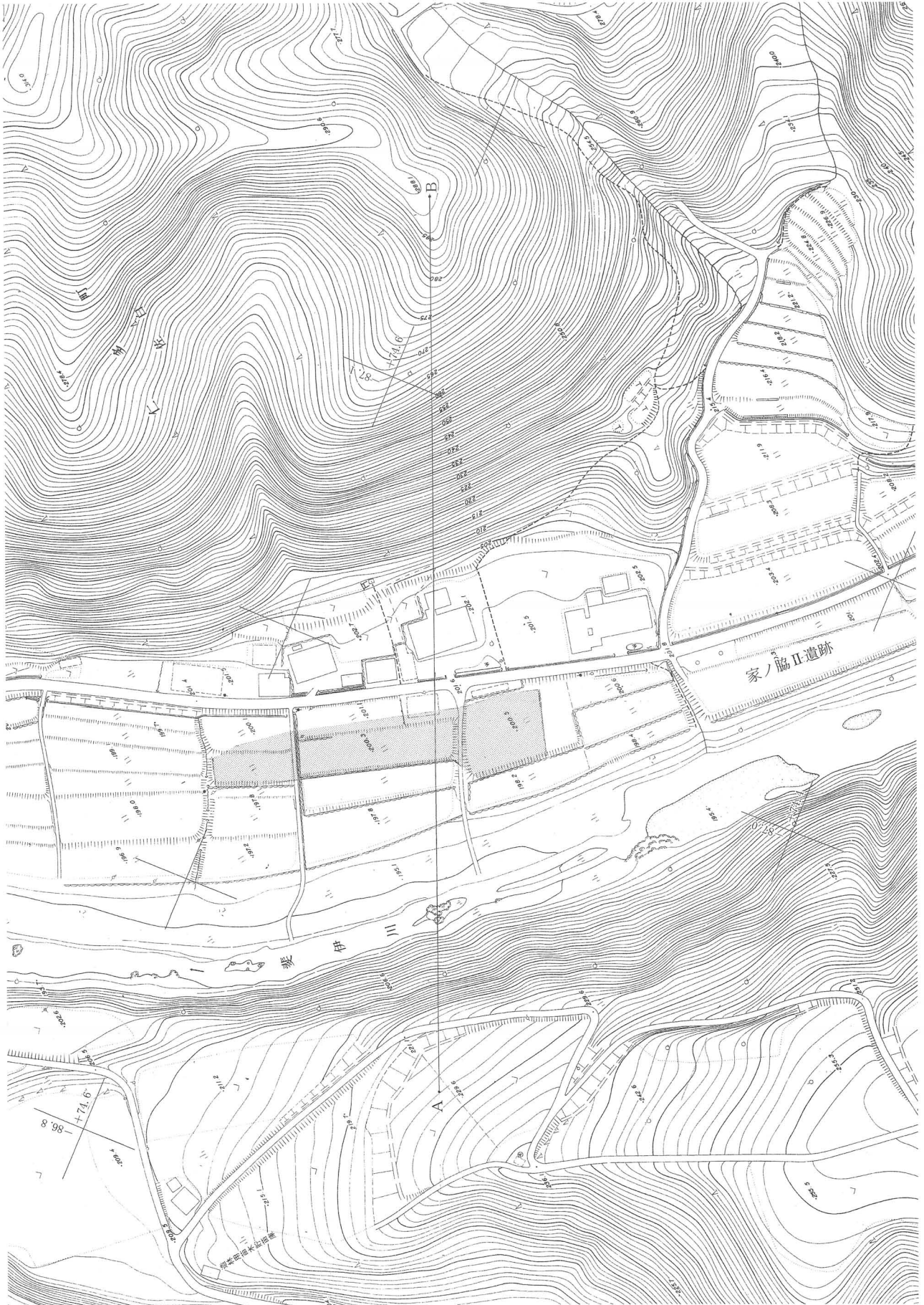


图4 地形图

当該遺跡の立地地形は、斐伊川の最も蛇行する区域のうちの直線谷状をなす。地質的基盤は花崗岩で厚く風化が進んでいる。

この位置の横断地形は、狭い箱状で底幅100m程度であり、平水時は約3分の1程度の流れであるが、かつては数十年に一度はほぼ谷底低地の大部分が冠水したことがあり、床谷に区分されよう。また谷両側面は急峻であり、特に左岸は急な崖面をなし、右岸側の低地は常水面から約5mほど高い粗砂堆積地で水田となっている。また右岸側には開折谷（当地では迫さこと言う）があり、その沖積錐部分は若干高位であったことから、ここに民家が所在した。

なお付近の常水流勾配は約500mで約2mほどであり、流れはやや速い。

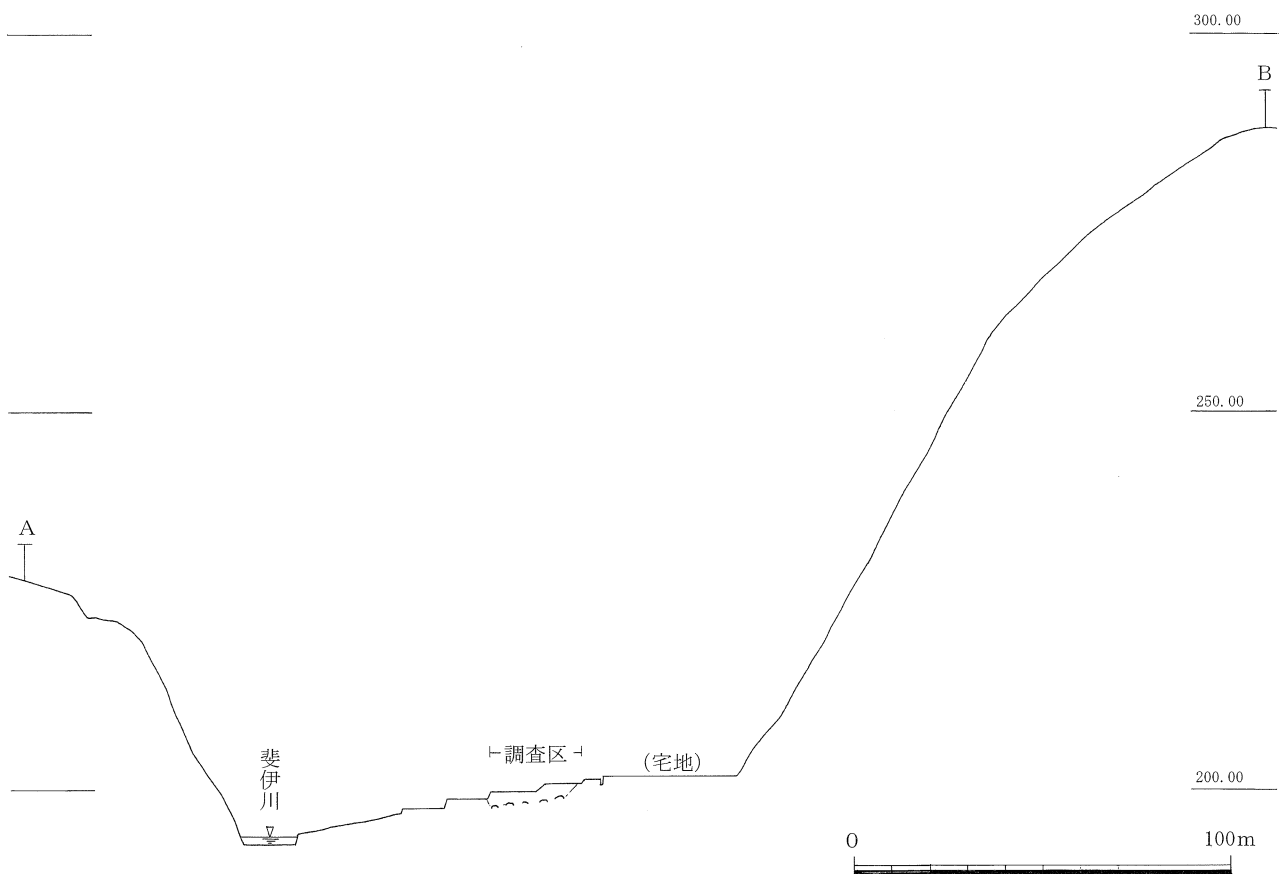


図5 家ノ脇遺跡 地形横断面図

また、皇国地誌※3によると仁多郡の村ごとほぼ全域で、明治初年には麻苧・煙草・人参等や炭・鉄などの物産が年産額や販路とともに記載されている。当該地においても昭和10年代までは細々ながら大麻又は苧麻ちよまの生産は続いていたとのことである。

当該遺跡地点の開発について伝えるところによると、民家の歴史は江戸中期以降で、集落移転時には3戸。洪水はその内数度あって床下浸水も伝えている。農地はかつては砂質の畑地で、水田になったのは昭和10年代に上流約1.5kmに井堰を設け、張り出し尾根部の下に導水トンネルを設け水路を引いて、やっと稲作を始めた。しかし砂質土のため漏水著しく上田とは言えなかった。

調査範囲の旧小字地名は図のようであり、上流部から「殿畑ケ」「家廻」「彦地」に該当する。なお上流部及び山手側隣接は「家ノ脇」「立尾」そして「柿添」となっており、それぞれの語源・表現は拠点的居住地とその周辺、さらに外垣を意味しているとみられる。また「殿畑ケ」は幕藩時代の行政の出先き地に関するものか。例えば登米の川船運輸に関連するのであろうか。

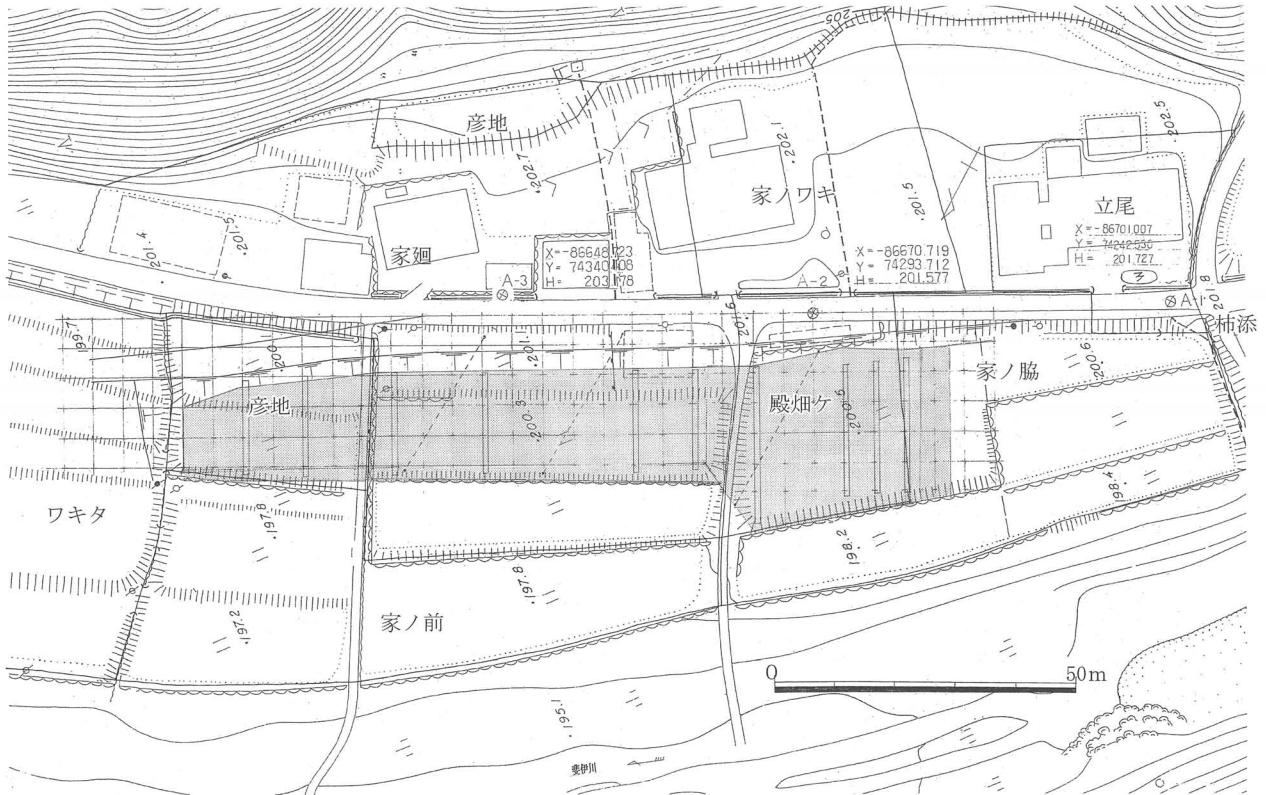


図6 調査地の小字地名

Ⅲ 遺物

検出した遺物は、今次の集落移転に際して投棄されたとみられるものを除き、ほぼ近代以前とみられるものを採取した。そのほとんどが細片である。最も多いのは土師質土器片、次いで古式土師器・弥生土器であり、中～近世の陶磁もあり、縄文期粗製も数点認められた。そのほか、一文銭やタバコのキセルや若干の石器類もある。しかし伴う遺構は無く散布状態であった。

採取遺物総数は1822点で、内訳は次のようである。

縄文土器	18	須恵器・須恵質土器	55	石製品・石	26
弥生～古式土師器	404	須恵系区分不能	16	その他	58
土師質土器	376	中～近世陶磁器	53		
土師系区分不能	635	近代～現代陶磁器	181		

1 縄文土器

縄文土器片と判断されるものはいずれも粗製で18片であるが、そのほとんどが磨耗した細片であり、図示し得たのは3点のみである。これらの縄文土器片の多くは調査区21Eで検出した。

1は口径30cm以上とみられる甕の口縁部分で外面は右下から左上へ擦り上げ、内面は左下か垂直に近く右上へ同様に引き上げての調整。口縁部の幅約7cmほどは外はナデ、内は木端状用具とみられるヨコナデ、口唇は外尖り様に指頭でナデているが外反はしない。砂粒を含む胎土で器壁の厚さは6～9mm。黝斑あり。外面には剥離損傷あり。

2は同様に粗製のヤヤ内傾気味の口縁部で口唇上面に刺突状の刻み目が巡り、外面へはみ出している。外面右上り気味の擦り上げのち口縁に近い2～3cmはそのあとヨコナデ、内面は全面ナデで、胎土には砂粒を含む。

3は薄手の口縁部であるが器形は不詳。内面ナデ、外面二枚貝腹縁によるヨコ条痕、口唇上面は薄く外下り気味に凹線のある面としている。同じ施工工具を用いたのであろうか。

このほかの細片も多くは二枚貝条痕のものが認められる。

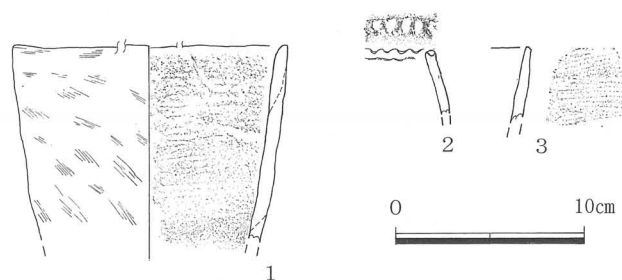


図7 遺物図(1)

2 複合口縁土器

弥生後期～古墳前半期ごろの土器は13～14・C～D区にあたりを中心に、暗色土下面に集中して出土した。

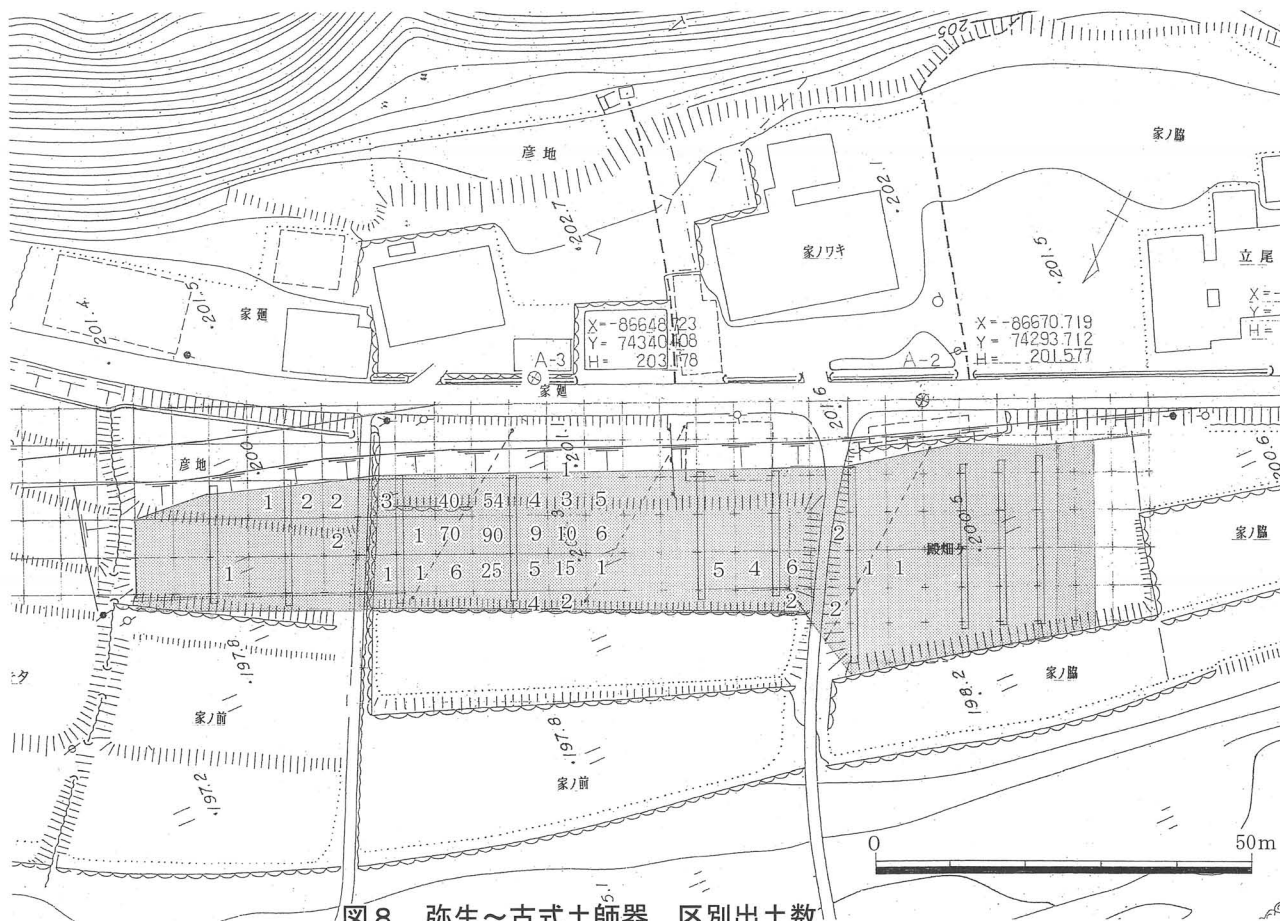


図8 弥生～古式土師器 区別出土数

1) 口縁部

4～23は口縁が短く内傾する甕又は壺形土器の一群である。

口縁外側面に擬凹線を1～3条巡らし上端を尖り気味にするもの。(4・8・9・10・14・15・18)と、さらに下端へも尖り出すもの(5・12・13・19・20・21・22・23)があり。口縁外面を平坦な面とし上端を尖らすもの(6・7・11・16・17)に区分し得る。

24は口縁が短く直立し、3条の擬凹線を巡らせ、口唇上端は外尖り気味としている。これらの頸部のくびれは曲線状のものが多いが、8と11は強く屈折している。

調整は口縁～頸部は内外面ともヨコナデであるが、胴部は外面にタテのハケ目(4・9・10・20・21)や、それをナデ消したもの(11・12・19)があり、また胴最大径の位置よりやや上にクシ状工具による斜行する刺突文様を巡らすもの(9・12)がある。

このような施文の破片については後段に述べる。

胴部内面は斜めに搔き上げたクシ目条痕のもの(4)1点のほかは削り放し(5・9・11・12・19・20・21)である。

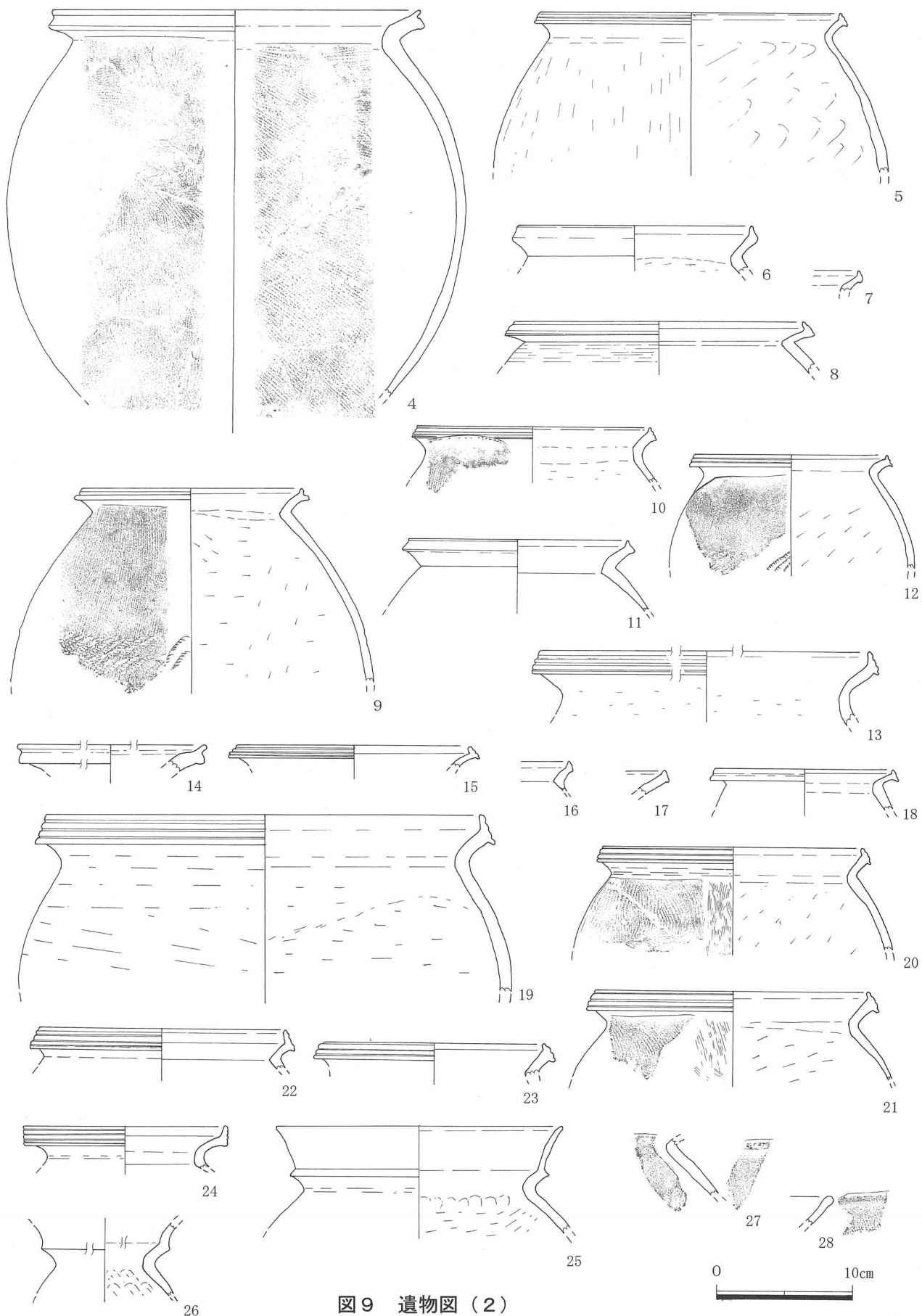


图9 遗物图(2)

24は口縁が内傾でなく短く直立するが、擬凹線を巡らすもので、上記の一連のうちと思われる。この4～24はその口縁の造りが弥生中期の様相を引き継いでいる一群とみられる。

25は顕著な複合口縁で口径21cmを測る。口縁は薄く外反気味に立ち上り口唇は外方へ尖り、口縁下端は下方からくり上げて強くアクセントを付けて横に尖る。口縁外面に施文はなく、頸部からは内外面ともヨコナデ。頸部以下胴へは外面タテハケのちナデ、内面は削り放しで薄手造りである。26もほぼ同様のもので、厚手であり胎土、焼成ともに良い。この2点は複合口縁の盛期以降であり、古式土師器の後半期とみられる。

27は頸部の破片で形姿が明確でないが、胴から口縁へ強く屈折するもののようである。胴部内面は削りのち頸部近くにはハケ目が残る。外面頸部近くには細かいヨコハケ目が残る。28はかなり開く口縁部片で、口縁端は上面をやや平坦にして外方に肥厚する。外面には粗略なカキ目条痕が残る。この2点(27・28)の器種は分からないが、甕・壺のようであり、調整・焼成などから古墳時代に入る土師器であろう。

2) 施文土器片

29・30は竹管文の破片である。29の器形は判然とはしないが、上記のものとは異なる姿のものであり、内外面の焼成色調の差異からして口縁部ではなく、上下端に突帯のある偏平球形の特殊壺の胴部であろう。施文は直径6mmほどの円形文とその上方に直径の大きい刺突文の列がみられるが、欠損して明瞭でない。暗褐色の外面は削りのちナデで、内面は明橙色でナデ。胎土・焼成ともに当地には見かけないもので、他からの搬入品かと思われる。30は厚手であるが、開いて外反りに立ち上るやや大型の壺の口縁部分であろうか。横に2段以上の施文があり、円形の竹管文2段と、弧状の半裁竹管文が向きを変えて2段以上押捺されている。胎土・焼成などは在地のものと同じと見られる。この2点(29・30)は竹管文を主とする装飾性の特別な器であったと思われる。

31・32・33は甕形土器の肩部に多条線を巡らしその上に羽状刻文を入れたもので、ナデた地に櫛描きしてヘラで刻線を入れている。

34・35・36は同様に肩部に細い凹線を幅狭く巡らせて施文帯とし、その上に櫛描きの斜線を施す。35・36では施文帯が3段認められる。

37・38は肩部施文がヘラ刻みノ字形の施文とみられるものである。

39～44は肩部施文が上下2段あり、いずれも櫛目状用具の斜刺突による短いノ字状施文である。これらの器面調整はほとんどがハケ目であるが、40のみはナデである。

45～46もほぼ同様の施文であるが、上下段の施文が接して施文帯が幅広くなっている。器壁面は多くは肌が荒れて不明瞭であるが、46はヘラ磨きである。

これらはすべて複合口縁の器であり胴～肩部の施文破片(31～56)はすべて内面がヘラによる削り放しである。

以上のように施文に着目して時代を追うと次のようにみられる。

29は地域外から搬入された弥生後期

30は当地域で制作された弥生後～末期

31～38は弥生後期～古墳時代前期前葉

39～56は古墳時代前期

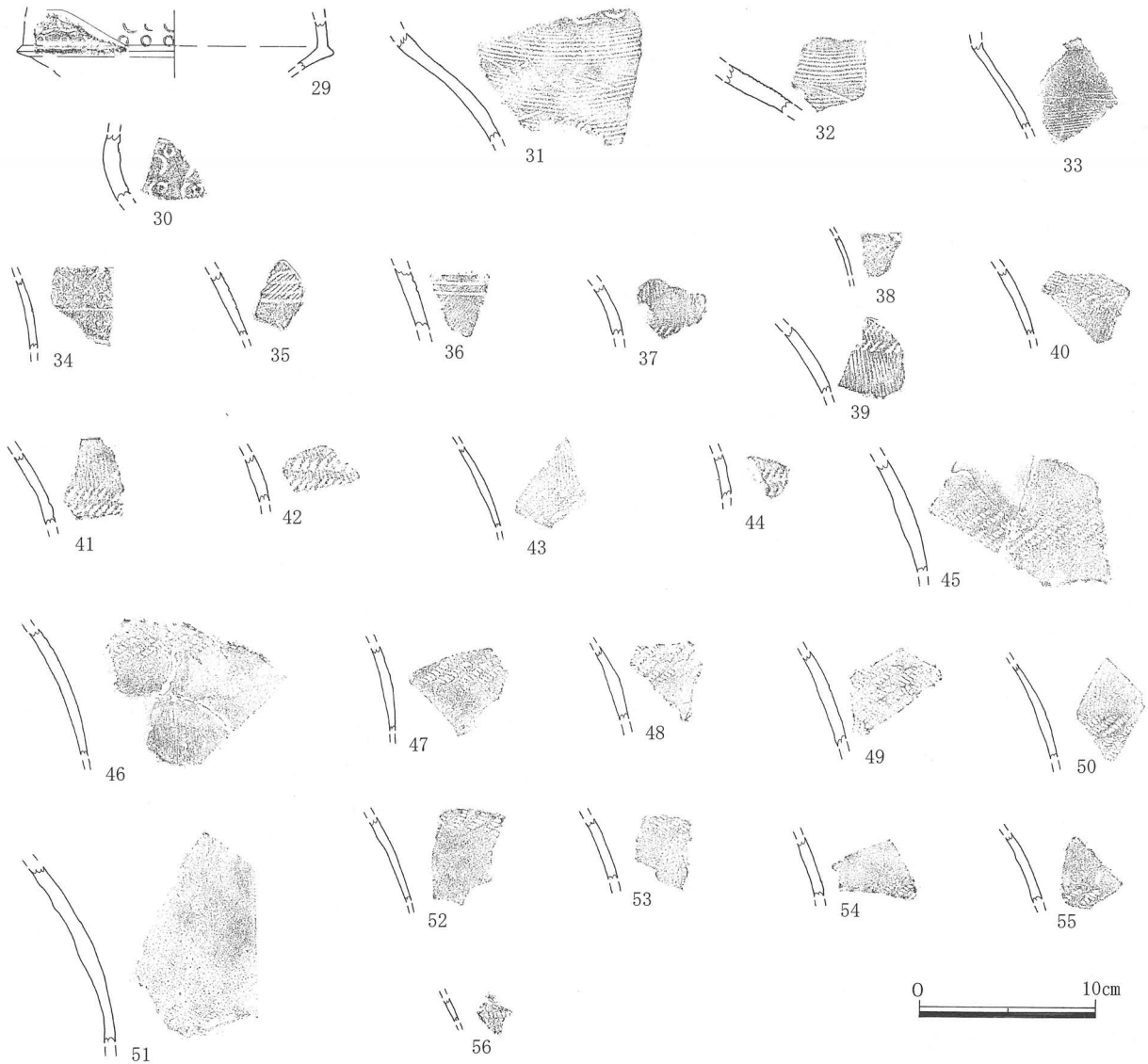


図10 遺物図(3)

3) 底部

57～60は胴下端が底の近くで窄む形姿で、概ね小さい平底であるが、57はわずかに凹む（上げ底）ものとみられる。外面はヘラミガキ（57）、ナデ（58）、ハケ目（59）などが認められる。内面は削りで最下底部は尖り気味（57・58・60）となるが、土を詰め補っているもの（59）もあり。指頭ナデ又は搾りの襷がみられるもの（58）もある。

61～63は底面へ直線状に集約する姿のもので、底面は平底である。61は外面タテハケ目、内面には交錯するハケ目状削り痕がみられ、内底面は丸く仕上げている。底径は約9cmと他よりやや大きく、また接地底面部分に粘土クズ片の付着もあるなどからすると器種も異なるかもしれない。62の外面はナデであるのか或は泥漿塗付であろうか。63は外面に浅いハケ目が認められる。内面はそれぞれ削りナデ(62)、削り(63)であり、接地底面はいずれも削りである。

64は丸味の胴部下端を平底に削り出したつくりで、内面は底面だけナデで胴部は削りあげている。外面は剥落のため不明。部厚い小形品である。

65・66は厚さ1.2cm以上で、大形品の底部付近の破片である。内面削り放し、外面は粗略なナデであり、66は丸味のある底面の一部を含むかとみられる。

以上底部についてみると57～63は弥生中期の器形を引き継ぐものであり、65・66は丸底の、例えば大形の甕の一部かとみられ、古墳時代に属するものと思われる。

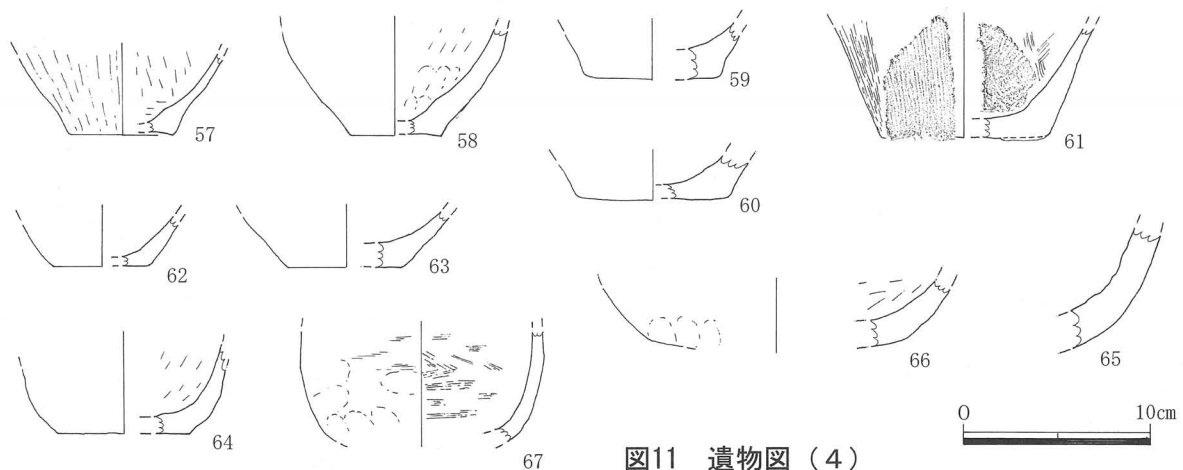


図11 遺物図(4)

3 土師器

1) 単口縁(68～81)

68～76は概して厚手造りの大形甕の口縁部である。多くは22E区あたりで出土している。いずれも口縁が曲線を描いて大きく外反する。口唇はナデで丸く収める(68・69・74・75)ものと、やや外尖り気味に収めるもの(71・72)がある。口縁部内外面はヨコナデ、頸肩部の外面は削りのち粗ナデ、ハケ目調整痕の残るもの(70・74・76)もある。頸下端以下の内面は削り放しである。胎土に粗大砂粒を含むもの(70・71・72・74)もみられるが、概ね細砂粒を含む土を用いて焼成は良い。なお68の胴部外面には一部に煤が付着している。

77は口縁が内窄みの無頸壺である。口唇は内側へ胎土の折り返しの痕跡があり内外をヨコナデで丸味に仕上げている。胴部内面は削り、外面は削りナデのようである。なおこの口縁～胴上端部の破片は焼成時の滲炭で壁芯まで暗色となる黝斑部分であった。

78・79・80は外反りにやや短く開く口縁片である。全形姿は不明。78は胎土緻密で口唇部分は

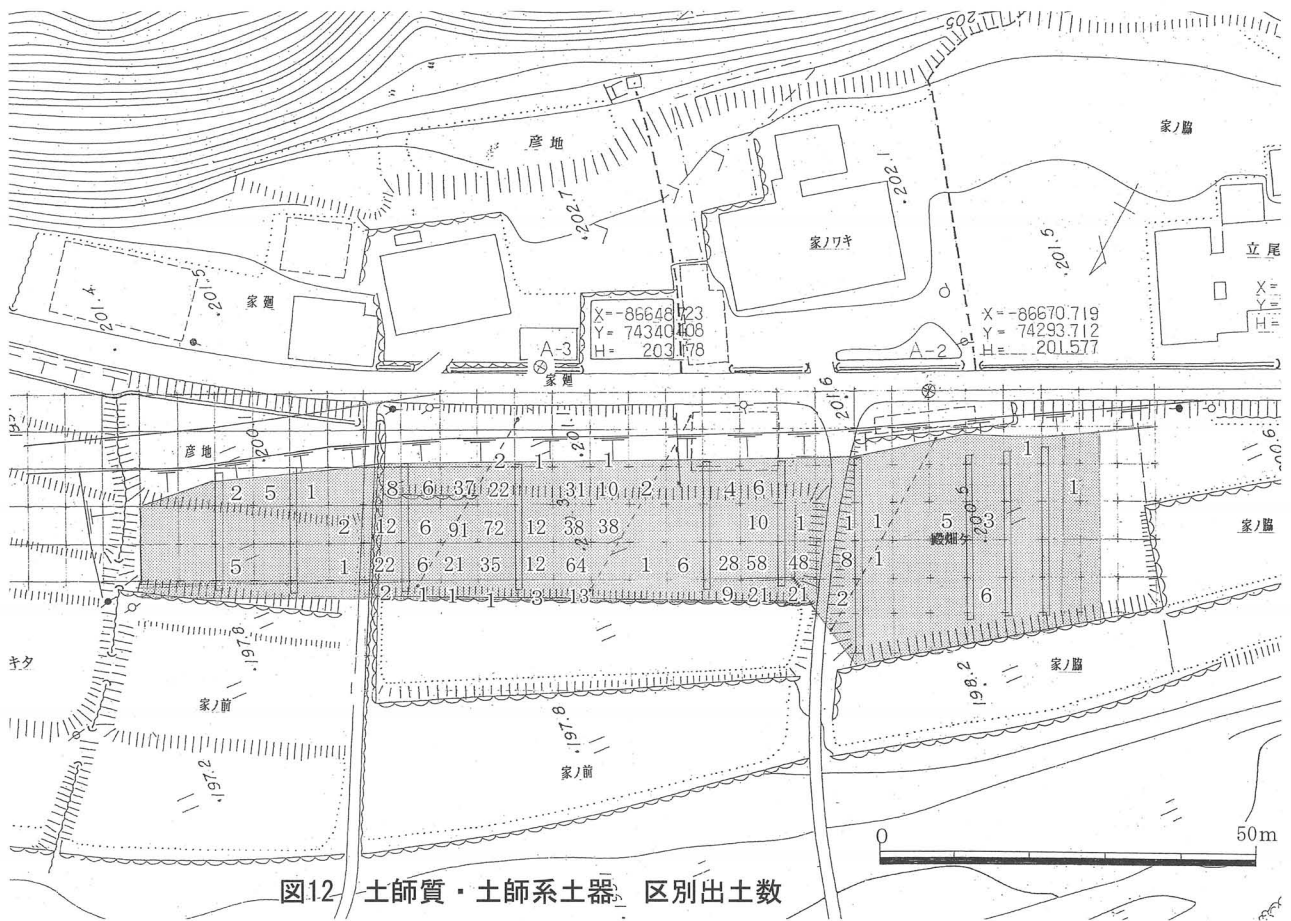


図12 土師質・土師系土器 区別出土数

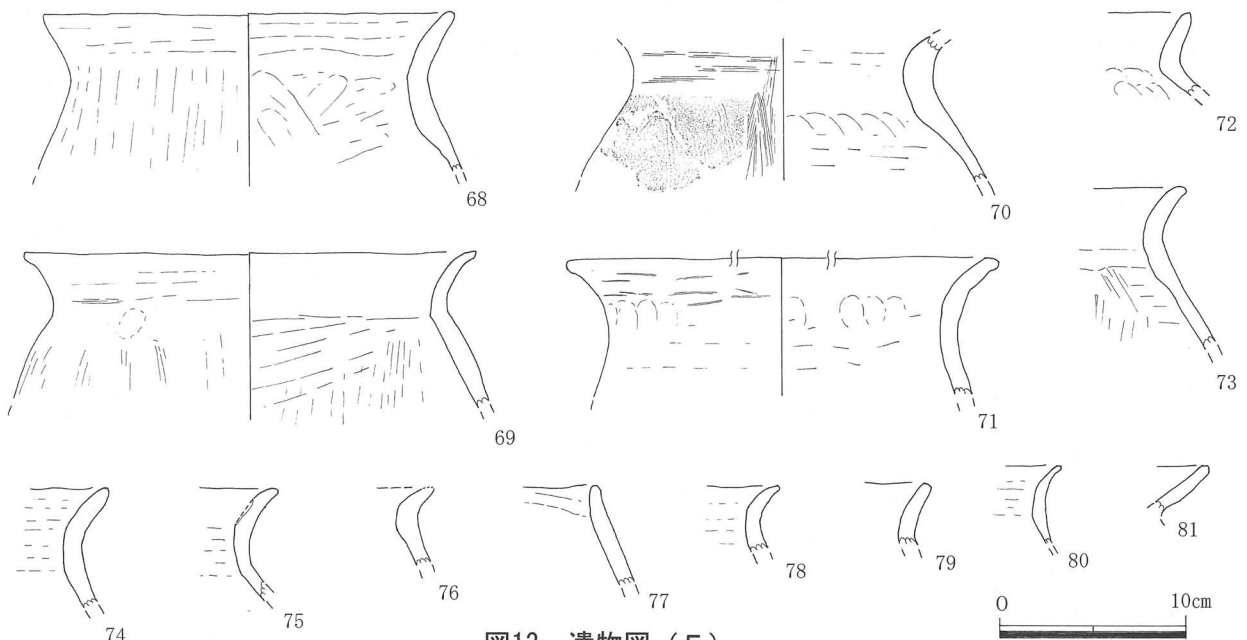


図13 遺物図(5)

やや平坦とし外方へ尖らせる。ヨコナデで焼成もよい。79は胎土が粗く粗砂粒も含む。内外面ともナデ仕上げで口唇は丸味であるが外面にはヒビが認められる。80の口縁は頸部から薄くのぼしながら外反させた薄手の器で、口唇は薄く尖る。内面は幅の狭いヨコ引きナデの調整、外面はヨコナデで肩部以下にはタテハケ目が認められる。胎土は緻密で焼成もよい。

81は屈折して強く外反し、やや内湾気味に立ち上る口縁部分である。小形の広口壺の口縁であろうか。内外面ともヨコに強く扱きナデ整形している。細砂質の胎土で焼成はよいが、器表はザラつく。

以上の土師器は概ね律令期ごろと想定したい。

2) 土師器坏

平底の坏或は小皿状のものを一括して記す。これらはロクロ挽きで胎土は概して緻密で水簸したものであろうか。

82は胎土に砂粒をまれに含む良質で堅く焼成し、白色気味の坏である。ロクロ挽きで体外面は、底面からわずかに上って外反し直線的に口縁に到るが、内面は中ほどに厚味を持たせて口縁端は外方へなでて尖り気味に収める。内外いずれもナデであり、内面は2段ナデの様相である。内底面は回転ナデで中央が薄く、立ち上りとの界はゆるく移行している。静止糸切りの底面は広く大きく、切り放しのままである。

83は橙色に堅く焼き上げた内湾気味の小平で、胎土は緻密である。内面は底面と体側の区別のない曲面、体外面はロクロ挽きの引き上げが2段ほどで、口唇は丸く収めている。底面は細い糸による回転糸切りである。口唇部に油煙の痕跡が7ヵ所以上認められ、灯明皿であったことが明らかである。近世の品であらう。

84は口縁部分を欠くので全形は碗形であらう。胎土は緻密で焼成は良い。ロクロ挽きで、内・外面ともに幅の狭いヘラ状工具による回転引き上げ痕が残るナデである。内面中央が最も深く、

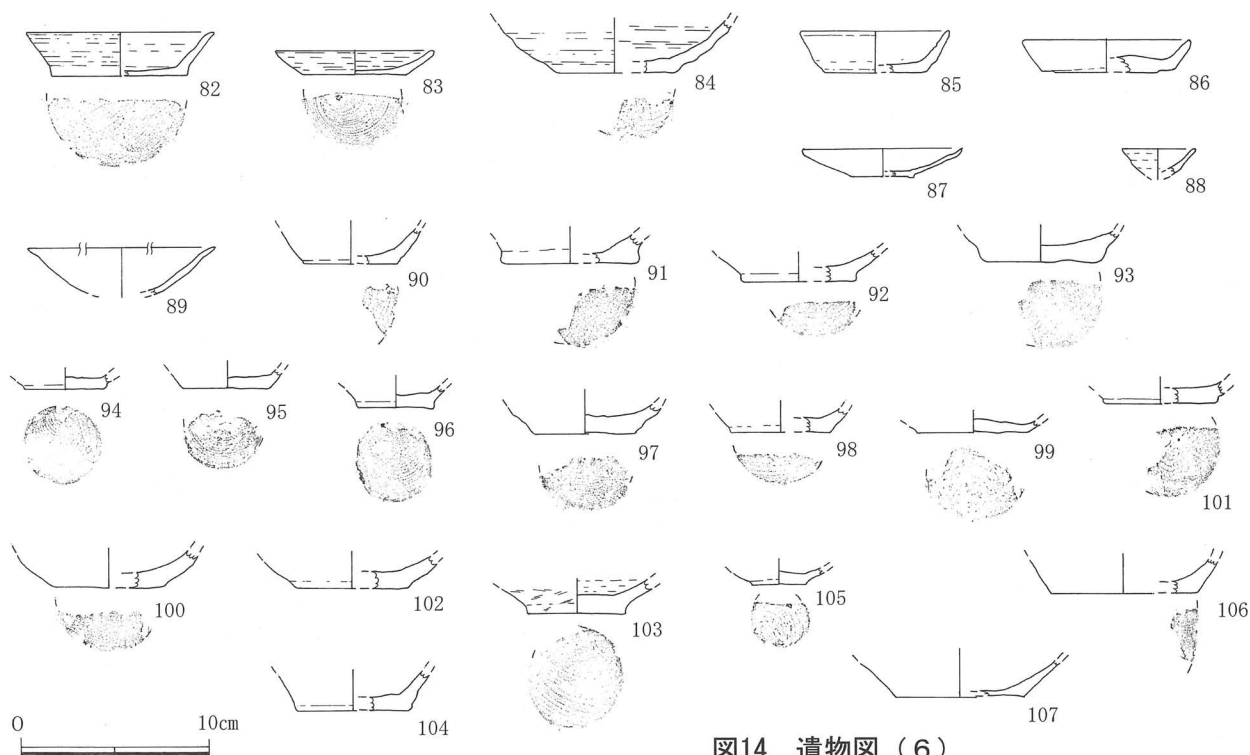


図14 遺物図(6)

坏より土形で、山茶碗形とみられる。底面は静止糸切りであろうか。

85は83に類似する製作のやや小形品で渦巻状のロクロ挽き痕が著しい。底面の切り離しは糸切りであると思われるが磨耗して不明瞭である。

86は胎土に粗砂を含み、整形も不良で手捏ねまがいの小皿である。底面外周部分にはわずかに糸切り痕がみられるものの再度切り直状で不安定な底面となっている。見込み中央はやや高く盛り上り、体部との界は強い扱いで最も深い。体部はやや外開きで内弯気味にごく短く立ち、体部上面を丸く収めて口縁としている。内外面ともに肌は荒れているが簡略なナデであろう。

口縁片についてみると、87・88は83に近い内面の弯面をなす器形で坏の部分である。2mmほどの厚さで外面（体部）は前者が2段のロクロ挽き上げで、口唇はわずかに内弯気味とし、87は挽き上げ段の界線がシャープな稜になっていて工具を異にする。また口縁は直線的に上る。

89はやや大ぶりの強く開く体～口縁部分で厚さ約4mmほどである。体部はわずかに内弯気味、口縁部は薄くしながら若干外反気味に厚さの均一な造りである。体下方部内面に広く黝斑があり、外面は全面に煤が付着している。

またこの口唇部3点には油煙の焦げ付きが断続しながら顕著で、灯明皿であることが明白である。

底部片についてみる（90～107）

90～93は見込み底が窪み、碗形をなすもので、いずれも糸切り底である。

90は水簸土でやや軟質に焼き、内面は滲炭で黒色となっている。小坏形で、体部外面はやや粗略なナデ、内面は見込み部と体下端との界にわずかにアクセントのあるロクロ挽きナデである。底面糸切り部には縁に1mmほどの段差で2段切り状を示す部分がある。

91も90に類似するが、やや大ぶりである。見込み底面は磨耗して明確ではないが、やはり内黒のようである。底面の糸切り痕も磨耗しているが、やはり縁辺部に2段の糸切り痕が認められる。90・91はともにやや軟質焼成で内黒の造りであることから瓦器に区分されよう。

92・93は上記と同じように焼成は軟質である。糸切り底面と体下端の間に低高台程度の段差があり、体部は内弯気味に開いて立ち上り、見込みはゆるく窪むやや大形の坏のようだ。

94～97は見込み中央部がほぼ平坦でロクロ挽き回転痕が認められる皿形の底部であり、体部の立ち上り状況は不明。94・95・96は胎土が緻密で水簸のようであるが、97には砂粒が認められる。焼成は94は良く、97はやや弱い。糸切り底面はいずれも若干凹み底状をなすが、焼成のひずみであろうか。

98～102は見込み底がフラットなもので、底面直径6～7mmほどで皿形をなすと思われる。底部の厚さは厚く、体部下端は強く開きながらやや内弯気味に立ち上るとみられる（98・100・102）。胎土は緻密で、すべて糸切り痕。焼成はやや軟質で、内外淡黄橙色である。

103はかなり厚手の土器で、見込み底面は若干盛り上りをみせてフラットで、体部は大きく開きながら内弯気味に立ち上る。碗形であろうか。底面は糸切りでいびつな円形である。胎土は緻

密、軟質の焼成で内外淡橙色である。

104は見込み底はフラットでロクロ挽き痕があり、内底面と体部への移行にはアクセントがつく。小形の皿であろう。体部外面は直線的、内面は若干内弯気味に立ち上る。底面には糸切り痕はなくナデている。胎土は緻密、焼成は軟質で淡黄橙色である。

105・106もほぼ同様の小形杯の底部片であり、底面は段違いの糸切り痕である。

107は無施釉の陶質の器で山茶碗のような形かと思われる。底面は凹み、見込み中央は凸起して、茶溜りには自然釉が認められる。底部器壁には極く薄い。外反する体部の外面は、ほとんど直線的に回転削り、内面には幅7mmほどのロクロ挽き痕がみられる。胎土緻密で焼成良く堅い。山茶碗様で中世以降かと思われる。

3) その他の土師器

108は高杯の脚部で、脚端は欠けている。胎土には細砂を含むが良質で、焼成も良く橙色である。外面はヘラで磨き、内面の筒部は指頭でナデ、開脚部への移行部には指頭圧痕がみられる。杯下端に突起をつくり筒に挿した造りで、ヘソ状に折れ残りが認められる。脚高の低い高杯の部分である。

109はやや大ぶりの杯状とみられる薄手の体～口縁部分である。砂粒を含む胎土で焼成は弱く、内外面とも磨耗が著しい。口縁から口唇へと薄く挽き上げ、口唇は尖りとなっている。これは高杯の杯部の破片であろうか。

110は底は糸切りで底径5cm弱、高さ1.5cmほどが最も細く、その上は挽き上げての杯状底部となっている。この杯内底中央に直径5mmほどの孔が深さ1.4cmほど破面に認められる。これがどこまで達していたかは不明。また用途或は目的等も分からない。器種については底面が糸切りのままで縁辺にバリが認められることから逆位に用いた蓋ではなく、造り出しの台が付く壺のような形が思われる。

111は糸切り底であること、上面はナデて凹入していて杯底を思わせる。やはり110に類似する

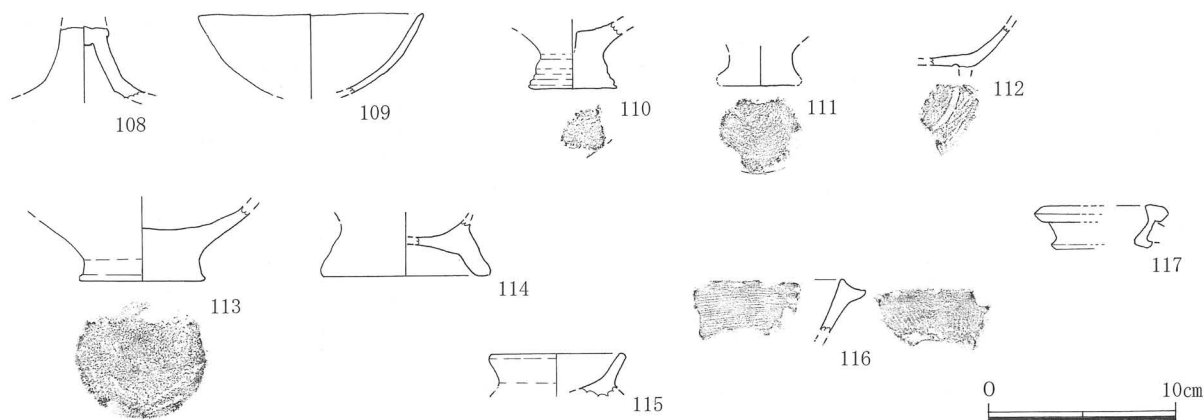


図15 遺物図(7)

ものであろうか。

112は坯の底～体部で剥落しているが高台の痕が残る。胎土は緻密で、内外面ともにロクロ挽き痕が明瞭である。底面は回転糸切りで、外縁に高台を付け、高台裏はナデている。

113は部厚く重量のある造り出しの台座部分である。外面は肌が荒れているが、ロクロでやや粗雑に挽き上げたままのものとみられる。器内底面には渦巻き状のロクロ挽き回転痕が明瞭であり、台底面は回転糸切りである。上部は坏状であるのか甕のような形かは推定し難いが大ぶりの器の部分である。

114は器の脚台部分の施釉のない破片である。まれに砂を含む緻密な胎土で焼成良く、表面は酸化的、内面は還元的な焼成色である。造りは削り出しの強くふんばる台部で、台裏はヘラ削り出し。上面の器内底面も同様にヘラ削りであり、台部表面はヘラで略磨きである。全器形の推定は難しいが、例えば台座のある壺のような品かとも思われる。

115は無施釉の撮みの破片であり、緻密な胎土を用いた酸化的焼成で白く、表面は泥漿塗りで淡橙色である。製作はロクロ挽きであり、厚手のやや大形の撮み蓋の破片である。

114と115は中世の所産であろう。

116は焼きの堅い陶質土器で口縁部分とみられる。体部は薄手で開き気味に立ち上る。口縁部の断面は横に張り出す三角形をなし、上面がゆるやかな凹面をつくって蓋受け状となっている。内面はヨコ掻き調整、外面にはタテや斜行するネコ掻き状の条線が認められる。胎土は緻密で器壁芯部は暗黒色であるが、内外表面のみにぶい橙色となっていて基本的には還元焼成であったことが思われる。器形については事例に乏しいが土鍋様のものが想像される。中世の所産であろう。

117は剥離した口縁部の破片である。口縁部分の断面は玉縁状に近い造りで、直下から外面は剥離痕が認められ、1 cmほどで強く折れて胴部へ接着していたとみられる。口縁部内面はヘラで強くナデている。この器の本来の形姿はどうであるかは分からないが、例えば肩の張る厚手の大形の胴部の上端に無頸壺様の張り付けた口縁部分のようにもみえる。

4 須恵器

118は厚みのある高坏で、脚部はあまり高くなく2方に透し切り1段を開けている。脚端と坏口縁部を欠くが、坏は薄く見込み底は若干凹み、体部は開いて口縁に至り、口唇は丸く収めるだろう。脚部は透し孔の下端あたりに脚筒部と裾部との界線を浅く造り強く開脚するものとみられる。胎土は緻密、焼成はやや弱く、器壁の芯部は酸化的である。

119は上記にほとんど同じであるが焼成は良好。脚筒部の透しも2方であるが線刻で表現したものである。見込み底中央は上記より強く凹み脚頭との接着を示している。坏内面には重ね焼きを示す焼きむらが認められる。

上記2点の高坏は奈良期の所産とみられる。

120は高坏脚端部でヘラ切り透かし下端面から下方の破片である。焼成は良好。

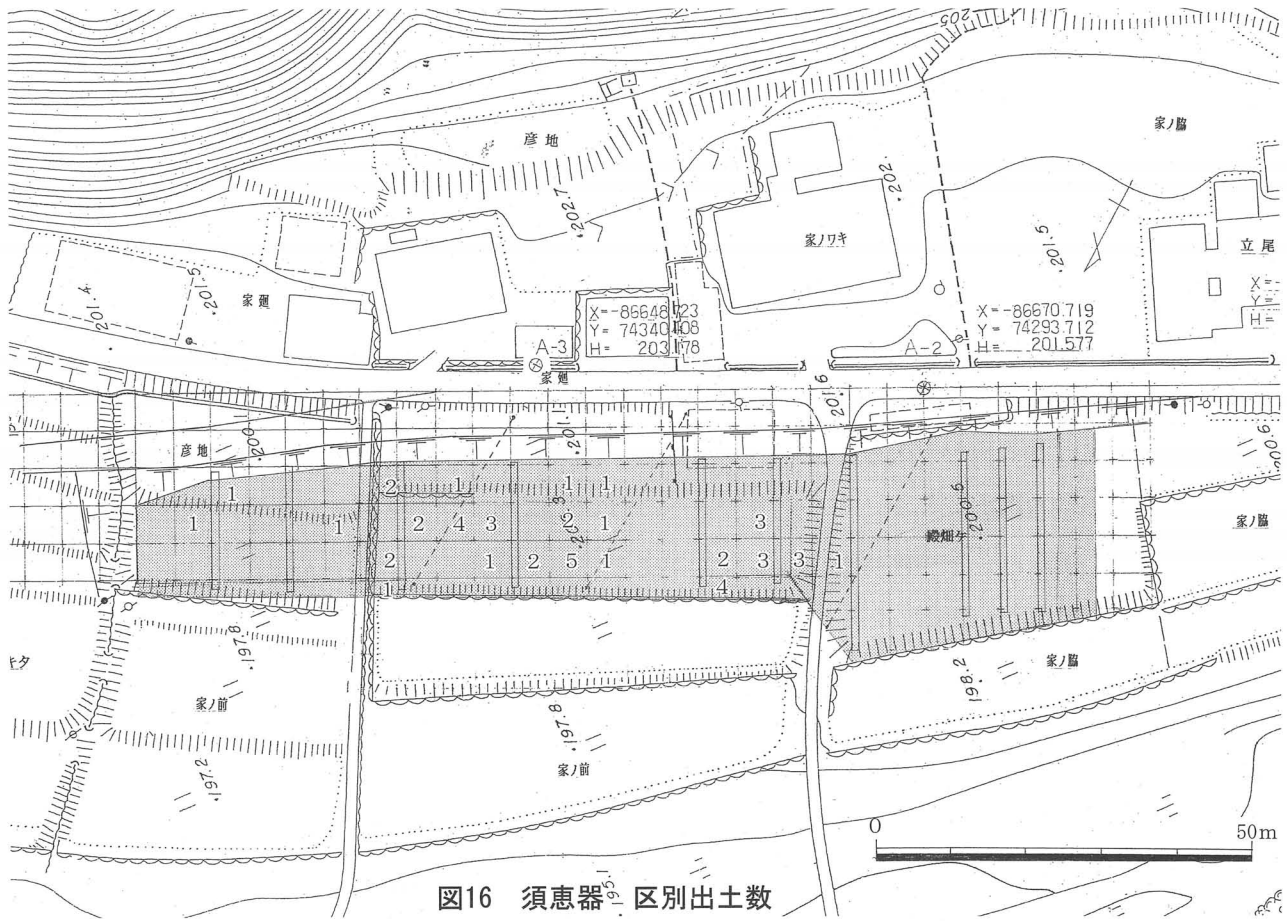


图16 須恵器 区别出土数

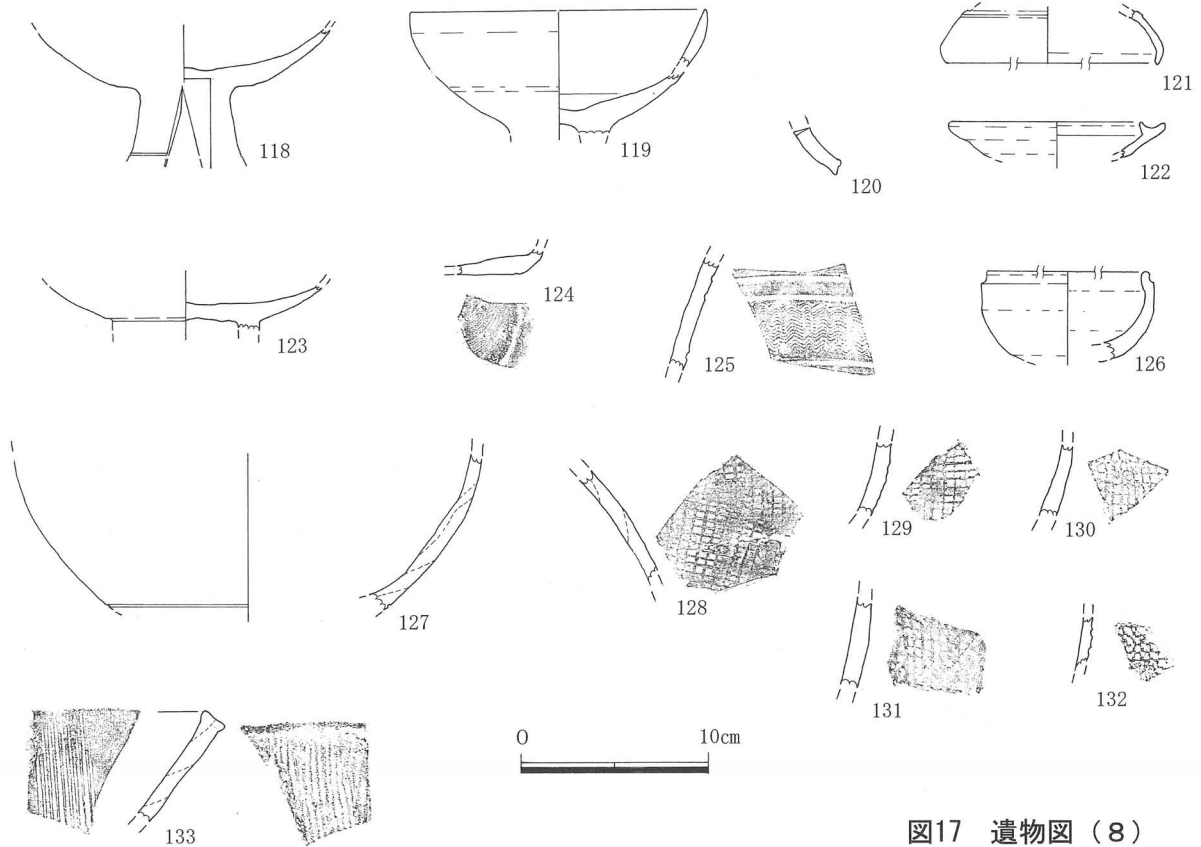


图17 遺物图 (8)

121は蓋坏の蓋で体部と天井部との界線は明確な稜をなしている。整形で直径が12cm以上と思われる。6世紀代であろう。

122は低い立ち上りの付く蓋坏である。器形は直径11cmほどであろうか。立ち上りは短く強く内傾する。TK217期であろう。

123はやや大ぶりの浅鉢で、糸切り底面に高台をつけて強くナデている。焼成はよく、外面にはハジケが認められる。内底中央部分は凹み気味であるが、そのあと軽くナデている。体～口縁部や高台の姿は欠失していて不明。

124は糸切り平底の破片で内面中央部分が凹む。高台の付かない坏であろうか。

125は大甕口縁部の破片で、クシ描き波文を巡らす施文帯部位である。この施文帯は上・下に各2条の横線で区画されていて、これより上或は下方にも同様の施文があるものと思われる。当地の事例から大まかに7～8世紀ごろと思われる。

126は口縁部を内湾させ、口唇は短く直立して丸く収めている。体部下半は器壁が特に厚く、通例の坏とは異なるもので、例えば丈の低い小壺のようなものかもしれない。ロクロ挽きで内外ともナデ、焼成はやや酸化的で体部は淡褐色であるが、口縁端は灰色が濃くなっている。

以上の須恵器片の出土地点は上流部22区あたりと下流部14区あたりの2群に分かれているが、いずれも新旧混在である。

127は大きな大形丸底の体下部で鉢形であろうか。黒色土器で内面入念な削り、外面磨き。焼きはやや軟質である。近い事例は分からないが、平安後期であろうか。

128は亀山焼の大甕片で、破断面及び内面は白色、外面灰色である。調整は内面削りのち軽くナデ、外面は粗い格子叩き目である。亀山焼Ⅱ段階（13世紀）であろう。

129・130は上記した大甕片と同様に内面及び破断面は白であり、表面の粗い格子叩き目もほぼ同じサイズである。表面の色調はより白くなっている。なお内面の調整焼成が軟質のため磨耗していて明瞭ではないが、削りであって円形叩き目ではない。131もほとんど同様であるが、胎土の差異であるのか、内外面・破面ともに淡い黄橙である。

以上の3点はともに128と同じ亀山焼Ⅱ期に属するとみられる。

132は格子叩き目の細片であるが、上記とは大きく異なるものである。器壁は薄く焼成は堅く色調が破断面は橙色、内面はやや淡く搔き目調整である。外面の格子目は約3mm角の彫りの深い目の工具を用いて、しかも重複叩きの部分である。これは亀山焼と同時期の美作国勝間田焼の可能性がある。

133は播鉢の口縁部である。破面は白色、内外面は灰色である。口縁端を漸次厚くして上端は外傾する平坦につくり、小さく端を外側へ折り付けて収める。内面は9条にしっかりした条線が下から上端まで引き上げて刻まれている。外面には粗いタテの調整条痕が全面にみられる。亀山焼Ⅱ段階（13世紀）か。

5 中・近世陶磁器^{※6}

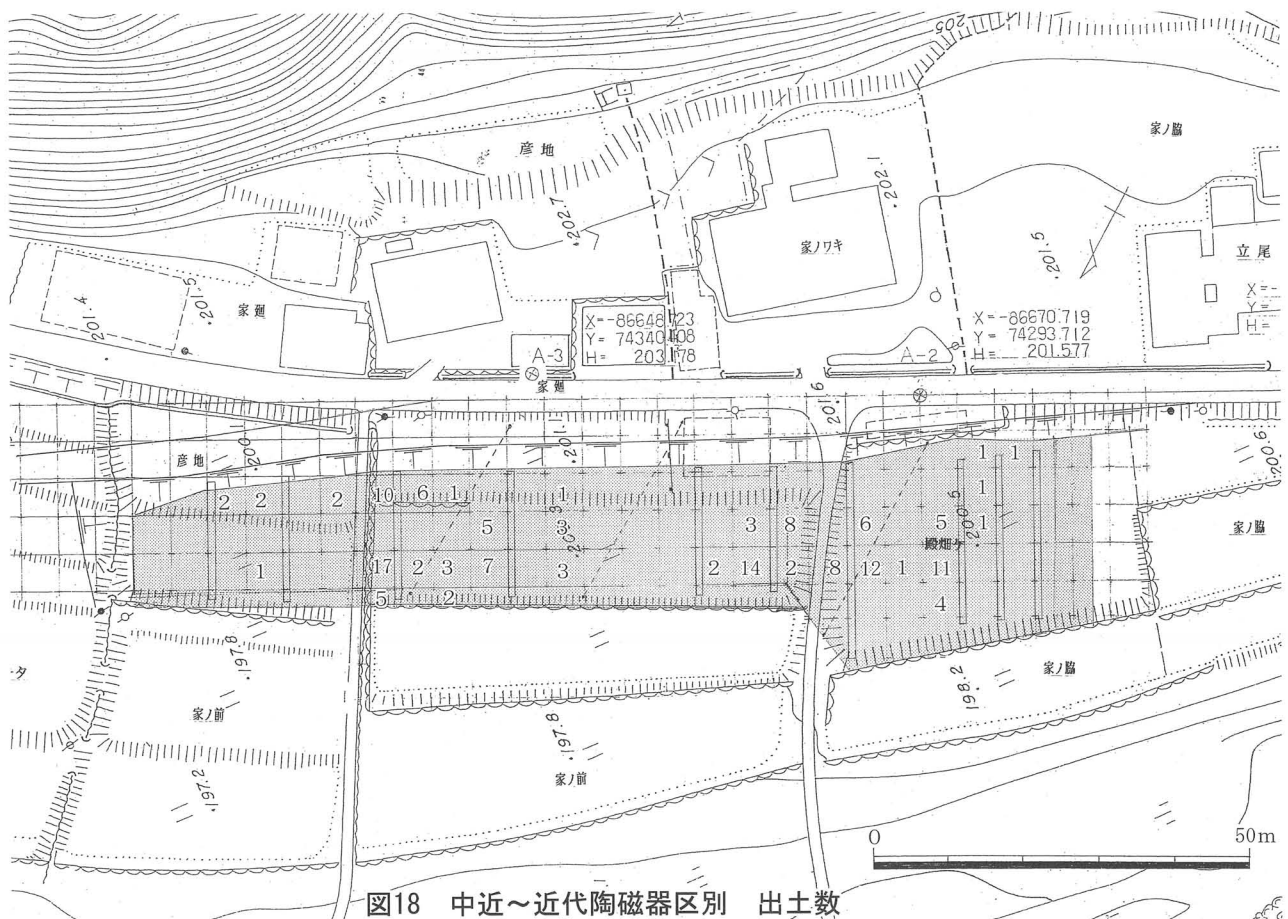
厚手（1 cm以上）の無施釉陶器（瓷器）破片5片は同一個体で134は肩部、135は底部を示し、平底の耳付壺の大形品である。破断面及び内面は概ねにぶい赤橙～赤褐色、外面には灰被りの自然釉が広くみられよく焼き締めている。内外ともヨコナデで頸部から4 cmに耳の欠損痕があり、横付けであったことが分かるがその数は不明。色調や推定される器形から中世の珠州や古丹波が思われるものである。

136は前者に類似する大壺である。より肩の張る姿で自然釉が厚く全面にかかる。珠州や丹波焼に近い事例の形がみられ、中世の所産であろう。なお、この他にこの時期かと思われる細片が数点あった。

137は挿鉢の底部片である。底部はやや薄く平底で、体部下端は格別に厚くして外反し、直線的に立ち上る。破面芯部には赤橙色部分があるものの内外面ともに青灰色気味の須恵質を示し、外面調整は豪快なタッチであり、中世備前焼であることが分かる。内面の卸し目の条線は下端から力強く引き上げている。未だ還元炎焼成であることから備前^{※7}Ⅲ期（14世紀代）ごろであろうか。

138は壺の胴部片であろうか。強く酸化炎焼成で破面や内面は赤褐色、外面は焼成時にはじめて飛んだ面となっている。胎土や焼成から備前焼とみられ、そのVI期ごろであろうか。

139は内外面や破面も白色で磁器質の挿鉢の細片である。部位不明、卸し目はやや不揃い。外



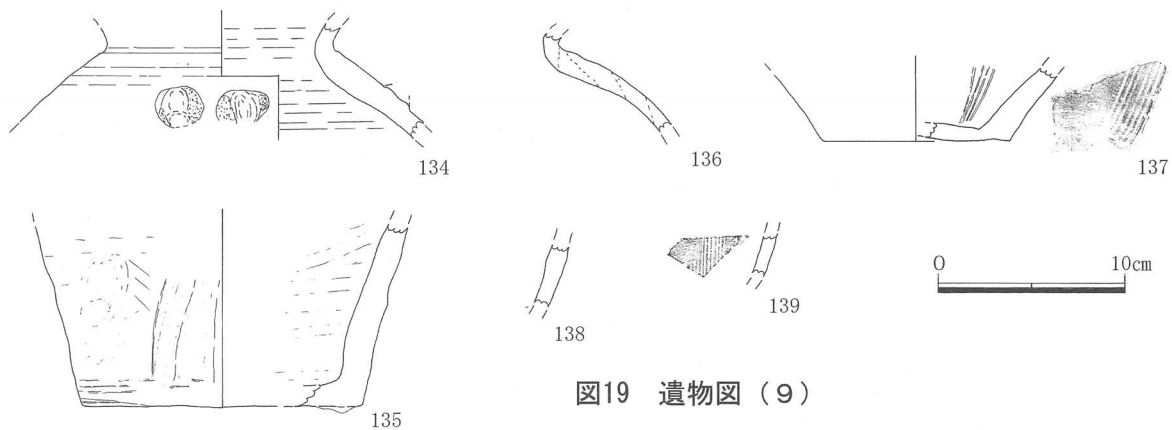


図19 遺物図(9)

面は指頭圧でやや凹凸している。旧来の作陶法で磁器質の焼成をしたのであろうか。

他にも中世の陶器とみられる細片が3点ある。

140はわずかな片口部をつくる播鉢の体部から上方の破片である。内面の卸し目は隙間なく全面に及び、単純な放射状に刻まれている。体部外面は回転削りのままで、口縁下端では凹線状へと移り、口縁はやや厚く外反り気味として口唇を尖らす。そして口縁部分幅5cmほどをわずかに片口状に歪ませている。胎土に砂粒を含み、焼成はやや弱く内外とも灰褐色で無施釉である。地方の窯であろうか。形状から近世前半ごろが思われる。

141は緻密な胎土で焼成良く素地は赤橙色、底面は糸切りで内面及び口縁外面に黒釉を施す。当地では近代まで最も普通に用いられていた品の類であり、布志名焼の系である。細片化した同類も多くあった。

142は卸し皿片。強く開く浅皿状で糸切り底面の中を削って極く低い高台状にし、内面と外上方に褐色の釉をかけている。卸し目はやや太目の櫛状工具で外上方から刺突して同心円状に目を並べている。胎土は水簸で焼成も良く堅い。近代に入る頃であろうか。

以上のほかに、内外に施釉した大形の鉢や、現在でも民家で用いている播鉢等の破片(写真)、或は低い高台裏まで褐釉をかけた貯蔵用の甕とみられるもの(写真)など近代の製品類がみられる。

143・144は緑灰色釉の茶碗で、外面碗底～高台部は無施釉。淡橙色で焼成良好。高台は低い撥高台に造り布志名焼のボテボテ茶碗(143)と類似の常用茶碗(144)である。明治期前半まで盛行した品である。このほかほぼ同様とみられる細片を多数採取した。

145も同じく布志名焼であり、煙草盆にセットされる火入れである。同様に明治期まで用いられている。

146は碗形である。厚手で内外高台裏まで全面に灰釉を施し、全面に貫入がみられる。口縁に線を入れ体外面には単純化した蔓草文を淡い鉄釉を細線で連続描きしている。

147はほとんど同様であるが素土は橙色に焼き、施釉は厚く白掛けは高台近くまで垂れがみられる。外面には濃い鉄釉描きが伺えるが、図柄は不明。このほかにも同類の細片を採取した。唐津系で江戸後期～幕末ごろの日用品であろう。

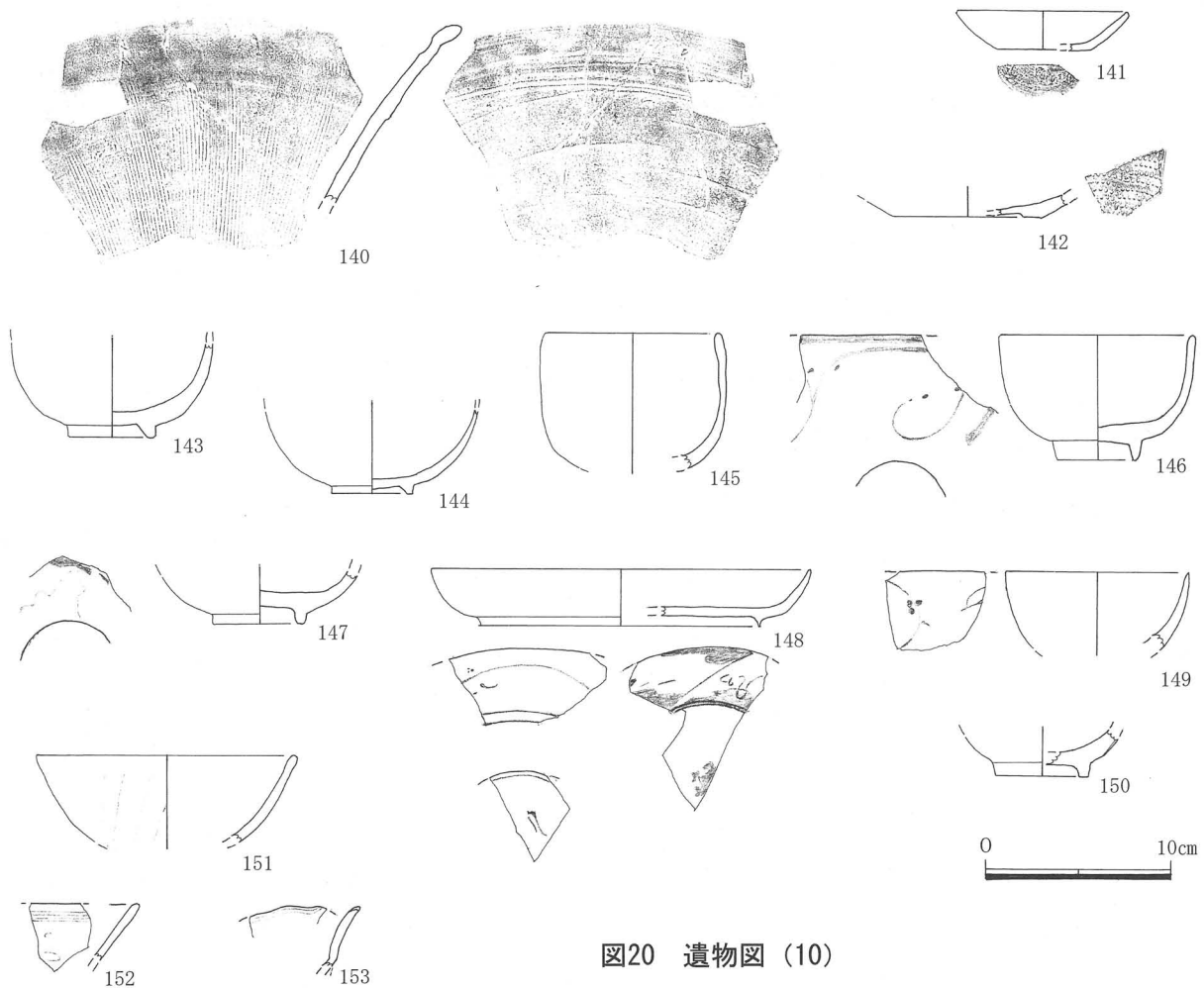


図20 遺物図 (10)

148はやや大ぶりの皿で高台は細く低い。見込み外周は斜線で区切り雲と遠山が思われる図柄に、中央は余白の多い何らかの描き込みがある。外面は蔓草状の単純でのびやかな描線が1本みられる。やや淡い藍の単色である。

149は茶碗で外面に小花の付く蔓草が描かれている。伊万里系であろうか。日用雑器である。染付け類は出土が極く少ない。

150は胎土は白色硅質でやや青みがかった透明釉を厚くかけている。やや低めの高台の裏には施釉。体部は下端のみの破片であるが、その下端部には深く太い垂下する直線3条が彫られている。彫りの文様が何かは不明であるが、器壁は厚い。内面は無文。器種は碗類ではないようだ。伊万里焼古相であろう。

151は花卉文の青磁(碗?)。くすんだ灰黄緑色で貫入が入る。外面には間隔1cm余りの放射状にくすんだ緑色の細線で花卉文を描いている。破面でみると素地は灰白～淡い青灰色である。

152は口縁片(青磁)で口縁外面にわずかにアクセントを付け口唇端は開き気味に造り、灰黄緑色である。口唇内側に4条の線を巡らせ、その下には蔓草を思わせる横になびく細線がやや濃く描かれているのが認められる。器姿は不明。

153は青磁、輪花状の口縁片である。胎土は硅質で淡灰白色である。口縁部2cm弱はアクセシ

トをつけて外反し、口辺には淡く3条の描線を巡らせている。内外とも淡い灰緑色で細かい貫入肌である。小鉢であろうか。151~153は渡来品であろう。

表2 出土土器観察表

縄文

挿図番号	出土地点	器種	法 量 cm			形態・手法の特徴	色 調		胎 土	焼成	備考
			口径	底径	器高		内 面	外 面			
1	16D	甕	30以上	—	—	内面櫛状工具のナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR5/3 にぶい黄褐	粗砂多く含む	良	内面 黴斑あり
2	13D	甕	—	—	—	刻み口縁	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/2 灰黄褐	砂粒含む	良	
3	13D	?	—	—	—	外面二枚貝腹縁条痕	5Y4/1 灰	7.5YR6/6橙~ 7.5YR5/1 褐灰	砂粒含む	良	

複合口縁

挿図番号	出土地点	器種	法 量 cm			形態・手法の特徴	色 調		胎 土	焼成	備考
			口径	底径	器高		内 面	外 面			
4	13D 13E 14C 14D 23D	甕	27	—	30以上	口縁に擬凹線 内面 クシ目条痕	7.5YR7/4 にぶい橙		砂粒多く含む 3mm大も	良好	
5	13D	甕	22	—	—	口縁に擬凹線	10YR7/2~10YR7/3 にぶい黄橙	10YR8/4 浅黄橙	砂粒多く含む	良好	外面 黴斑あり
6	14D 14E 15D	甕	17	—	—	口縁外面平坦	7.5YR7/4 にぶい橙		砂粒多く含む	良好	
7	13D	甕	17?	—	—	口縁外面平坦	7.5YR7/6 橙		砂粒多く含む 5mm大も	良好	
8	15E	甕	21	—	—	口縁に擬凹線	7.5YR7/4 にぶい橙	5YR6/6 橙	稀に砂粒含む	良好	
9	13C 13D	甕	16	—	—	口縁に擬凹線 胴部に刺突文	7.5YR7/4 にぶい橙		砂粒多く含む	良好	煤付着
10	13C	甕	17	—	—	口縁に擬凹線	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	1.5mm大 砂粒多く含む	良好	
11	14D	甕	16	—	—	口縁外面平坦	10YR8/4 浅黄橙		大砂粒多く含む	良好	
12	14D	甕	14	—	—	口縁に擬凹線 胴部に刺突文	10YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	密	良好	
13	14D	甕	29	—	—	口縁に凹線	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR8/3 浅黄橙	砂粒多く含む	良好	内面 黴斑あり
14	14D	甕	—	—	—	口縁に擬凹線	7.5YR8/6 浅黄橙		砂粒多く含む	良好	
15	14D	甕	17	—	—	口縁に擬凹線	10YR8/3 浅黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	ち密	良好	
16	15D	甕	—	—	—	口縁外面平坦	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR8/4 浅黄橙	砂粒多く含む	良好	
17	13D	甕	—	—	—	口縁外面平坦	7.5YR8/4 浅黄橙		砂粒多く含む	良好	
18	14C 14D	甕	13	—	—	口縁に擬凹線	10YR6/2 灰黄褐		密 稀に砂粒	良好	
19	13D 14C 14D	甕	32	—	—	口縁に擬凹線	10YR7/2 にぶい黄橙 10YR7/3 にぶい黄橙 10YR5/1 褐灰		砂粒多く含む	良好	黴斑あり
20	14D	甕	19	—	—	口縁に擬凹線	7.5YR8/4 浅黄橙		3mm砂粒含む	良好	
21	13D	甕	20	—	—	口縁に擬凹線	10YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	5mm砂粒含む	良好	
22	13D	甕	18	—	—	口縁に擬凹線	2.5Y5/2 暗灰黄	10YR8/3 浅黄橙	砂粒多く含む	良好	
23	16C	甕	16	—	—	口縁に擬凹線	7.5YR8/4 浅黄橙		密 稀に砂粒含む	良好	
24	14D	甕	15	—	—	口縁に擬凹線	2.5Y6/1 黄灰~ 10BG3/1 暗青灰	10YR7/3 にぶい黄橙	砂粒含む	良好	
25	T15	甕	21	—	—	複合口縁 外 タテハケのちナデ 内 ケズリ放し	7.5YR8/3 浅黄橙	10YR8/2 灰白	密	良好	
26	25E	甕	—	—	—	複合口縁 外 タテハケのちナデ 内 ケズリ放し	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR7/4 ぶい橙	密	良好	
27	15D	?	—	—	—	内外 ハケ目	7.5YR4/2 灰褐	5YR7/6 橙	細砂粒含む	良好	
28	14E	?	—	—	—	外面 カキ目条痕	10YR8/3 浅黄橙		砂粒含む	良好	

施文破片

挿図 番号	出土地点	器種	形態・手法の特徴	色 調		胎 土	焼成	備考
				内 面	外 面			
29	10D	特殊壺	竹管文	7.5YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	密	良好	
30	10D	特殊壺	竹管文	7.5YR8/6 浅黄橙		砂粒多く含む	良好	
31	10D	甕	多条線+羽状刻文	7.5YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	2~8mm砂粒含む	良好	
32	T15	甕	多条線+羽状刻文	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR8/3 浅黄橙	密	良好	
33	10D	甕	多条線+羽状刻文	7.5YR8/6 浅黄橙		砂粒多く含む	良好	
34	14E	甕	肩部細い凹線 その上に櫛描斜線	2.5Y6/2 灰黄	10YR8/4 浅黄橙	砂粒多く含む	やや良	
35	14D	甕	肩部細い凹線 その上に櫛描斜線	10YR5/1 褐灰	10YR7/3 にぶい黄橙	砂粒多く含む	良	
36	8D	甕	肩部細い凹線 その上に櫛描斜線	10YR8/4 浅黄橙		砂粒多く含む	良好	
37	14D	甕	肩部へラ刻みノ字	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR7/3 にぶい黄橙	砂粒多く含む	良好	
38	14D	甕	肩部へラ刻みノ字	5Y4/1 灰	10YR7/3 にぶい黄橙	砂粒多く含む	やや良	
39	14D	甕	肩部2段の櫛目状工具の斜刺突	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	3mm砂粒含む	良好	
40	13C	甕	肩部2段の櫛目状工具の斜刺突	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR8/4 浅黄橙	砂粒多く含む	良	
41	?	甕	肩部2段の櫛目状工具の斜刺突	10YR7/4 にぶい黄橙	N1.5/0 黒	稀に砂粒含む	良好	
42	13D	甕	肩部2段の櫛目状工具の斜刺突	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙~ N1.5/0 黒	3mm砂粒含む	良好	
43	13C	甕	肩部2段の櫛目状工具の斜刺突	7.5YR8/6 浅黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	砂粒多く含む	良	
44	14D	甕	肩部2段の櫛目状工具の斜刺突	7.5YR7/4 にぶい橙		密 稀に砂粒含む	良	
45	13D	甕	上下段の施文が接す	10YR5/2 灰黄褐	10YR8/3 浅黄橙	砂粒多く含む	良	
46	13D	甕	ヘラミガキ	10YR8/3 浅黄橙		大砂粒稀に含む	良	
47	14D	甕	ヘラミガキ	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	密 稀に砂粒含む	良好	
48	14D	甕	ヘラミガキ	10YR6/2 灰黄褐	7.5YR7/3 にぶい橙	砂粒多く含む	良	
49	13E	甕	ヘラミガキ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR8/4 浅黄橙	砂粒含む	良好	
50	14D	甕	ヘラミガキ	10YR6/2 灰黄褐	10YR7/3 にぶい黄橙	砂粒多く含む	良好	
51	13D	甕	ヘラミガキ	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR8/3 浅黄橙	砂粒多く含む	良	
52	13D	甕	ヘラミガキ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	密 稀に砂粒含む	良好	
53	14D	甕	ヘラミガキ	10YR4/1 褐灰		砂粒多く含む	良好	
54	13D	甕	ヘラミガキ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR8/4 浅黄橙	砂粒多く含む	良	
55	13D	甕	ヘラミガキ	7.5YR6/3 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	砂粒多く含む	良	
56	13C	甕	ヘラミガキ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	稀に砂粒含む	良	

底部

挿図 番号	出土地点	器種	法量 底径	形態・手法の特徴	色 調		胎 土	焼成	備考
					内 面	外 面			
57	13C	甕	5.5	わずかに上底 外ヘラミガキ	10YR5/3 にぶい黄褐	7.5YR6/4 にぶい橙	密	良好	
58	13E	甕	5	平底 外ナデ	10YR3/1 黒褐	5YR4/2 灰褐	2mm砂粒多く含む	良好	
59	14D	甕	7	平底 外ハケ目	10YR3/2 黒褐	7.5YR7/6 橙	やや密 稀に砂粒含む	良好	
60	14D	甕	8	平底 外ハケ目	7.5YR7/4 にぶい橙		砂粒多く含む	良好	
61	14C	甕	9	平底 外タテハケ目	10YR6/4 にぶい黄橙		砂粒多く含む 3~4mm大あり	良好	

62	22E		5	平底 外ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR5/2 灰黄褐	砂粒含む	良好	
63	15E		6	平底 外ナデ	10YR3/1 黒褐	10YR4/3 黄褐	砂粒多量に含む	良好	
64	10F		-		10YR5/1 褐灰	7.5YR7/4 にぶい橙	砂粒多く含む	良好	
65	T22		-		7.5YR5/2 灰褐	7.5YR7/4 にぶい橙	5mm大の砂粒多く含む	良好	
66	14D		7		10YR6/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	砂粒～粗砂多量に含む	良好	
67	21E		-		10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	砂粒多く含む 2～3mm大	良好	

単口縁

挿図 番号	出土地点	器種	法量 底径	形態・手法の特徴	色 調		胎 土	焼成	備考
					内 面	外 面			
68	22E 16E	甕	24	厚手 口唇丸	5YR7/6 橙		砂粒多く含む	良好	僅かに煤付着
69	22E	甕	22	厚手 口唇丸	7.5YR7/4 にぶい橙		砂粒多く含む	良好	
70	13D	甕	-	厚手 外面ハケ目	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR7/6 橙～ 7.5YR8/3 浅黄橙	砂粒多く含む	良好	
71	T22	甕	-	厚手 口唇外尖り	7.5Y3/1 オリーブ黒	5YR7/6 橙～ 7.5YR6/1 褐灰	砂粒多く含む	良好	内外黝斑
72	21D	甕	-	厚手 口唇外尖り	10YR6/3 にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	砂粒多く含む 3mm大あり	良好	
73	21E	甕	-	厚手	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR7/6 橙	砂粒含む	良好	
74	23F	甕	-	厚手 口唇丸 外面ハケ目	10YR6/3 にぶい黄橙		5mm大の砂粒 砂粒多く含む	良好	
75	22E	甕	-	厚手 口唇丸 外面ハケ目	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR4/1 褐灰	砂粒多く含む	良好	
76	22F	甕	-	厚手	7.5YR7/4 にぶい橙		砂粒多く含む	良好	
77	14D	無頸壺	-	厚手 口唇丸	5Y3/1 オリーブ黒	7.5Y3/1 オリーブ黒	砂粒多く含む	良好	内外黝斑
78	21F	?	-	口唇平坦	7.5YR7/6 橙	10YR6/3 にぶい黄橙	砂粒多く含む	良好	
79	14F	?	-	口唇丸	10YR8/4 浅黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	砂粒多く含む	良好	
80	21E	?	-	薄手 肩部以下タテハケ	10YR8/4 浅黄橙		砂粒含む	良好	
81	14E	広口壺	-		5YR7/6 橙	5YR6/6 橙	砂粒含む	良	

土師器坏

挿図 番号	出土地点	器種	法 量 cm			形態・手法の特徴	色 調		胎 土	焼成	備考
			口径	底径	器高		内 面	外 面			
82	13E	坏	10	7.4	2.3	静止糸切り	7.5YR8/2 灰白		砂粒多く含む	良	火床遺構出土
83	26D	坏	8.6	5.4	1.3	回転糸切り	5YR7/6 橙		ち密 稀に粗砂	良好	内外黝斑あり 灯明皿
84	12F	坏	-	6.1	-	静止糸切り	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	ち密	良好	
85	7E	坏	7.8	5.4	2.2	糸切り?	7.5YR8/2 灰白		ち密	良	
86	11E	坏	9	7	1.8		7.5YR8/6 浅黄橙		砂粒多く含む	良	
87	6D	坏	8.6	3.2	1.5	底部ナデ	5YR8/4 淡橙		ち密	良好	灯明皿
88	23F	坏	4	-	-		7.5YR8/4 浅黄橙		ち密	良好	口唇部に煤 灯明皿
89	8C	坏	9～10	-	-		2.5Y8/2 灰白	2.5Y3/1 黒褐	ち密	良好	内外黝斑 外面煤付着 灯明皿
90	15E	坏	-	5	-	回転糸切り	7.5YR5/2 灰褐	7.5YR6/4 にぶい橙	ち密 稀に砂粒	やや軟	瓦器
91	11D	坏	-	7	-	糸切り痕あり	10YR5/2 灰黄褐	10YR6/3 にぶい黄橙	ち密 わずかに砂粒	やや軟	瓦器

92	12E	坏	-	6	-	静止糸切り	10YR8/4 浅黄橙		ち密	やや軟	
93	13D	坏	-	6	-	回転糸切り	10YR8/3 浅黄橙		ち密 砂粒わずか	やや軟	
94	16E	坏	-	4.2	-	回転糸切り	7.5YR6/2 灰褐	7.5YR7/3 にぶい橙	ち密	良好	
95	16E	坏	-	4.6	-	回転糸切り	5YR6/6 橙		ち密 稀に砂粒含む	良好	
96	10D P1	坏	-	4	-	回転糸切り	10YR8/4 浅黄橙		雲母含	良好	
97	7D P5	坏	-	5.2	-	回転糸切り	7.5YR6/6 橙	7.5YR7/6 橙	砂粒多く含む	やや軟	
98	21E	坏	-	5.4	-	静止糸切り	7.5YR7/4 にぶい橙		砂粒含む	やや軟	
99	13C	坏	-	6	-	回転糸切り	5YR7/6 橙		砂粒多く含む	やや軟	
100	19E P2	坏	-	6	-	静止糸切り	7.5YR8/4 浅黄橙		ち密 稀に砂粒含む	やや軟	
101	11E	坏	-	6	-	静止糸切り	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	ち密 稀に砂粒含む	やや軟	
102	8C	坏	-	6	-	糸切り底	7.5YR7/4 にぶい橙		ち密	やや軟	
103	15F	碗	-	5~5.4	-	回転糸切り	7.5YR7/4 にぶい橙		砂粒含む	やや軟	外面わずかに黴斑
104	13D	坏	-	6	-	底部ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙		ち密 雲母多く含む	やや軟	
105	14E	坏	-	3	-	回転糸切り	7.5YR8/4 浅黄橙		ち密 わずかに砂粒含む	やや軟	
106	21E	坏	-	8	-	糸切り	10YR7/3 にぶい黄橙	7.5YR7/3 にぶい橙	ち密 稀に砂粒含む	やや軟	
107	T22	碗	-	7	-		10YR7/3 にぶい黄橙	2.5Y6/2 黄灰	ち密	良好	外底面タール付着 山茶碗茶溜りに自然釉

その他の土師器

挿図 番号	出土地点	器種	法量 cm	形態・手法の特徴	色 調		胎 土	焼成	備考
					内 面	外 面			
108	22F	高坏・脚部	-	脚高 低い	5YR7/6 橙		砂粒多く含む	良好	
109	8C	高坏・坏部	口径 12	薄手	10YR8/3 浅黄橙		ち密	良	
110	14D	壺?	底径 5弱	糸切り	7.5YR8/4 浅黄橙		砂粒多く含む	良好	
111	16F	壺?	底径 4	糸切り	7.5YR8/4 浅黄橙		砂粒多く含む	良	
112	13D	高台付坏	-	回転糸切り	5YR7/8 橙	7.5YR8/6 浅黄橙~ 7.5YR7/8 橙	砂粒多く含む	良好	高台部剥離
113	14D	坏か甕	底径 6.6	回転糸切り	5YR7/6 橙		砂粒多く含む	良好	造り出し台座
114	18C	脚台	底径 9		7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	ち密 稀に砂粒含む	良好	壺の台座?
115	9C	撮み蓋	口径 7		10YR8/3 浅黄橙	5YR7/8 橙	ち密 稀に砂粒含む	良好	
116	20E	土鍋	-	内面 ヨコ掻き 外面 タテ・斜行の条痕	10YR7/4 にぶい黄橙	5YR6/4 にぶい橙	ち密 稀に砂粒含む	良好	口縁部
117	27D	無頸壺	-		7.5YR6/4 にぶい橙		砂粒含む	良好	貼り付口縁

須恵器

挿図 番号	出土地点	器種	法量 cm	形態・手法の特徴	色 調		胎 土	焼成	備考
					内 面	外 面			
118	16E	高坏	-	2方に透し切り	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/2 灰黄	ち密	良好	
119	22E	高坏	口径 16	2方に線刻透し	2.5Y5/1 黄灰		ち密 稀に砂粒	良好	
120	17C	高坏	-	透し下端	2.5Y6/1 黄灰		ち密	良好	脚端
121	22E	蓋	-	界線明瞭	N6/0 灰		ち密	良好	
122	14E	坏	口径 11.5	立ち上り短く内傾	2.5Y6/1 黄灰		ち密	良好	

123	22F	浅鉢		高台付き	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y7/1 灰白	ち密 砂粒含む	良好	
124	14D	皿	—	回転糸切り	10YR6/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	ち密	良好	
125	22F	大甕		クシ描波文	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	砂粒含む	良好	
126	13C	小壺?		ロクロ挽き	7.5YR6/3 にぶい褐		ち密 稀に砂粒含む	良好	
127	13E	鉢	—	内外 ミガキ	N2/0 黒		ち密 砂粒含む	やや軟	
128	11E	大甕	—	外面 格子叩目	7.5Y8/1 灰白	N5/0 灰	砂粒多く含む	良好	わずかに黴斑
129	13D	大甕	—	外面 格子叩目	10YR8/2 灰白	10YR8/1 灰白	砂粒含む	良好	
130	11C	大甕	—	外面 格子叩目	10YR8/2 灰白	10YR8/1 灰白	砂粒含む	良好	
131	13F	大甕	—	外面 格子叩目	10YR7/3 にぶい黄橙	7.5YR8/6 浅黄橙	砂粒多く含む	良	
132	15D	?	—	外面 格子叩目	10YR6/2 灰黄褐	10YR7/3 にぶい黄橙	砂粒含む	良好	勝間田焼?
133	攪乱土中	播鉢	—	内外 タテ条線	N6/0 灰		砂粒多く含む	やや軟	

中近世陶磁器

挿図 番号	出土地点	器種	法量 cm	形態・手法の特徴	色 調		胎 土	焼成	備考
					内 面	外 面			
134	13E	耳付壺		耳…横付け 内外 ヨコナデ	2.5YR5/2 灰赤	2.5YR6/2 灰赤	砂粒多く含む	良好	自然釉
135	13E	底部	底径 15	内外 ヨコナデ	7.5YR5/2 灰褐	2.5YR5/2 灰赤	砂粒多く含む 4mm～6mm大あり	良好	火床遺構出土
136	11D	壺		内外 ヨコナデ	5YR6/3 にぶい橙	2.5Y6/3にぶい黄	砂粒多く含む	良好	
137	7C	播鉢底部	底径 10	卸目あり	10YR5/1 褐灰	10YR6/1 褐灰	砂粒多く含む	良好	
138	11E	壺		外面…焼成時のはじけ	2.5YR6/4 にぶい橙	2.5YR4/1灰赤～ 2.5YR5/2灰赤	砂粒多く含む 4mm大あり	良好	
139	11E	播鉢		卸目あり	5Y8/1 灰白		砂粒含む	良好	
140	11F	播鉢	—	片口	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR6/2 灰褐	砂粒多く含む 3mm大あり	良	
141	26F 21F	灯明皿	口径9.5 底径5	回転糸切り	10R2/3 極暗赤褐	2.5YR6/6 橙	ち密	良好	
142	28B	おろし皿	底径8	櫛状工具による刺突	7.5YR3/6 暗赤	2.5YR6/6 橙	ち密	良好	
143	T27	茶碗	底径4.8		10GY6/1 緑灰～10YR7/2 にぶい黄橙		稀に砂粒含む	良好	布志名焼
144	T27	茶碗	底径5		2.5GY8/1 灰白～7.5YR6/4 にぶい橙		ち密	良好	布志名焼
145	21E	火桶	口径9.5		7.5Y5/2 灰オリーブ		稀に砂粒含む	良好	
146	8C	碗	口径10.5・ 底径4.2・ 器高6.7		10Y7/1 灰白		稀に砂粒含む	良好	貫入
147	26D	碗	底径5		7.5Y6/1 灰		砂粒含む	良好	唐津?
148	T11	皿	口径20・ 底径15・ 器高3		N8/0 灰白～7PB2.5/3 褐		ち密	良好	
149	T11	茶碗	口径10		10GY8/1 明緑灰		ち密	良好	伊万里?
150	26D	?	底径5		7GY8/1 明緑灰		ち密	良好	伊万里
151	16E	碗	口径14		10Y6/2 オリーブ灰		ち密	良好	中国渡来
152	20E	?	—		7.5Y6/2 灰オリーブ		ち密	良好	中国渡来
153	11E	小鉢?	—		7.5GY6/1 緑灰		稀に砂粒含む	良好	中国渡来 貫入

同一
個体

6 石類 (PL 7)

1は安山岩質の石鏃の鋒部片。現長15mm、厚さ3mm、重さ0.3g。

2・3は全面磨き状の肌で一見自然の川礫かともみられるが、灰色の凝灰質の石材を用いた棒状の石である。

	長	幅	横断面形	重量g	備考
2.	16cm	5.5cm	略円形	822	腹面はほぼ直線 背面は弧状
3.	10cm	3.8cm	偏平形	143	腹面はわずかに凹む平坦 背面は弧状

石皿上で用いた磨石であろうか。

4は硅質細砂の堆積岩を用いた砥石の破片。現行の金剛砥に近い質で硬い。石器の研磨に用いたものであろうか。

5・6・7・8は黒曜石のコアと剥片。7・8は無色透明部分である。

9はメノウであろう。

10・11・12・13は石英の礫塊で自然形であろう。

14は川礫で、円磨度の著しい形状で透明感のある硅質の小塊であり、葉状節理が認められることから、変成岩の類とみられる。採取した斐伊川沿いの上流地域にはあまり見うけない岩石であるので、石器ではないがここに収録した。

15・16はともに偏平円形の礫である。これは河成の自然礫であろうか。

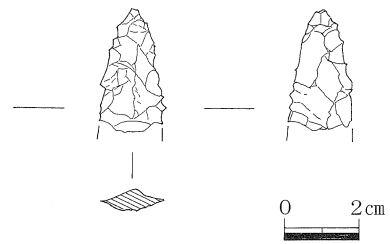


図21 遺物図 (11)

7 その他の遺物 (写真参照)

1) 鉄製品

16E-13 : 幅2.2cm、厚さ0.5cm、残存長10.5cm、備中鋏系^{※8}の鍛造品で一端は折損し先端は篋状に薄く刃先状となっている。爪鋏の1本が折れたものであろう。

T15壁面 (黒色土中) : 幅3.5cm、厚さ0.6cm、残存長7.3cmで両端欠損、平造りの刃物片。おそらく片刃造りの厚手鎌の破片であろう。

11C-5 : 略L字形で片刃の小草鎌の茎から刃部中端までの部位。刃幅約1.6cm、刃元の背厚みは約3mm、茎長約3cmで下端近く目貫釘が残っている。

以上3点の鉄器は19世紀以降の農具の破損した破片とみられる。

10D-6 : 全長13.5cm、幅約1.5cm、厚さ約4mmほどで、形状からして和剃刃とみられる。刃部はかなり研ぎ減りしたものである。柄部には植物質の巻き痕があり籐巻きであったとみられる。

2) 喫煙具

23E-2 及び11C-10はいずれも石州型のキセル^{※9}で、薄い銅版を丸めて突き合せ接合した量産製

作の吸口部である。前者は前方が欠け、後者は吸口部末端が腐食して明確でないが、後者の全長は約5cmであり、直径9mmの前端には内部にラオ竹の残朽がみられる。ラオ竹挿入部の長さは1.5cmで、それから急に細まりながら吸口端に至る形姿であり、量産製品で近世末～近代の庶民用廉価品である。

3) 銅錢^{※10}

13C-3は咸平元寶の破片である。鑄型の潰れが甚だしいもので、幾度となく踏み返したものであろうか。初鑄は中国北宋のAD998年であり、日本での流通は寛永通寶に混ざって明治まで用いられていた。

8D-4は柱穴状ピット内の落込土中より採取したもので、洪武通寶の破片である。縁円は幅がわずかに太目であるが、鑄潰れはほとんどない。初鑄は中国明代のAD1368年であり、日本での流通は寛永通寶に混ざって明治維新まで用いられていた。

上記の喫煙具や銅錢はともに幕末～明治初年まで一般に用いられていたものである。

IV 遺構

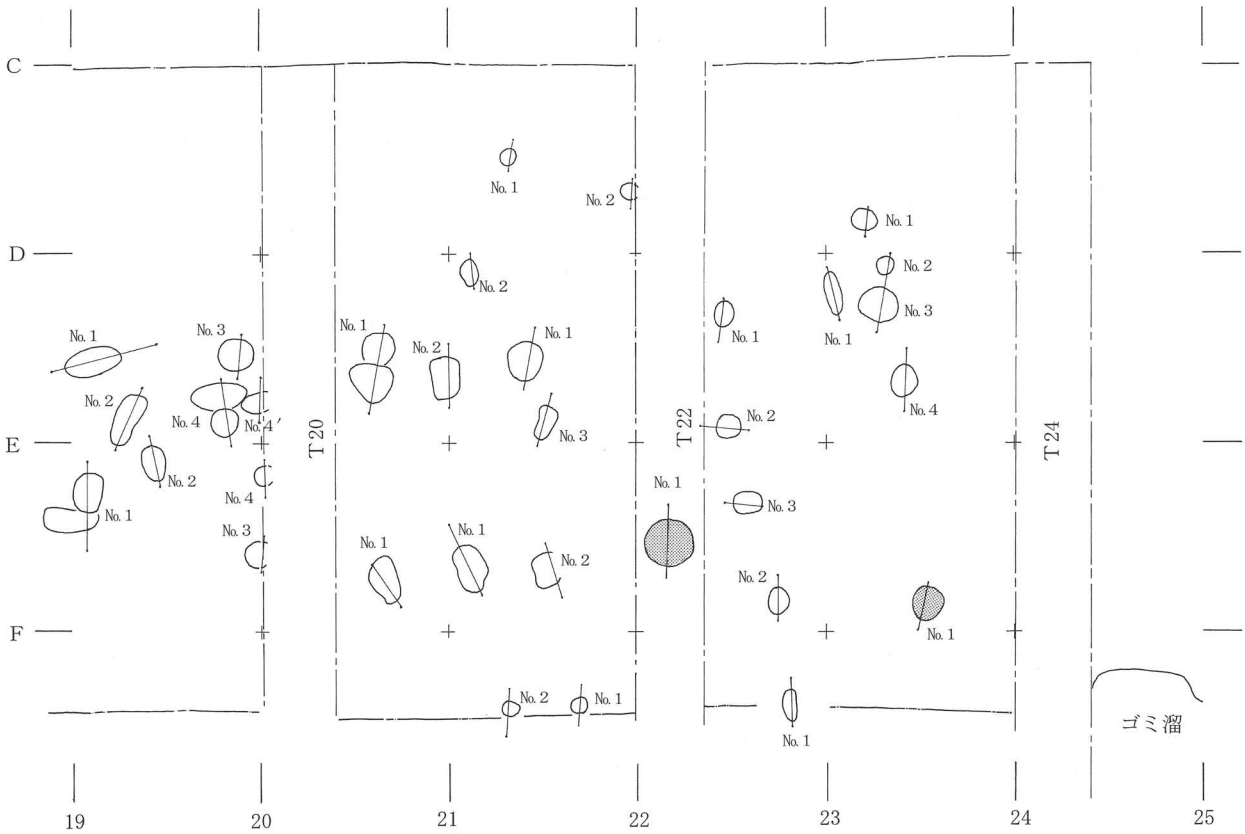
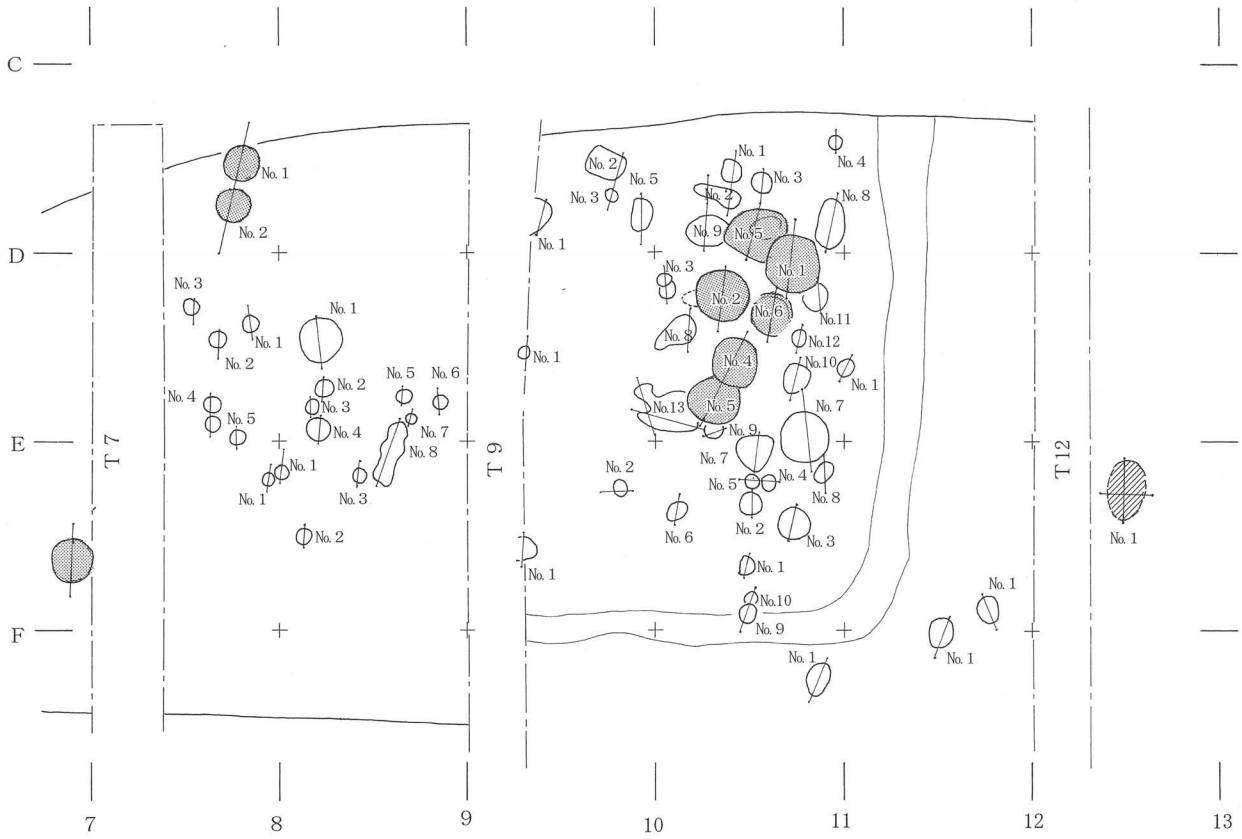
検出した遺構は次のようである。

- ∴ 地面に掘り込み据えられた桶跡
- ∴ 表土下面をベースに石礫を集積した火床部
- ∴ 柱穴状ピットで深浅・大小各種あり礎板石や側詰め石のあるものもある
- ∴ 杭穴状ピット
- ∴ 集石部

これらは河成砂層に達しているものもある。そして落ち込み土或は噛み込みの土は、表土又は耕作土である。

1 桶遺構

この遺構は掘り込み埋設された桶体で底径1.0mの正円形、下底面は水平であり、底に厚さ1.2cmの松板の残っているものもある。その場合には外周に胴部の桶板下端に近く籬（たが）を二～三段にかけた状態で又は圧痕として遺存している。籬は真竹を用い、2～2.7cmに割り削いだ素材を三重縋りのものと四重縋りにしたもののセットで俗に“ナキワ”と呼ばれ下端から幅13cmほどを強く締めている。内径は90cmを測る。高さは上部を欠くため不明であるが、下底から約20cm上方にも三重縋りの籬が締められていて胴“締め輪”の下段のものである。



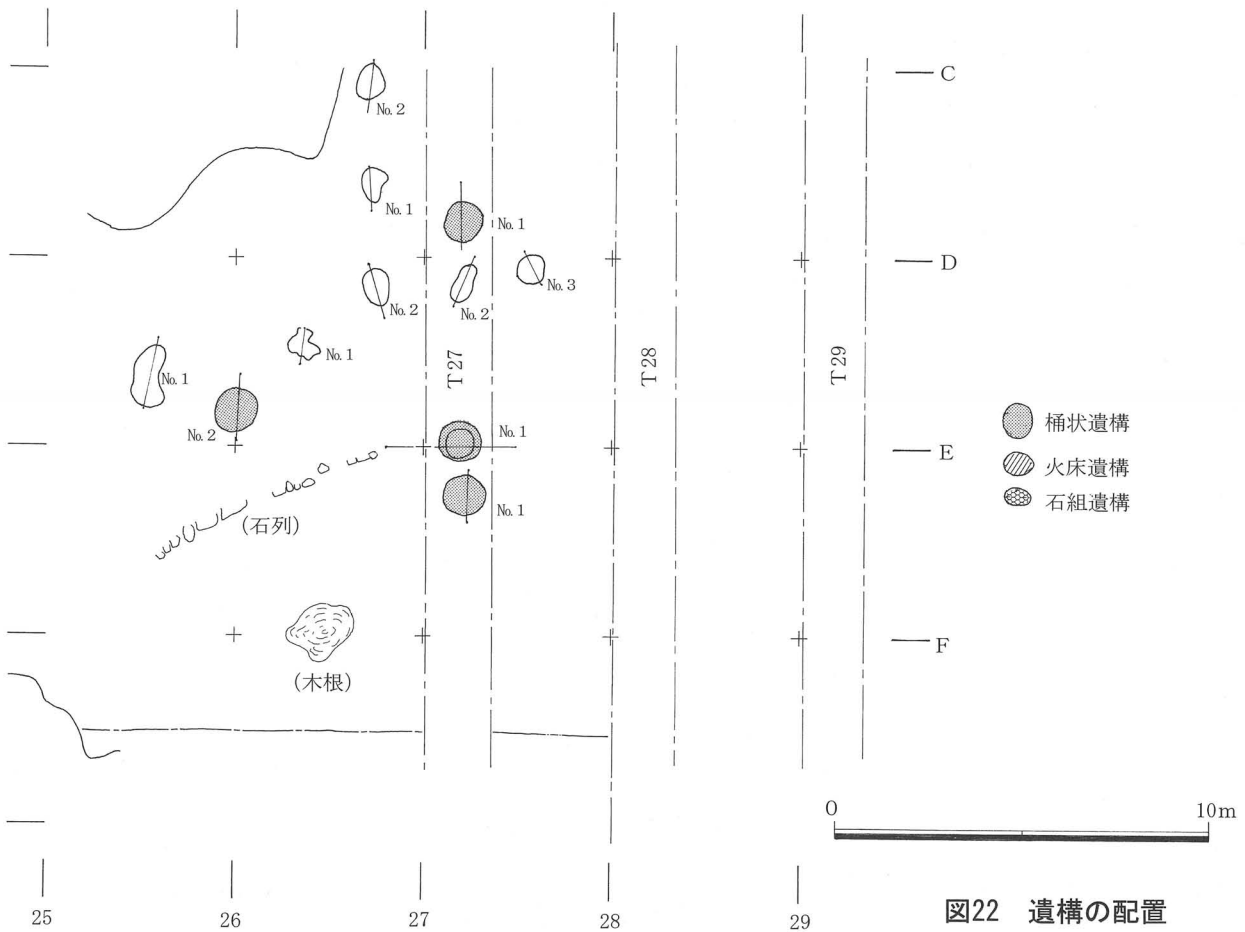
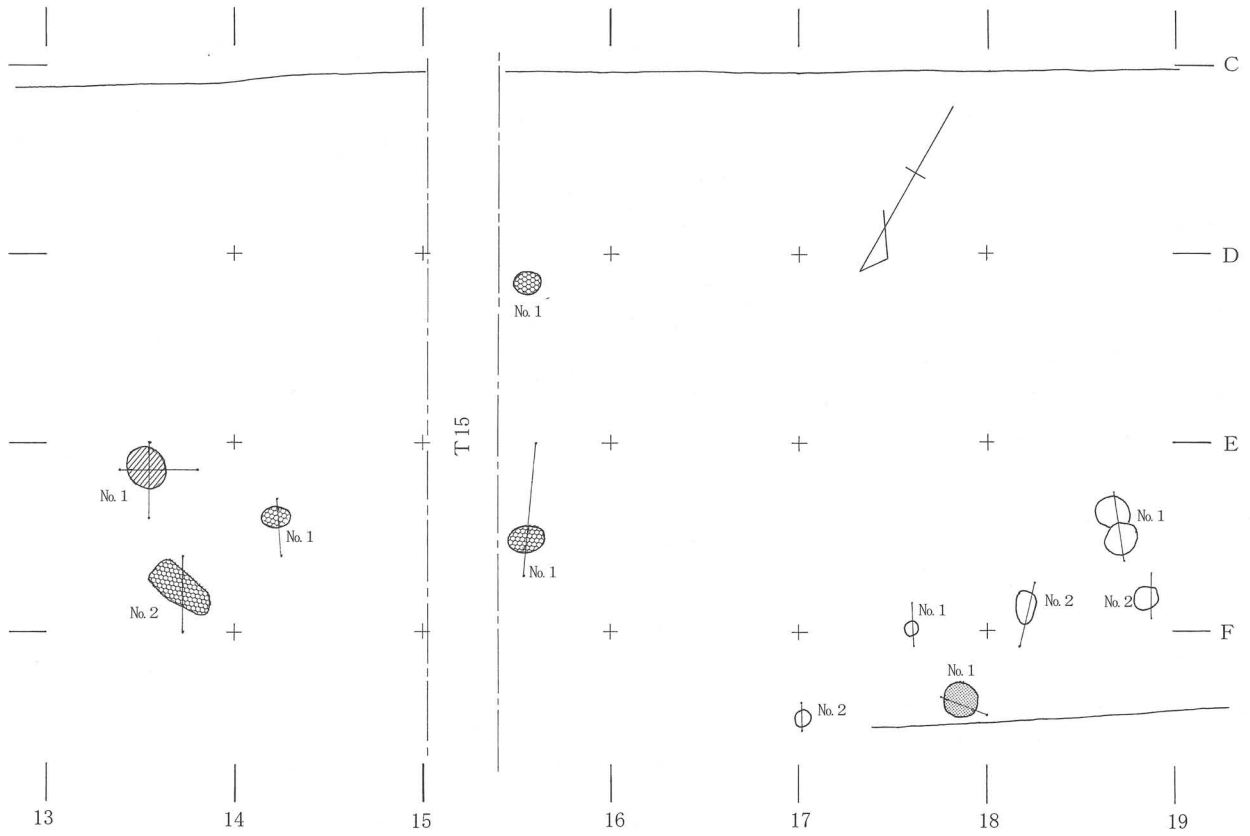


図22 遺構の配置

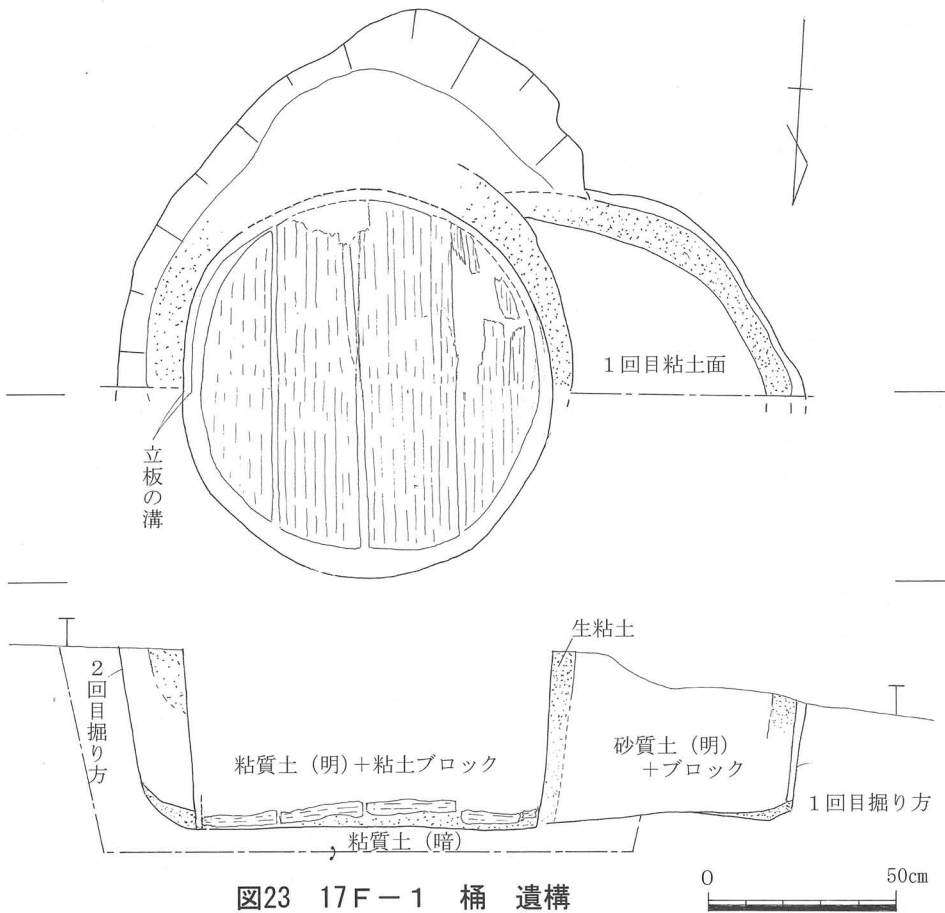


図23 17F-1 桶 遺構

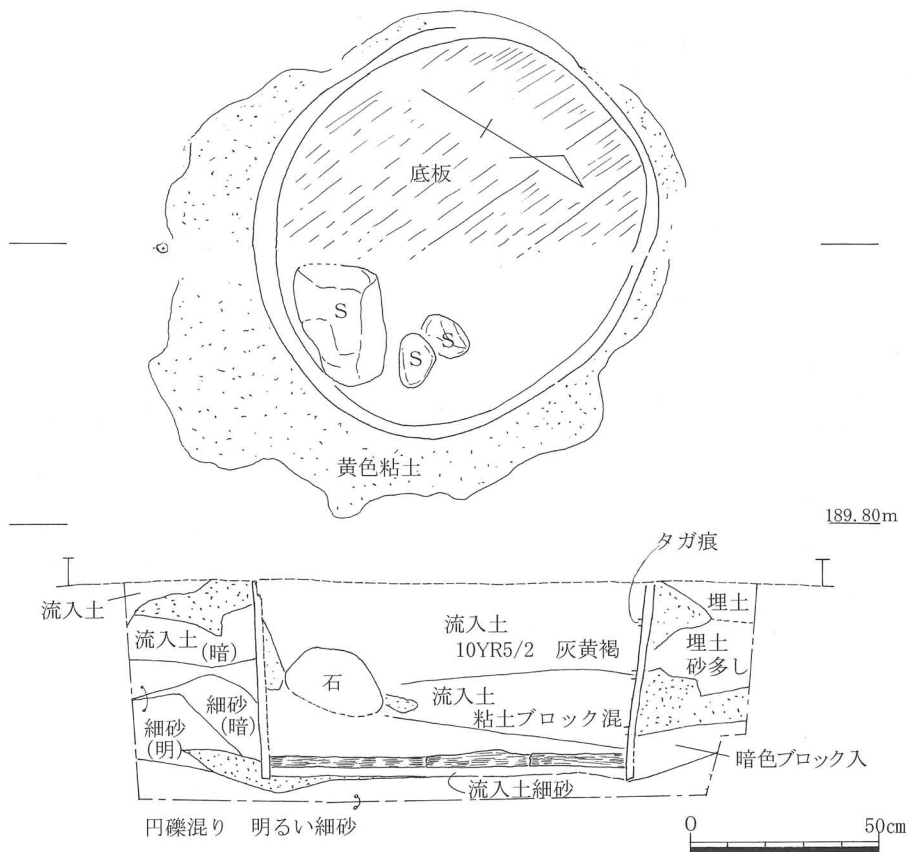


図24 27C-1 桶 遺構

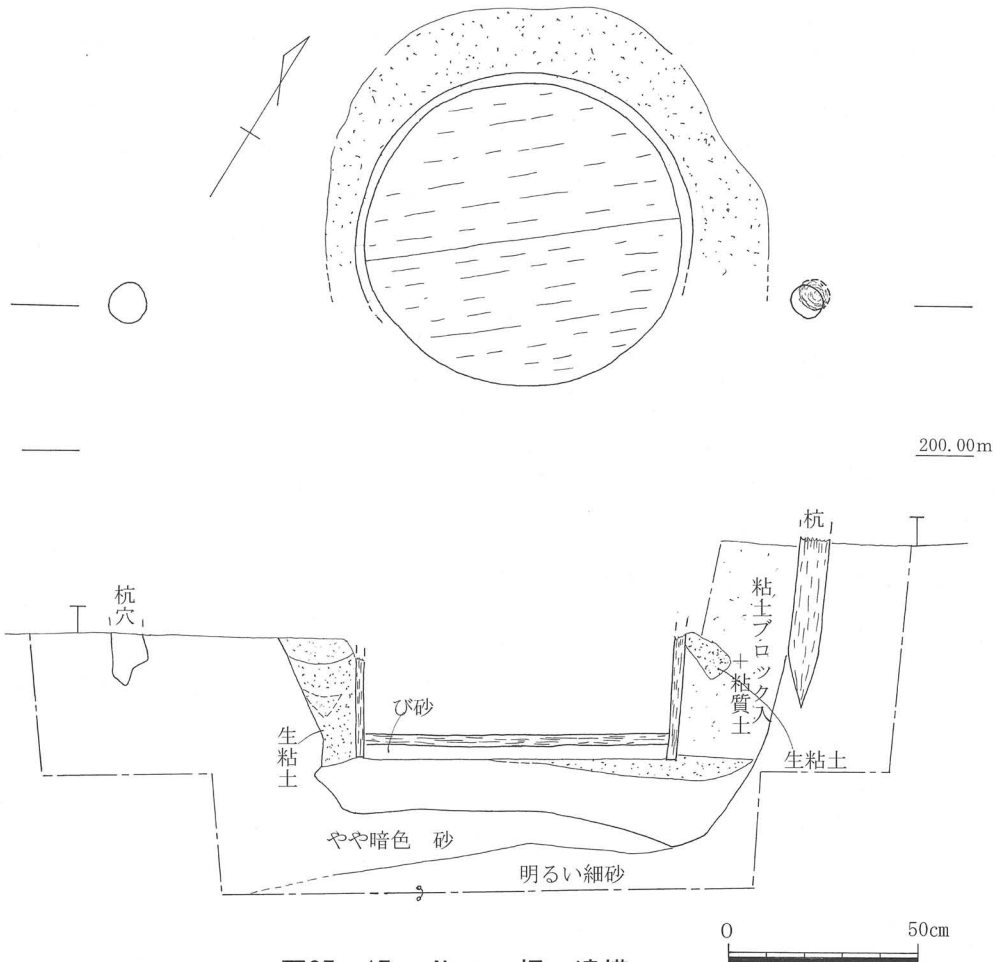


図25 17D No.1 桶 遺構

桶の埋設状況は素掘りのままのものもあるが、底や外周に粘土を敷き、或は巻いて漏水対策としたものも多い。

桶体がほとんど腐朽しているものについても、据えられた跡の法量や箍の位置などはほとんど同じであるが、桶体は杉材で造られていたものもあったようだ。

また桶の両側に支柱坑を立て、木を渡して棟とし、苫屋根で被うものとみられるものもあった。

これらの桶遺構の多くは調査区10-D区に特に集中し、二重～三重に重複する場合も認められる。27-D・E区には粘土敷き・粘土巻きの据え桶が主であり、桶内の流入・投入物に肥杓と見られる木材片もあるなど、最も新しい遺構と思われた。

桶遺構としたものは次のようである。

- | | |
|---------------------------|-----|
| ∴粘土巻き及び粘土敷きしたもので桶材の残存するもの | 計3基 |
| ∴同上で桶材の残らないもの | 計5基 |
| ∴地山素掘りに据えたとみられるもの | 計5基 |
| ∴重複後設置のため残存不良のもの | 1基 |

これらの桶の用途については残存桶下端の隅の土を採取し検討した。明確な結果とは言えないが、蛔虫卵かと思われる結果を得た。^{※11} また復元的桶体と設置状況は文献資料^{※12}にみられる「糞壺」

「糞桶」と一致し、民俗例の所謂“野壺”であり、畑作栽培で現地に設置する肥料溜めの桶又は壺・甕の類である。

現地は河岸部が水田化したのは昭和10年代であり、それ以前は畑作で、麻等の栽培であったと伝えられることから、その畑地の一隅に設置されていたものであろう。

2 火床遺構と集石遺構

火床遺構は2基を検出した。12E区と約5m離れた13E区とにあり、前者は従前のトレンチによって半ば失われていたが、大略同様とみられる後者13E区の状況を中心に補記しながら記す。

集石遺構はこの火床近く斜面下方2~4mほどの位置に15~35cmほどの被熱した川石の積み上げである。ベースとなる地形は緩斜するフラットな面の先端部で、火床部前方からは降下斜面となる場所を両者ともに選んでいる。残存する火床の最下底部は隅丸方形で皿状の掘り込みであり、残存する深さは25cmほどである。底面には管孔材の炭片を含む炭灰土が厚さ10cm弱堆積し、部分的に還元色を呈している。この中に薪を積み、その上に拳大の礫を投入して石礫を焼き熱した状況である。また12E区遺構では、火床底面が石礫は含まないが后背方向へ広幅の溝状で昇り勾配となっているようだ。

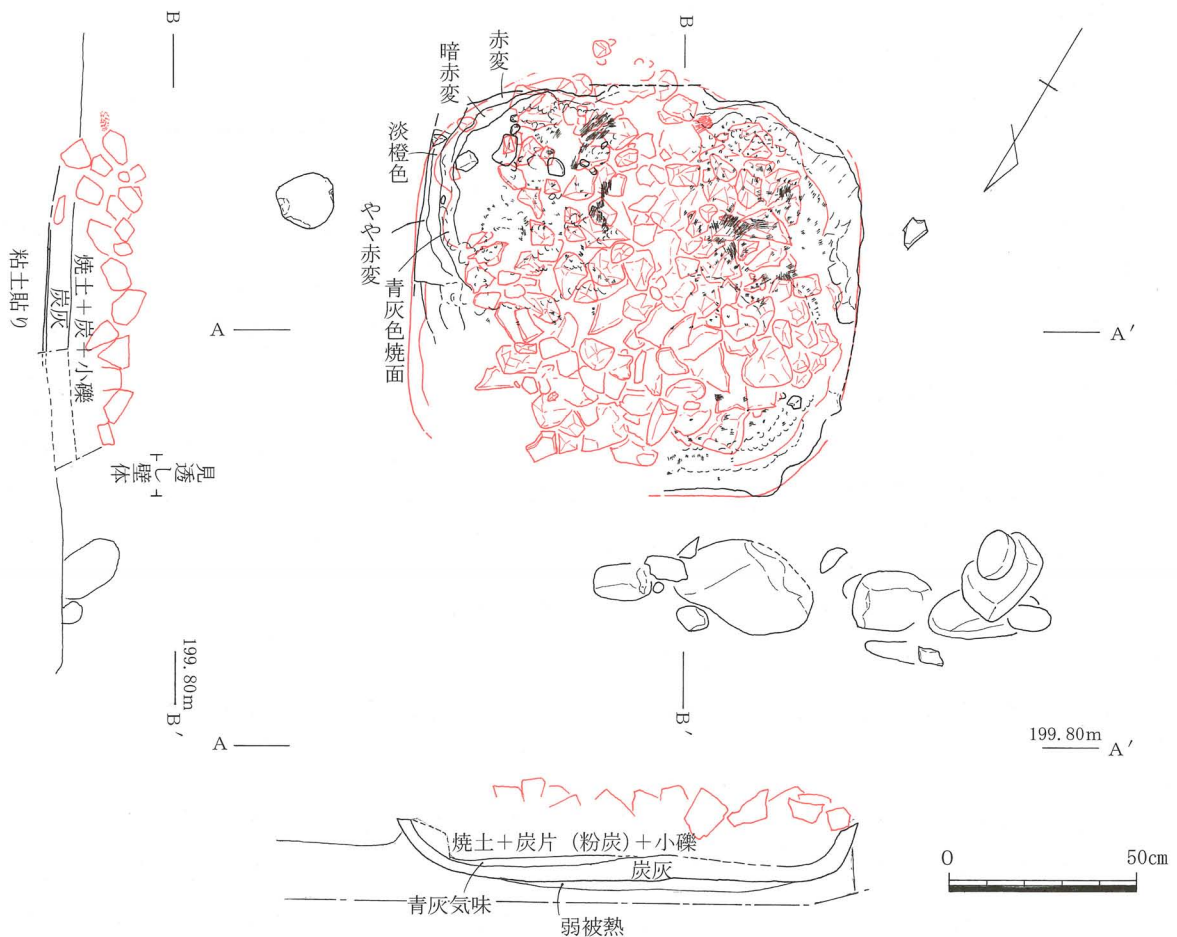


図26 13E-1 火床遺構

なお2基の火床底はほぼ同じレベルに造られており、従前地地形図の記されたこの地点は水田面であり、そのレベルから約90cmの深さにあたる。しかし遺構は水田造成以前であることから、この火床造りの掘り込みの深さについては明確にし難い。

これらの状況は、地方の民俗事例にみる麻蒸し法^{※13・14}の記述にほとんど同じとみられる。この資料や、断片的ではあるが近隣地域での^{※15}伝承等を参考に当該遺跡を麻蒸し床として遺構を推定復元すると次のように考えられる。

炉床の掘り込みは平面形は杓文字形で柄の部分にあたる場所は下降する傾斜面とし、下端は大きく掘って火床部とする。火床部の深さは0.4mほどであろうか。掘底部は約1m×1m略方形とすると、地表面では1.5mほどの略円形であろう。

これを用いての麻蒸しは、石礫を焼き、水をかけ蒸気を発生させ、それを刈り取った麻の束に導いて蒸す方法であり、繰り返しこの火床を使用するため、焼石は傍らに積み置く。他地域で一般的な桶に詰めて釜上に置き蒸す方法に比べて簡易な手法といえよう。

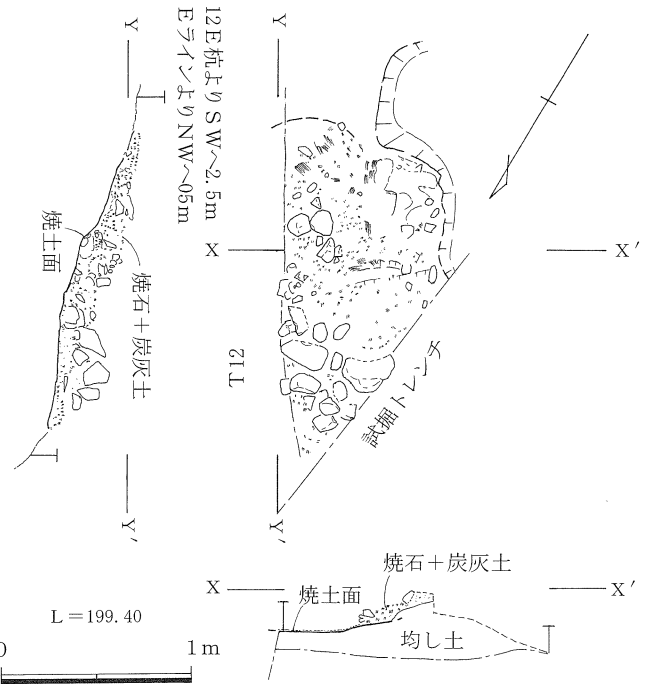


図27 12E-1 火床遺構

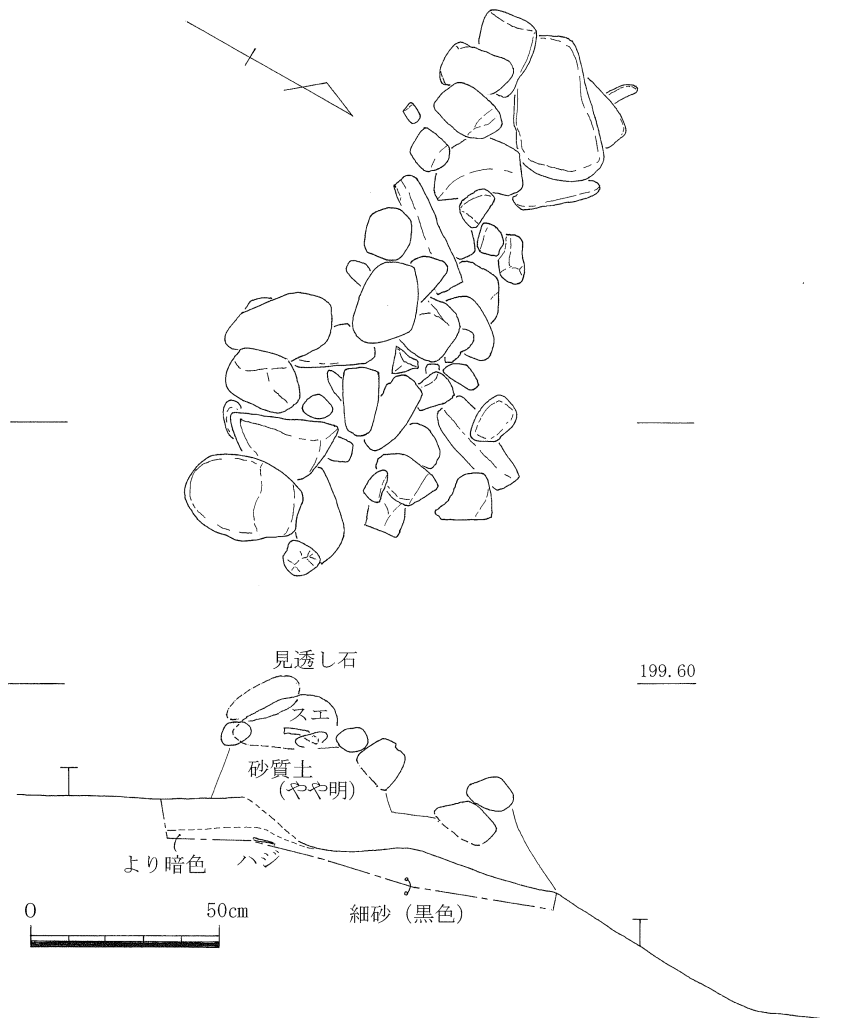


図28 14E-1 集石遺構

3 柱穴遺構

柱穴状遺構は概ね次の2群に所在する。

18E区から21D区にかけての約20mの間には大型の柱穴が集中する。7～10区列の間には小杭～小柱跡が桶遺構と混在している。

前者の大型柱穴群について

河成砂土のベースに長径1m余りの不整長円或は三角形の掘り込みを行い、長端部に近い位置を最も深く、楕円状とした掘り方のものが多く、下底に礎板石を置くもの(20D-1、19E-1、19D-1)もある。現存の深さで50～65cmほどにもなる深さのものもあり、太柱が想像される。

これらの柱穴の配置には明確なプランが見当たらず。むしろベース地盤の等高線に沿って帯状に集中するものとみられる。これらのうち最も深く大型のピットのうち4穴(19E-1、19D-4、

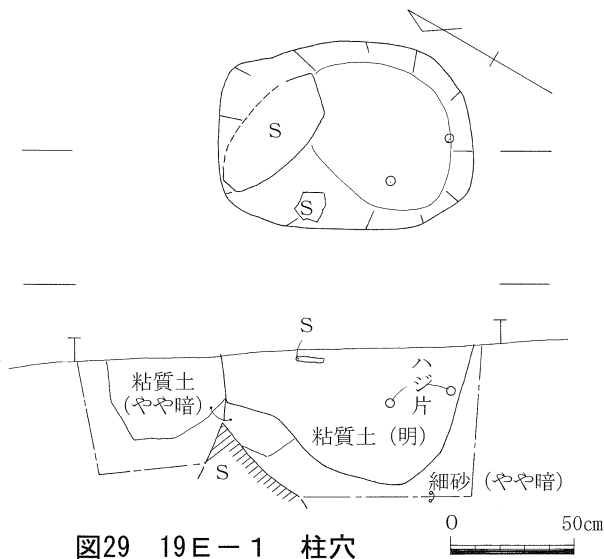


図29 19E-1 柱穴

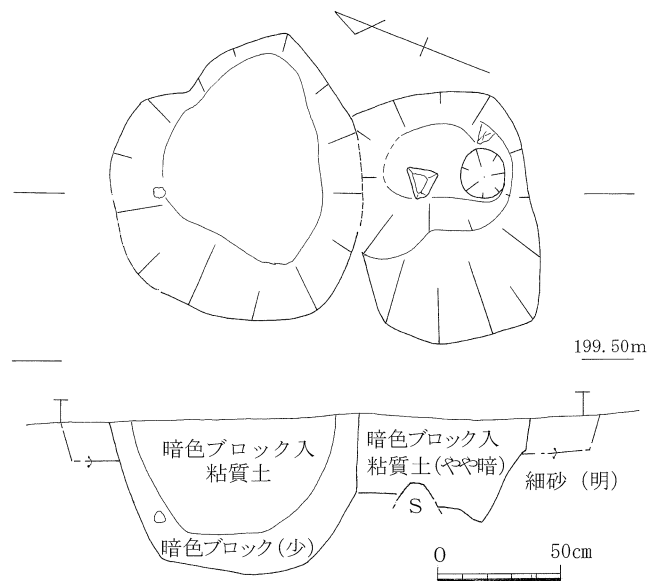


図30 20E-1 柱穴

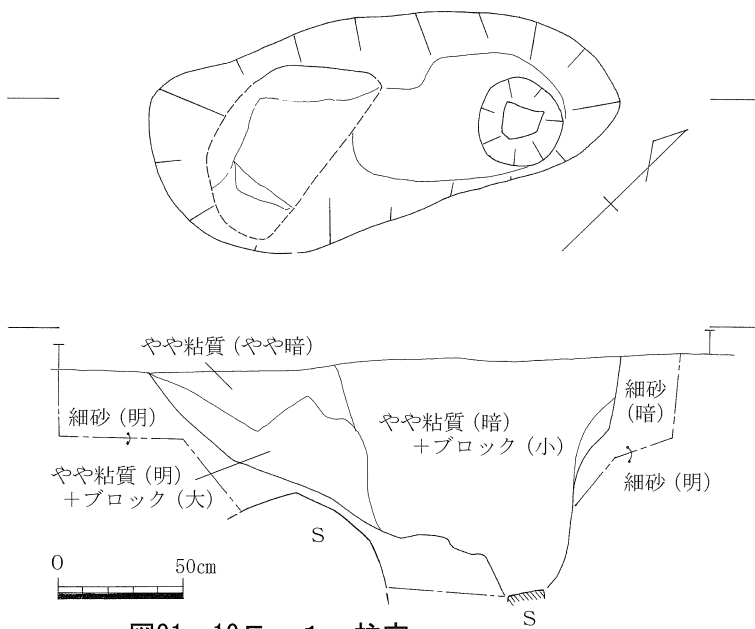


図31 19E-1 柱穴

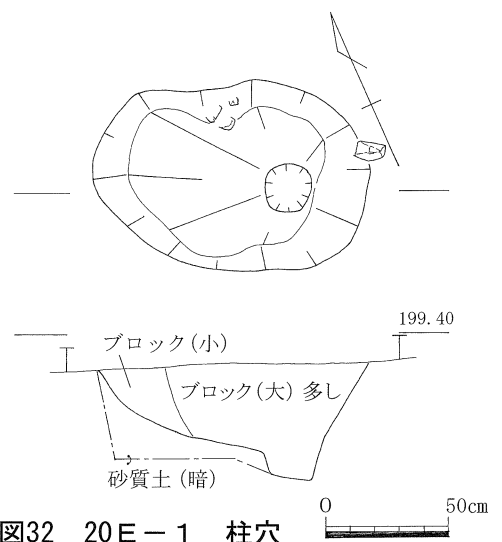


図32 20E-1 柱穴

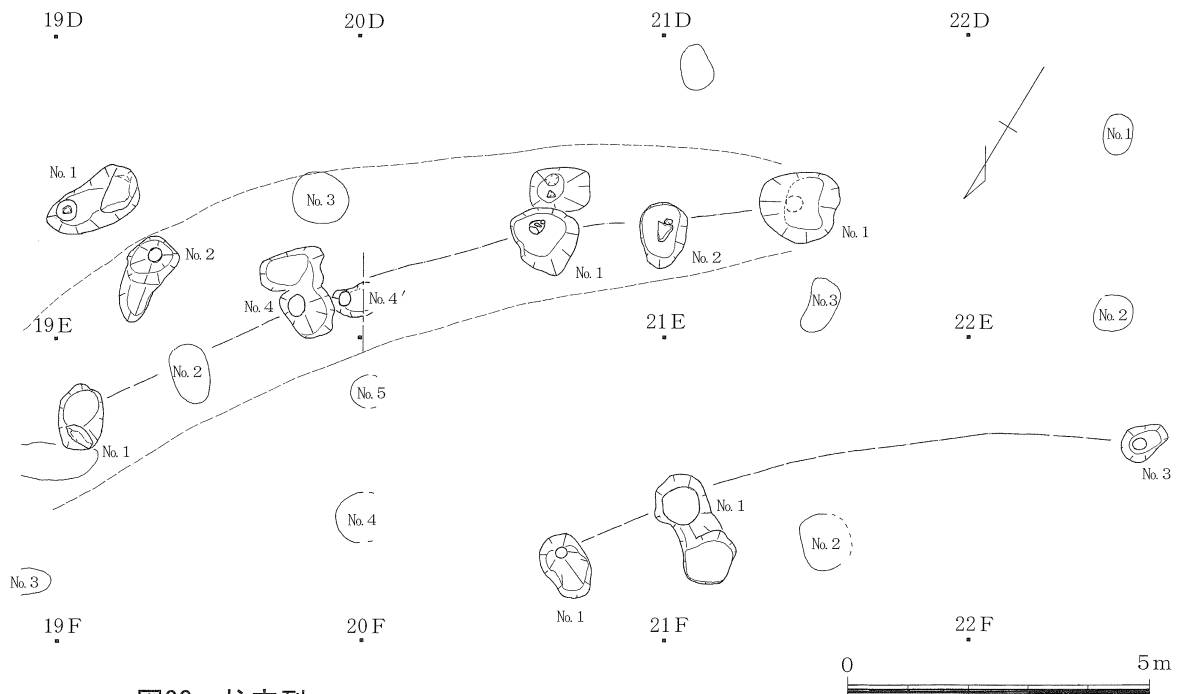


図33 柱穴列

20D-1、21D-1) はそれぞれの間隔4.0m、わずかに弧状をなす線列をなし、これが配置プランであると思われる。またこのラインを中心に幅約2mの範囲にほとんど柱穴ピットが位置している。さらに川寄りへ5mほどにも同様の3穴(20E-1、21E-1、22E-3)がある。この位置を巨視的にみると、川の本流が狭い流路から急に幅広い低地部(旧氾濫原)への移行部に相当している。

これらを総合的にみると、この柱穴群は洪水時の防災のために設置した防御柵の可能性が大きい。

4 小柱穴・杭跡等

小柱穴・杭跡は7~10区に密集し、特に10D区において桶跡と共に密に所在した。この位置は11区ラインに沿って山手から川岸方向へ旧水路の跡に沿っており、これより下流域方向(7~10区)は一段と低く、そこへの進入路沿いに相当するところである。

小柱穴は概ね直径・深さともに30cm程度のもが多く、残っている柱痕跡(10D-8)や腐朽根(18E-3、22D-2、23C-1)などからみると、柱材は直径10~13cm程度である。杭穴はさらに小さく浅い。

これらの配置のプランは明確ではないが、重複する桶埋設跡近傍や或は添うものも多く、また埋設されないで地表に仮りに据えられる場合も考えられる。これらは27D-1(図25)の場合のように雨被いなどの支柱であったと考えられる。

なお、これら柱穴のうちには礎板石かと思われるもの(9C-1、9C-5)もあるが、総じて石礫質のベースであることと埋め戻し土が砂礫土であるなどで明確には判別できない場合が多く、また礎板石の必要性にも疑問が残る。

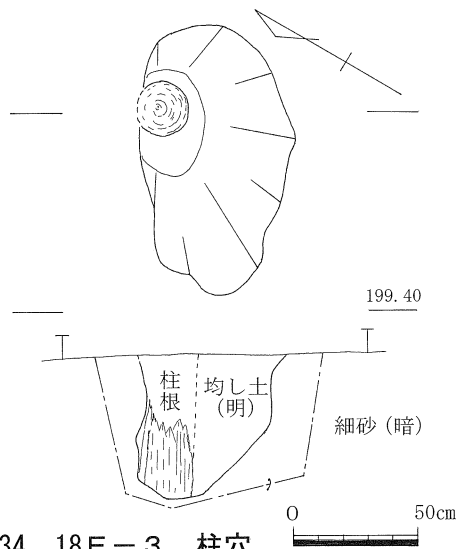


図34 18E-3 柱穴

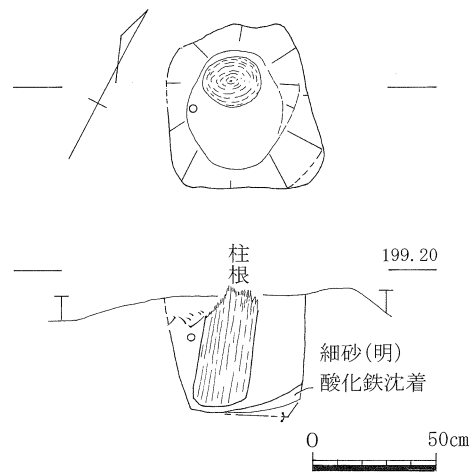


図35 22D-2 柱穴

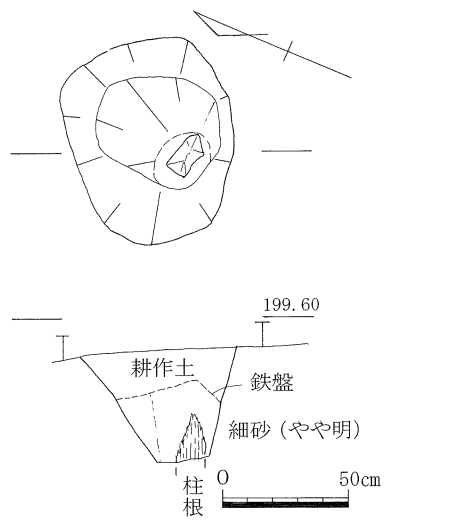


図36 23C-1 柱穴

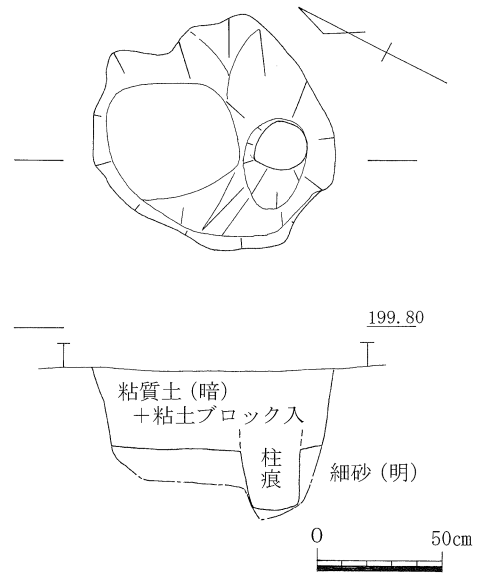


図37 10D-8 柱穴

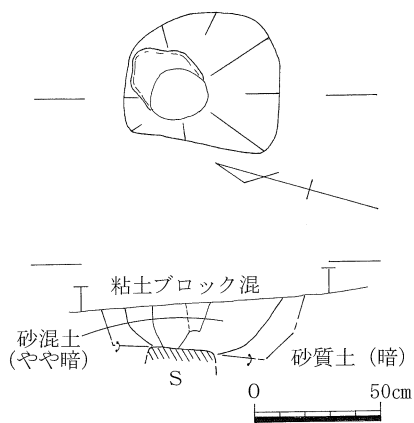


図38 9C-1 柱穴

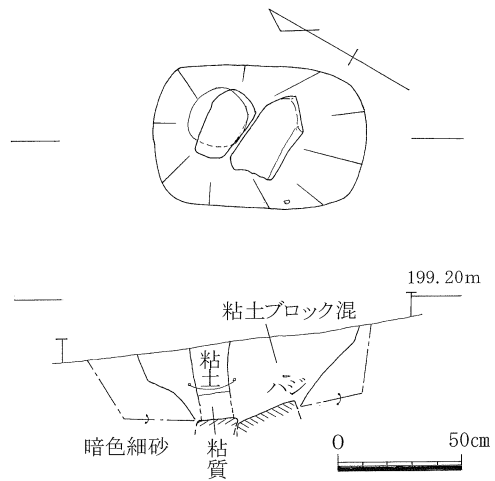


図39 9C-5 柱穴

V 土馬

1 出土状況

調査区内の南側で盛土整形された丘陵斜面下端に工事のため敷設された作業道があり、その山手寄り路肩部に半ば埋もれて露呈していた。車輛等の踏圧であろうか潰れていたが、付近への散乱は認められなかった。またこれを包含していた土は他からの搬入土ではなく、付近の地盤土に近いものとみられた。

この地点は調査の19～20区の南側で一段高く約10m離れたところである。なお集落移転前の地形からみると、「新シ屋」と「仲加美」の宅地の間の前方で、その後背斜面に祀られていた荒神（樹木）と大山社（祠）への小路の分岐点あたりの位置に相当する。

2 現存部の観察

土師質の土馬で現存接合長は22cm、胴直径約5cmを測る大形である。顔面前端、尾部及び前肢と後肢は欠けている。胴部と四肢はそれぞれ円柱状の部材をつくり、これを接合している。そして接合部である肩部と臀部にはハケ目の調整痕が明瞭である。顔面は片面が破損しているが、わずかに凹ませた眼と、その後方やや高くわずかに隆起させて耳を表現しているようだ。鬣（たてがみ）は粗略に帯状の粘土を付け、鞍も断面三角形の粘土を貼り付けて表現している。また肢脚は下半の接地部は失われていて不明。

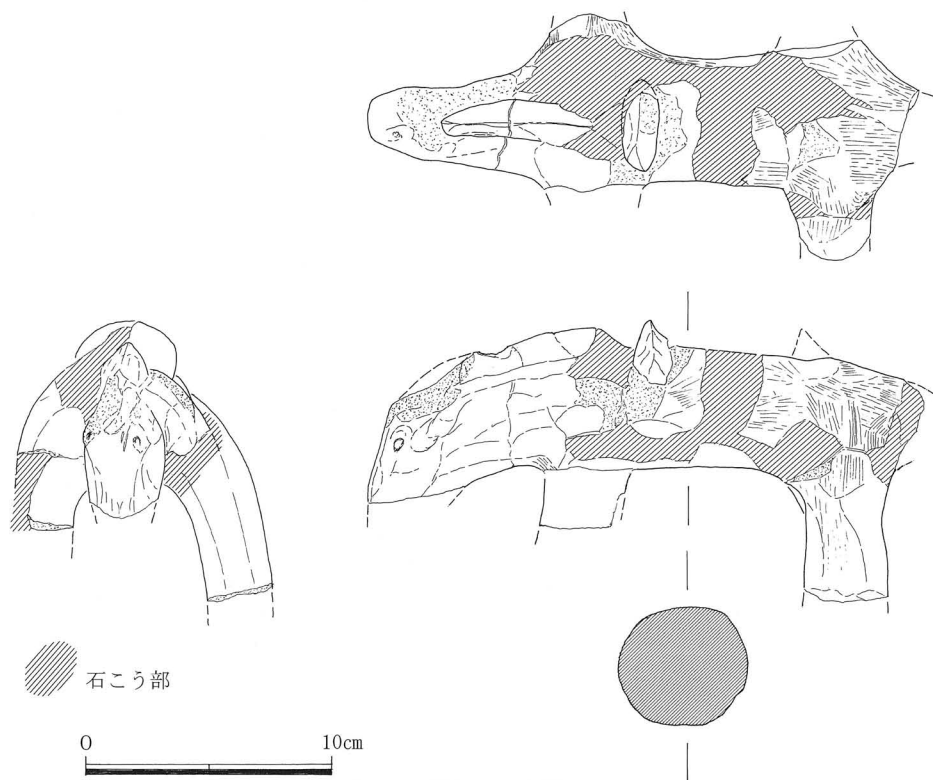


図40 土馬

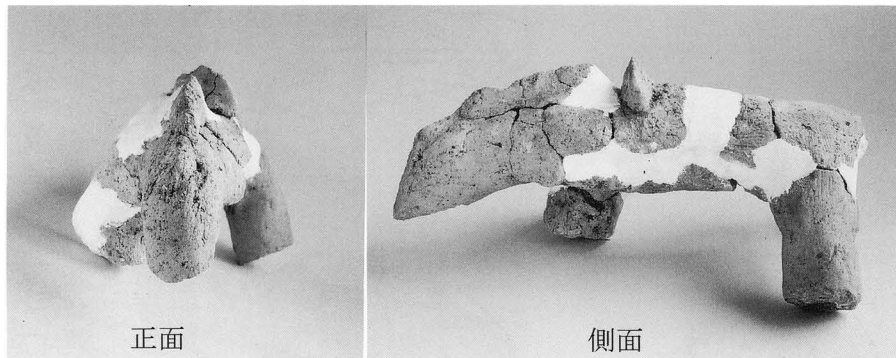
3 復元的所見

この土馬は頭・尾端が欠けていて全体の姿や体長は明確ではないが、大まかに長さ30cmほどとみられ、格別の大型品と言えよう。姿は頭部が高く上らないで、むしろ首を前方へ伸ばした形といえる。また尾部は緩やかに下垂するのではなかろうか。単なる裸馬ではなく、鞍は付けているが、手綱や面繫（おもがい）など他の馬具の表現は見当らない。これは飾馬の象徴として鞍の表現をしたものとみられる。

思い当たる大型飾馬としては、印象的に近い姿は美保神社境内社出土のものと、上方林出土陶馬で大型品の頭部が挙げられよう。前者は神社地、後者は祭祀遺跡での出土である。

一般的に土馬の変遷は飾馬から裸馬へ、大型から小型へと言われていること^{※16}から、土馬盛行の長い段階のうちと考えられる。

出土状況



正面

側面



上から

VI まとめ

家ノ脇 I 遺跡は北流する斐伊川の狭長な床谷地形に所在し、常水面に近い低地の耕地部分であり、下層は河道部である。調査で検出したのは流砂層上面やその上の薄い表土層に包含する細片化した土器片類などであり、またそれらの面に掘り込んで設けた近世末～近代の麻栽培とその一次加工過程とみられる遺構であった。

1 近世以前の遺物の検出状況

1) 縄文時代遺物は極めて少なく粗製土器片が主で、石器類では明らかにこの期に属するとみられるものは無い。土器片の出土位置は調査区のほぼ中央で川寄りの限られた範囲で、砂層上面に包含していた。磨耗していることから上流部より川によって流下し漂着したものであろう。

2) 複合口縁土器類はやや下流部にあたり、砂層ベースの上に堆積した暗色土下面のやや広い範囲に散布していた。土器は甕が多く口縁が発達し、擬凹線をめぐらすもので、平底のものから複合口縁で胴内面にはクシ目の調整が多く、肩部等の施文は概ね弥生中期の様相であるが、若干は丸底の古式の土師器もみられる。大破片や、個体のまとまり等もみられることから川の本流による流入ではなく、ごく近い丘麓部からの雪崩れ込み堆積かと思われる。

3) 土師器片は甕形の器の単純口縁部分が主で、総数は少ない。外面に煤の付くものもあり、律令期ごろの煮炊きの日用品とみられる。

4) 須恵器片には高坏や蓋坏、甕、壺の破片も認められ、概ね8世紀ごろのものであった。これらは20～22区及び13～16区のほぼ同一レベルに散在し、暗色土中～下面に包含していた。土師器や須恵器の出土位置は河川本流に關与するものではなく、開折谷の沖積錐の張り出し端にあるとみられることから、山裾部からの移動であろうか。なお、山手寄りには狭いながらも居住域も思われるところであり、また近世以降には民家の所在地となっている。

5) 中近世陶磁器類は調査区上流部と下流部のいずれもより川岸寄りの地帯に散在し、瓷器を含む日用雑器の陶器類が主で、布志名焼など近世の地方窯もみられる。

磁器は少ないが染付や渡来青磁片も数点採取した。これらの近世の遺物は川方向へベースの傾斜下降するあたりに上流部から下流部にかけて暗色土中に点在し、旧農地の段差付近であり、のちに初期の農地造成に際し盛土部分に相当しており、河川による流入とは考えられない。

このように検出した遺物はすべて遺構の存在は認められなかった。

2 近世～近代の遺構

1) 列状柱穴群は調査区中ほどの位置に約20mにわたっておそらく数次にわたって柱を建てた跡が重複しながらほぼ列をなしていた。柱も大方は20mを超える太いものであったとみられる。この位置はかつて狭い流路が急に広がり低位の氾濫源に移る境部にあたり、洪水時の防災堤の意味をもつ位置と方向であると考えられる。

2) 埋設桶は水田化以前の耕地の段差部に所在し、特に下流部低位置に集中する。また柱穴～小柱穴を伴うものが認められる。桶は3尺×3尺の法量とみられ、民俗事例等からして、畑地の傍らに設置する肥料（糞尿）溜めであった。村々では昭和前期まで麻類の栽培が多く、これを一次加工（苧）して出荷していたところであり、水田化以前は伝えるところからしてもこれに相当する。

3) 火床遺構と集石

火床は埋設桶群に近い微高部2カ所にあり、床底部分のみの残存であるが、床面には焼けた小礫が敷いた状態である。また床面は後背（山手）方向でやや登り、前方では若干降って焚口を思わせている。その傍らには一抱えもある焼石の積み上げも2群ある。これを復元的にみると皿状の掘り込みに太目の薪状の基礎に薪・租朶を積み上げて火を入れ、火勢の上に細礫～大礫を投入してこれらの石を焼いたものとみられる。

遺構としての残存部分は以上のとおりであるが、これから聴取事例や文献等を参考にして蒸す方法は次のようであったと試算する。

原材料の麻は葉を除いて茎のみを結束し、火床後背部に接続する蒸し部に梢部を上外端に斜位に積む。このとき火床部は燠の上に焼けた石礫が累積していて、その上を蒸し部の接続部を除いて藁を置いて灰化した内層の上に濡れ蕙か生笹などで被う。

蒸し部は原材料を伏せ込んだのち蕙等で被い、さらに厚く土を盛り、このとき最末端には笹などの束を置いて蒸気の上昇を見る通気孔部を設ける。

操作は火床部の被覆の最上部から水を投入して焼石の熱で蒸気を発生させ蒸し部へと導く。これを繰り返すことにより蒸し部末端より蒸気が登る状態をみて蒸し状況を判断し、終了時に火床部上や蒸し部末端などを土で閉塞して一夜程度余蒸しを行う。

経時後に蒸し部を開いて蒸された麻を取り出して剥皮作業へと移る。ここで、火床の被覆方法や材料・蒸し部の法量や被覆の方法などは想定である。

以上は近世民俗を考古するもで、その過誤は否めず、後考に待つものである。

註

1. 遺跡範囲確認は平成11年秋期 島根県埋蔵文化財調査センターの試掘調査によって確定。最終日程となった当該部分は近くの工事施工に伴って破損も考えられたことから、奥出雲町は改めて平成19年度に確認のためトレンチ調査を行って次年度に備えた。
2. 地理用語
地理・地形の記述については、鈴木隆介：『地形図読図入門』第3巻 古今書院 2000、P711「河谷各部の形態」を参考にした。
3. 皇国地誌 村誌 明治8年 県下各村に対し、地誌編纂を指示し、各々作製した筆記本で県立図書館蔵 付編 資料3参照
4. 付編 資料1参照
5. 植田 有氏談
6. 中・近世陶磁器は、西尾克己氏の教示・指摘を得た。
7. 備前焼及び亀山焼についての編年的観察は次によった。
∴伊藤 晃：「第十一章 窯業」『岡山県の考古学』（近藤編） 吉川弘文館 昭和62
∴山本悦世：『寒風古窯址群』—吉備考古ライブラリー7— 吉備人出版 2002
8. 鍬
∴筑波常治：『日本農業技術史』地人書館 昭和34
∴『島根県内農具図解』（毛筆記和綴本）明治11? 島根大学図書館所蔵本
9. キセル
∴小松・岩崎：『喫煙具』日本の美術No.412 至文堂 2000
10. 出土銭
∴『日本出土銭総覧』1996年版 兵庫埋蔵銭調査会
∴坂詰秀一：『出土渡来銭』—中世— ニューサイエンス 昭和61
11. 付編 資料7参照
12. 付編 資料3参照
13. 付編 資料4参照
14. 付編 資料5参照
15. 付編 資料6参照
16. 土馬
主な参考文献
∴金子裕之：『律令期祭祀遺物集成』1988 昭和61～63年度文部省科学研究費助成金総合研究A「日本古代の律令制神祇祭祀の成立過程と構造の研究」研究成果報告書Ⅱ
∴広江耕史：「出雲の土馬」『えとのす』16号 新日本教育図書 昭和56
∴黒崎 直：「古代の信仰」『季刊考古学』No.2 雄山閣 1983

付編

資料1 斐伊川史（洪水 仁多郡内の記録ヨリ）

寛文	4	(1664)	川船始まり
延宝	元	(1673) 5/13	洪水 日本国中で
	2	(1674) 6/25~27	〃 死者あり 42国洪水という
貞享	2	(1685)	川船終わり（連年の洪水の為か）
元禄	元	(1688)	このころ川船再開
	4	(1691) 6/1~6/3	洪水
	15	(1702) 6/28~7/1	大洪水“午の洪水”と呼ぶ
宝永	元	(1704)	横田大馬木川土手譜請
	2	(1705) 5/27~6/1	洪水
正徳	4	(1714) 8/9	大洪水
享保	5	(1720) 5/22	大水
	6	(1721) 7/14~	台風雨 洪水 田・畑・土手・関被害
	7	(1722) 7/18~24	洪水 山田崩潰 210戸 死人15人
	8	(1723) 9月	“三成川方不益”に付き止
		4/27	“横田村雪アラレで麻打枯捨ル”
		(享保13年にはタバコ・芋の産物名あり)	
	14	(1729) 8/14	洪水
		8/20	風
	18	(1733)	“六月旱為秋止、荒芋値段駄三十目ヨリ四十目位”
			余郡より特に麦不出来 荒芋・たばこ等の安値 百姓衰微（仁多郡誌）
元文	3	(1738) 5/9 6/3（土用入）	大雨洪水
宝暦	4	(1753) 8/15	川大水…田地流失
	10	(1760) 8月	荒芋値段良く上物8貫文 大峠産 タバコ1斤は23文位と記す（札1匁は75文位）
明和	8	(1771) 6月末	洪水 飯石や里部に山崩被害 死者あり
文政	9	(1826) 5/21	風雨洪水 大呂2家流失 ヨコタ 六日市 川流れ 木次 八幡前土手切れ 町中流れ 死者多数

天保	元	(1830)	これにより下流砂堆積の為、出西一庄(庄)原 まで、横百間の川を通す工事 仁多郡から6000人の出夫
天保	6	(1835) 6月	大洪水…里部が甚だしい
	14	(1843)	三成川方御免 川さらえ始まる
		10/1	通船始まるも「工事完全ナラザル故」か以来通 船稀れとなった
明治	5	(1872) 8/9	大洪水 西の洪水
			「八月廿九日 朝ヨリ降雨午後七時水量ヲ増シ 三成川ノ如キハ平水ヨリ殆ト二十尺ヲ増シ前代 未嘗有ノ洪水ニテ田畑ノ流失橋梁ノ墜落 横田川 八川川 馬木川ヨリ下流ニ至リ水害甚ダ 多く浸水家屋川筋ニ多く三成ノ如キモ人家流失 浸水沿岸此害ニ罹ラザルモノナシ 溺死人上阿井一人 小馬木九人 大馬木一人 亀高一人 計十二人」 —仁多郡役所記録—
明治	26	(1893) 10/13	台風 県下風水害 村内河川被害
	27	(1894) 9/11	県下大風水害 昨年に続き水害多し
	28	(1895)	(水害復旧工事盛ん)
昭和	40	(1965) 7月	集中豪雨 被害甚大

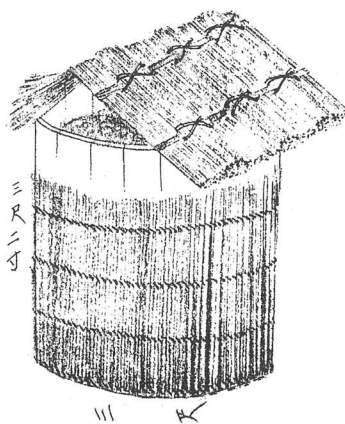
資料2 明治初年 村々物産表 -明治14~17年統計- (皇国地誌村誌より作表)

		煙草	人参	麻	麻苧	木炭	砂鉄	その他				
佐白 121戸	品質	中位	上	上		上						
	数量	160メ	50メ	600メ		30,000メ						
	販路	木次	松江	備前国		木次 大東						
八代 121戸								柿	香茸	菓子	干うどん	清酒
	品質	佳	佳	中		佳		美	佳		中	美
	数量	480メ	130メ	240メ		5,400メ		320メ	50メ	1,300斤	80メ	25石
	販路	大原郡	松江	備前国 岡山		木次町 下久野村		大東 木次町	大東 木次町	三成 馬木 横田 阿井等	三成 横田町	近村
三成 197戸								鉄類				
	品質		美		美			美				
	数量		175メ		2,100メ			90,400メ				
	販路		松江		備前 岡山			大阪 越前				
馬馳 60戸	品質		美		美							
	数量		100メ		260メ							
	販路		松江		岡山							
三所 85戸	品質		美		中	美(大炭)	美					
	数量		280メ		250メ	8,000メ	80,000メ					
	販路		松江		岡山	大谷村 亀嵩村	大谷村					
上三所 100戸	品質		美		中							
	数量		80メ		270メ							
	販路		松江		岡山							
郡 81戸								鎌				
	品質		美		美	美(大炭)	美	美				
	数量		100メ		1,200メ	30,000メ	26,000メ	30,000挺				
	販路		松江		備前 岡山	亀嵩村 能義郡	大谷村	松江 大原郡				
高田 74戸								牛	馬			
	品質		美		美			美	美			
	数量		25メ		1,100メ			8頭	1頭			
	販路		松江		備前 岡山							
亀嵩 295戸								茶	そろばん	鉄類		
	品質				美				日本国中 の優品	中		
	数量				1,200メ			150斤	600挺	23,000メ		
	販路				備後尾道 備前岡山			松江	各国へ	大阪府下		

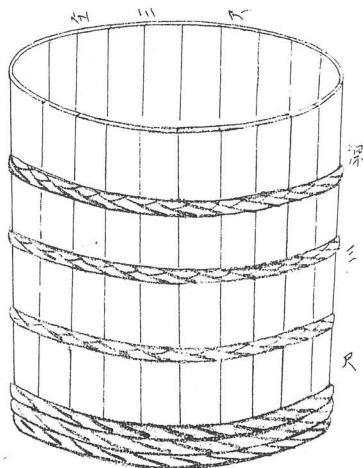
		煙草	人参	麻	麻苧	木炭	砂鉄	その他					
下阿井 213戸	品質			美									
	数量			60メ									
	販路			記入なし									
上阿井 350戸								内尾谷わさび					
	品質							美					
	数量							不詳					
高尾 124戸								銑	鋼類				
	品質				美	美(大炭)		美	美				
	数量				330メ	14,000メ		42,000メ	25,000メ				
三沢 153戸													
	品質	良し		良し				牛	馬	米	麦	・大豆 ・小豆 ・酒 ・酢 ・うどん ・醤油 ・蠶	
	数量							良	良				
販路	他村へ						他村へ	他村へ	他村へ	他村へ			
鴨倉 59戸													
	品質	最も良し				最も良し		米	麦	小豆	大豆	薪	
	数量							最も良し	最も良し	最も良し	最も良し	最も良し	
河内 64戸													
	品質	最も良し		最も良し		最も良し		米	麦	大豆	小豆	薪	
	数量							最も良し	最も良し	最も良し	最も良し	最も良し	
北原 76戸													
	品質				中			中折紙	塵紙	鮫	鮎		
	数量				410メ			500斤	100束	1×500匁	1×500匁		
平田 90戸													
	品質				中			中折紙	塵紙	鮫	鮎		
	数量				1,150メ			1,500束	400束	1×500匁	3×500匁		
湯 126戸													
	品質				中			中折紙	塵紙	鮫	鮎		
	数量				650束			5,820束	2,850束	5メ	7メ		
	販路				島根県、岡山辺り			木次町	木次町				

箕桶、新地ノ近傍ニ楯置キ豫テ農務繁忙ニ至ラズ前箕汁ヲ其中ニ貯ヘ播種ノ際施芸ニ使テラシムルナリ

箕桶 十五分一



箕桶 十五分一



麻の皮剥ぎ

石塚尊俊

能義郡広瀬町東比田を訪れたとき、この地の篤字畑伝之助氏から、第二次戦中まで行なっていたという、いとも古風な麻の皮剥ぎ法を聞いた。

麻は毎年四月、辛夷（こぶし）の花の咲く頃に蒔き、八月の初めの土用満月の頃、晴天の日を選んで刈りとる。そして葉を落として蒸して皮を剥ぐが、問題はその折の蒸し方である。大抵の所では蒸し桶を使うが、ここではそのようなものは使わない。

まず地面に鉢型の穴を掘る。穴の大きさは蒸す麻の量によって違いが、三、四人のモヤイでする場合には、大体直径五尺、深さ六尺くらいである。そういう穴をまず掘り、次いでこの一方から地表へ溝を立てる。だから、できた穴は、いうならばちょうど片口を埋めたような形になる。

鉢型の部分の底に薪を積み、上に石を並べる。そして薪に火をつけると、やがて上の石が焼けてくる。その頃合を見て脇の溝の部分に麻を積み、上に筵をかぶせ、石の上には笹をかぶせる。笹は必ず必ず燻ぶる。笹の一部をはぐり、水をかけると、蒸気がどっと上がるから、すかさず蓋をしないと、蒸気は脇の麻の方へ向かう。この操作を十回くらいくり返すと、蒸気は出ぬようになり、麻の中はむんむんするようになる。

こうして一晩おいて翌朝とり出すと、麻は完全に蒸れている。これを一日、晴天に干した後、水に浸して皮を剥ぎ、その皮を一、二晩、外へ干して夜露をとらせる。荒苧ができ上がる。苧の方はいわゆる苧殻で、草屋根の萱の下に敷く。

荒苧は鉄釜で灰汁を入れて半日くらい煮、川の中で竹でこさげ、糞皮を捨て、きれいな繊維だけ残して干す。これが苧である。

（『山陰民俗』22、昭和三十七年一〇月）

資料 5

五、土用の麻蒸し

〔床ざらい〕 東の空に入道雲が出る八月初め、天気続きの一日を選んで、隣近所四、五軒ずつ集まって麻蒸しをした。麻は四月の中旬に播いて八月初めに刈りとり、葉を落として蒸すのであるが、その方法は、石州あたりで最近までやっていた桶蒸しではなく、面地に穴を掘って火床をつくり、焼石に水をかけて湯気を立てて蒸すというやり方であった。まず前日、床ざらいといって、毎年使う麻蒸し床を掃除し、土こね場をつくり貼り芝を用意し、薪を集めておく。そして夜をこめて麻刈りをする。

〔火床つくり〕 当日は朝からみんなが集まり、まず火床の底に丸太の枕をおき、その上に燃えやすい小枝をおき、その上に次々と大きい薪を積み、上の方にはひと抱えもある大丸太をのせ、その上に川石を大小とりませて隙間なく並べる。そして、枯竹の長い松明に火をつけて、火床の底に差しこみ、底から火をつける。これを火がはいったといい、小枝に燃えついた火は上へ上へと燃え上がり、黒煙がもうもうと立ちのぼり、あたり一面煙に巻かれる頃、上に並べた石はまっ赤に焼けてくる。

〔床づみ〕 この時、火床に続く蒸し場の穴へ竹のさなを敷き、刈りとって葉を落とした麻を水に濡らして積み上げる。そして上に漚籠を覆い、その上に土こね場からどろどろの土を持ってきておき、麻の枝先の方、つまり火床とは反対の方は白どろ、つまり落とした麻の葉でかこっておく。

〔水注ぎ〕 一方、火所の焼石の上へは薬灰をのせ、その上に濡らしたさな木を渡し、その上に貼り芝を一面におき、ただまん中だけを少しあけておく。そしてみんなが一列に並び、手桶で水送りしてその中に水を注ぐのであるが、穴の口のところは元気な若い者が受持ち、ひと桶かけてはすかさず縄つきのさな機をふりあげ、力をこめてどうと叩いてその穴をふさぐ。すると火床の中で水を注がれた石は、ものすごい地響きを立てて水蒸気を吹き出し、それが一挙に麻の方へ吹いてゆき、枝先の白どろのところから抜けて出る。こうして二度、三度と同じ作業をくり返し、一応、湯気が出なくなるとその穴を芝でふさぎ、別のところに穴をあけてまた同じ作業をくり返す。こうして次々穴をあけては水を注ぎ、湯気を吹かしてはふさぐという作業を、六、七カ所もして廻ると、大体、焼けただけの石にはみんな水がかかることになるので、白どろのところを少しあけて蒸し加減を見、よいと見たら一休みするが、この仕事は非常

に急いでやらぬと、麻の根元、つまり火床に接する部分が焦げてしまう。こうして、戦場みたいなひとときが終ると、持参の漬物などで酒をくみかわして分かれるが、夕方もう一度集まり、止水といって、火床の中へ三、四カ所ほど水を注いでおく。これは消え残りの火を完全に消すのと、麻の乾燥を防ぐためである。

〔麻出し〕 翌朝、草刈りから帰ると、みんなまた集まる。そして床の上の土をとりのぞき、籠を剥ぎ、麻をとり出し、めいめいに持ち帰る。持ち帰った麻は、麻畑が刈りとって空いているから、そこへ拡げ、二、三日干してからとり入れる。

〔芋つくり〕 とり入れた麻は、再び水に浙し、家内中で皮を剥ぎとる。そして竹竿にかけて庭先で干し、一夜、露にあわせたのち、天日で干し上げて製品にする。これを荒芋という。この荒芋は、このままでも売ればよく、自家用にしようとするものは、このまま保存しておいて、田の草とりが終わって一息という頃、大釜で、土灰を入れて煮立て、川へ持ち出して流れ水で洗いつつ扱ぎ、白い芋をとり、干して仕上げる。これは手なれた中老の婦人の仕事であった。こうした作業は、第二次大戦頃まではまだたいていの家でやっていたが、いまではどこもやらなくなってしまった。明治頃には、芋をつくるだけでなく、これですらに機を織り、麻布をつくって着ていたものである。



麻蒸し

能義奥の民俗

昭和四十二年三月三十一日発行

著者 畑 伝之助

発行所 島根県文化財愛護協会

資料6 麻蒸し（仮称、操業の正確な名称不明）聞き取りの記録 蓮岡 法暲

平成21年2月28日（土）、蓮岡が大東町下久野上組自治会内田定義氏（昭和6年生）に聞く。
（内田氏は安来市広瀬町（旧能義郡山佐村）西谷出身）

1. かつて麻蒸し操業が行われていた場所

安来市広瀬町（旧能義郡山佐村）西谷の山本家（屋号大林、西谷の奥）の下方付近。内田氏の記憶では道傍の30度くらいな急斜面。（道路改修等があり、かつての操業の場所が保存されているかどうか不明であるという）

2. 操業の時期

昭和10年代まで（内田氏が子どものころ麻の皮剥ぎを手伝ったという）

3. 操業の方法

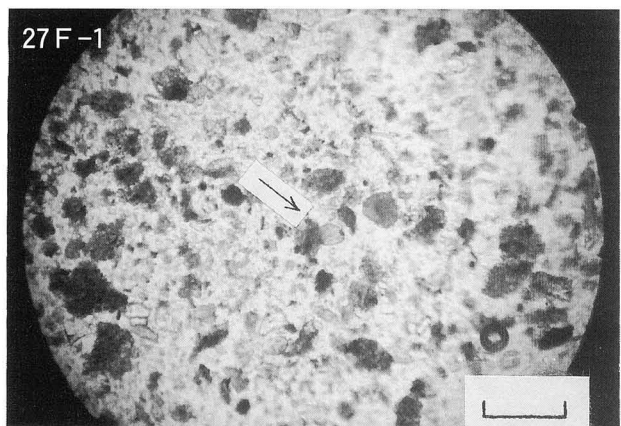
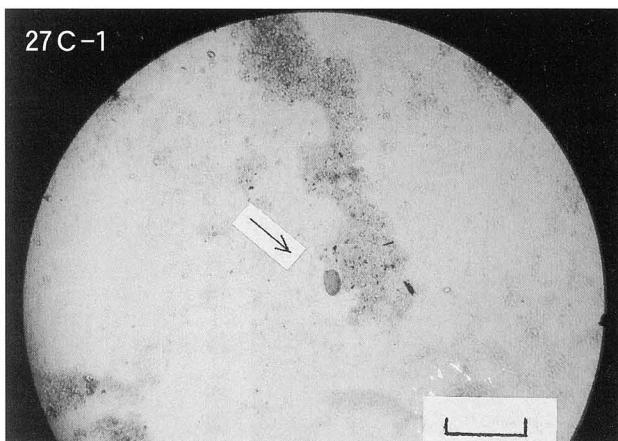
- ①急斜面に焚き口を下方に設けた穴（凹穴、規模等不詳）を掘る。
- ②穴の中で薪を燃やす。
- ③薪の上に石（10cm以下）を置く。
- ④石の上に束ねた麻を置き、水をかけて、水蒸気で蒸す。（麻の上に菰などを掛けたどうか不明）
- ⑤冷えてから麻を取り出し、皮を剥く（子どもも手伝いをし、簡単に剥けたという）。

資料7 埋設桶内土の検鏡観察

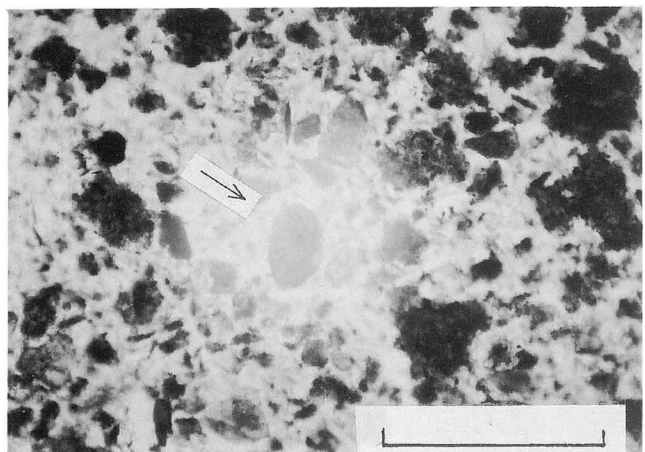
1. 目的 家ノ脇 I 遺跡検出の埋設されていた桶について、その用途は設置状況から“野壺”の可能性が高いと思われたが、わずかな残渣について寄生虫卵の検出したい。
2. 試料と方法 試料は17F-1 桶底板の内面縁辺にわずかに残っていた暗色汚泥質土を用いて水溶攪拌して約10秒程沈殿砂を除き、懸濁液物を採取し、プレパラート4枚にこれを水で展解して生物顕微鏡を用い×50及び×100にて観察した。
なお比較として桶外側の巻粘土の内面土を用いて同様に観察した。
3. 結果 内容的試料では若干の微砂や片状の腐朽木質物（暗色）に混入する橙～黄褐色半透明で厚膜の米粒状物が1～数个認められ、比較土には全く存在しなかった。この顆粒状物の法量は $63\sim 74\mu \times 42\sim 54\mu$ ほどで、厚さは測っていない。
4. 考察 検出した顆粒状物は文献に照らしてみる限り、形状や大きさから蛔虫卵である可能性が高い。しかし蛔虫卵の現物標本については実見していない。
類似するものとして他の生物体、例えば藻菌類などの場合も思われ、その異同については判断出来なかった。

参考文献

金井泉編：『臨床検査法提要—第28版—』 金原出版1978



→印は蛔虫卵？
目盛り=200 μ



桶内土の検鏡写真

調査区全景



調査前
(南より)



耕作土排除後
(南西より)



調査終了後
(空撮)



T 9



T 20

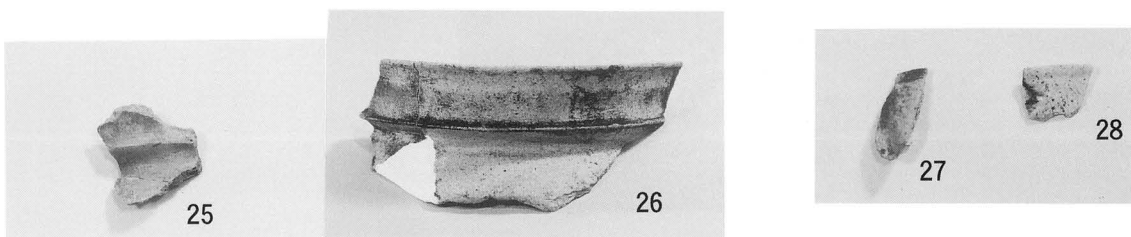
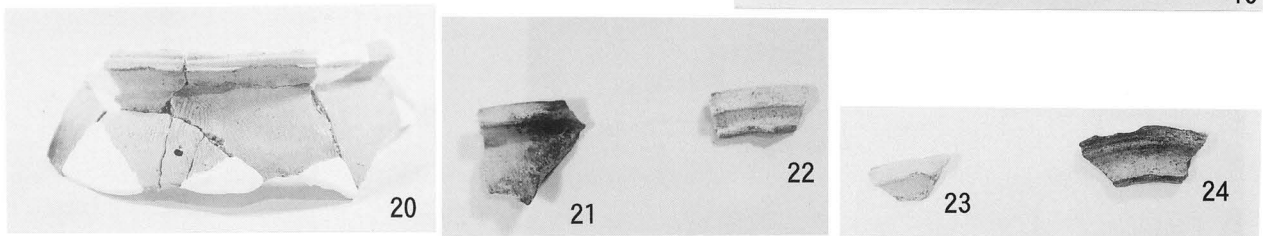
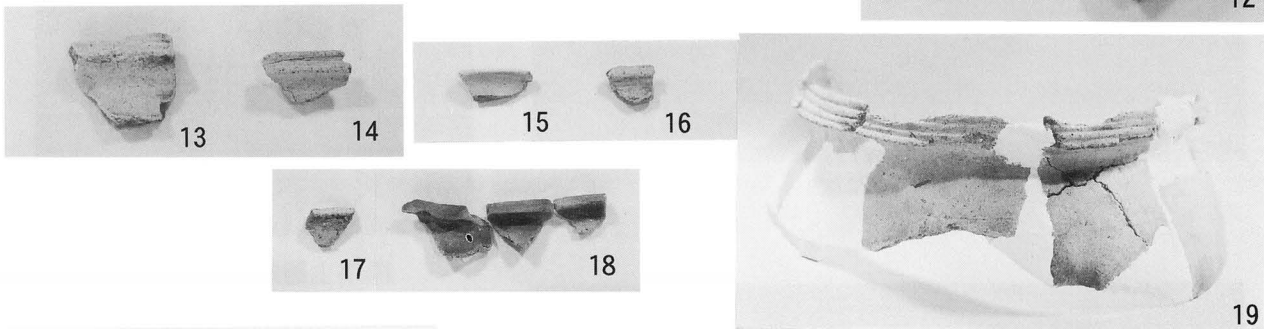
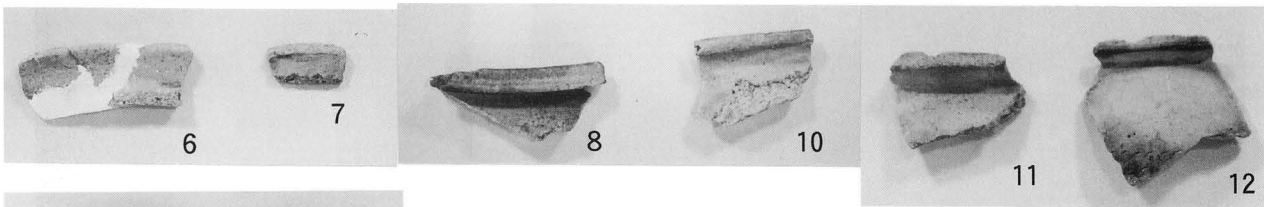
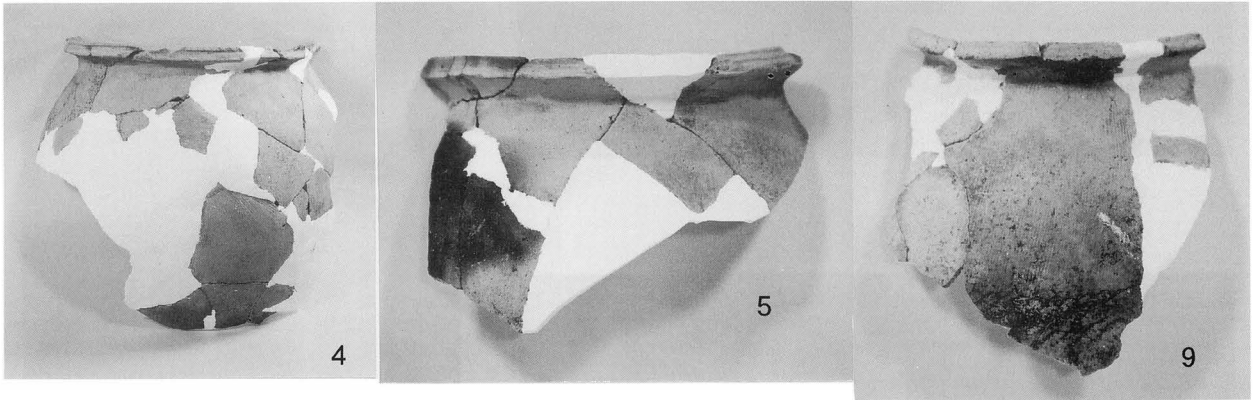
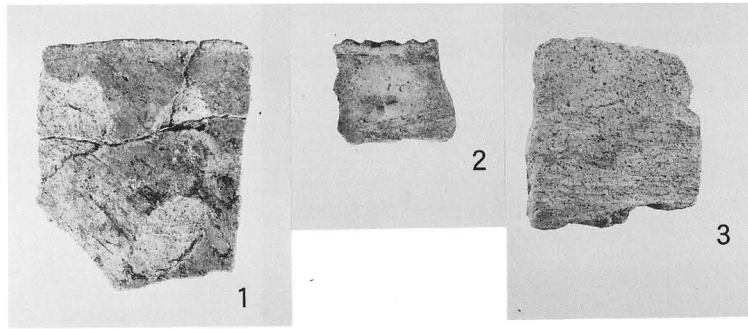


標準土層断面 (20 E)

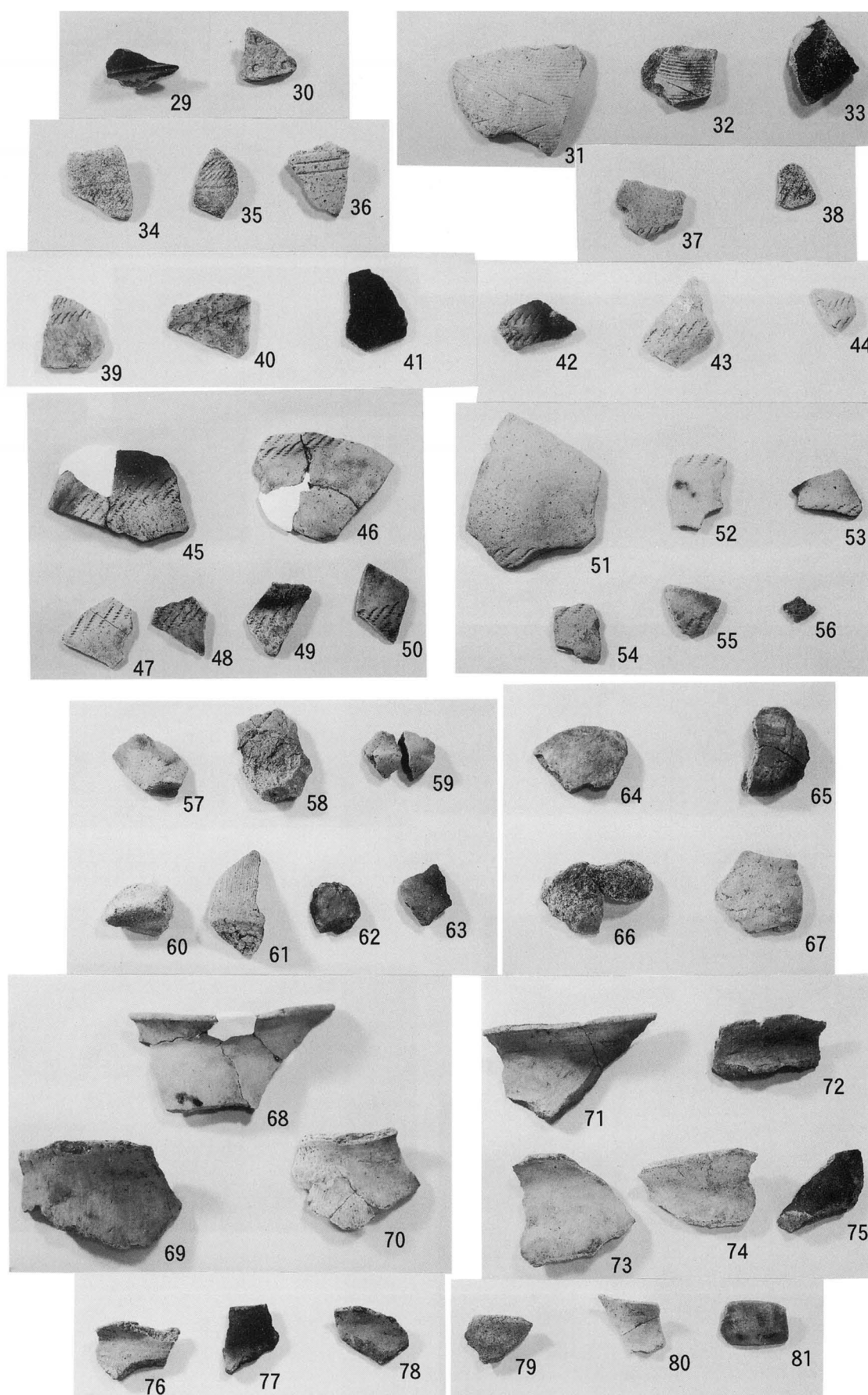


T 29

トレンチ壁面

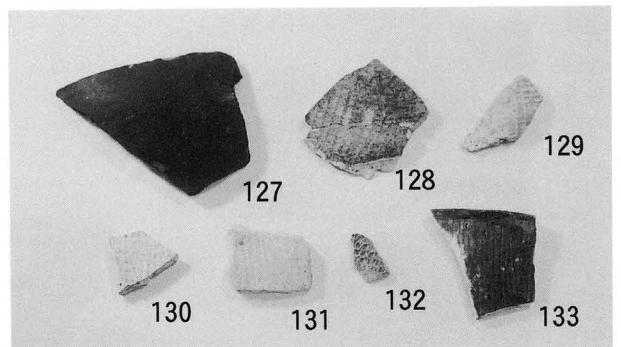
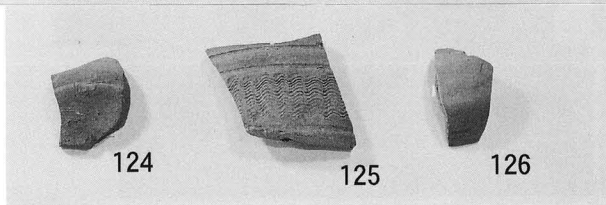
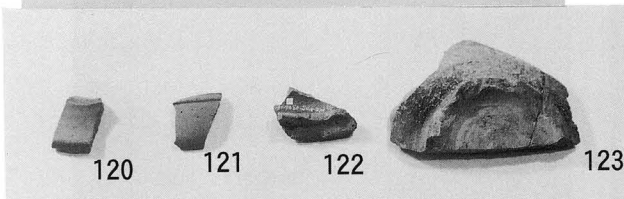
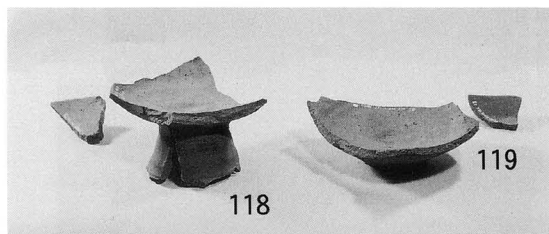
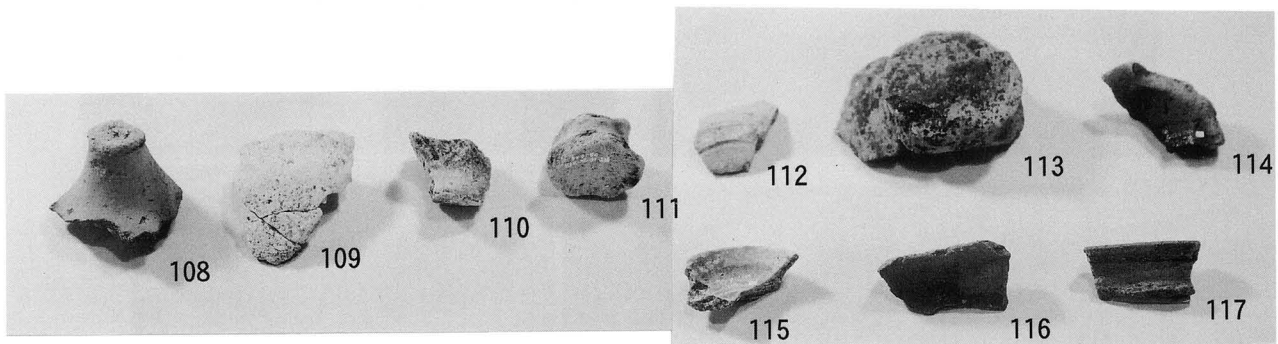
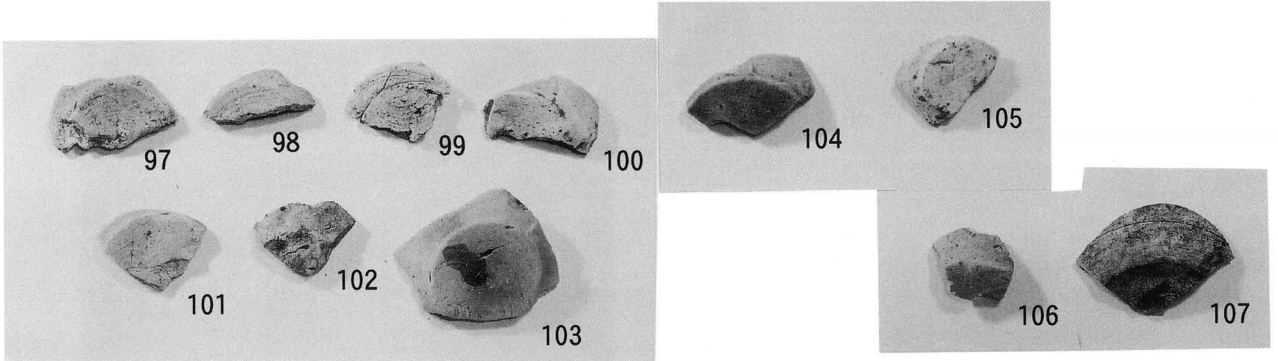
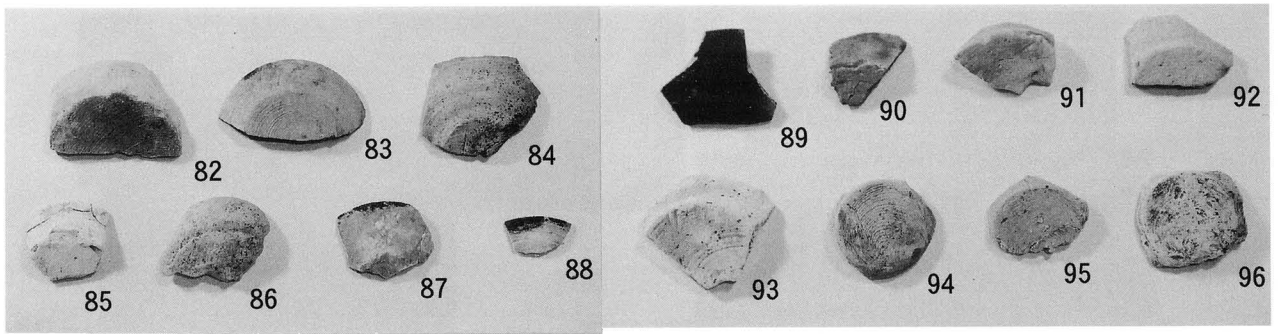


遺物 (1)

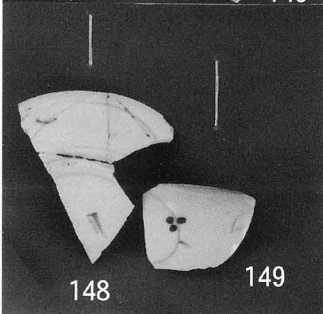
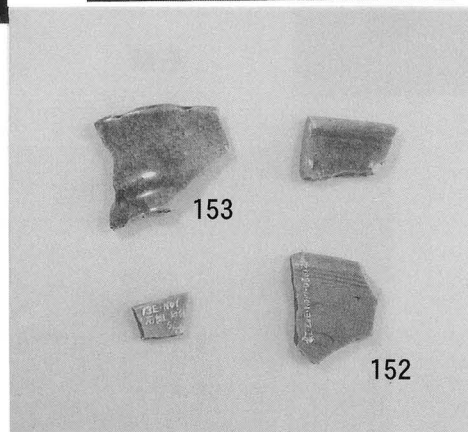
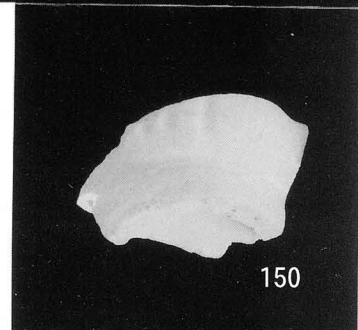
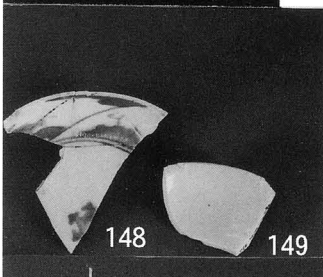
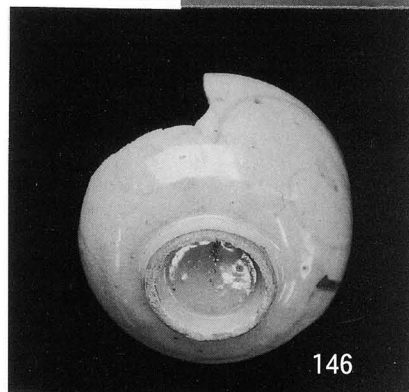
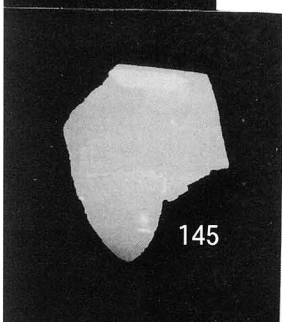
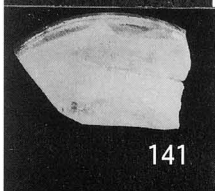
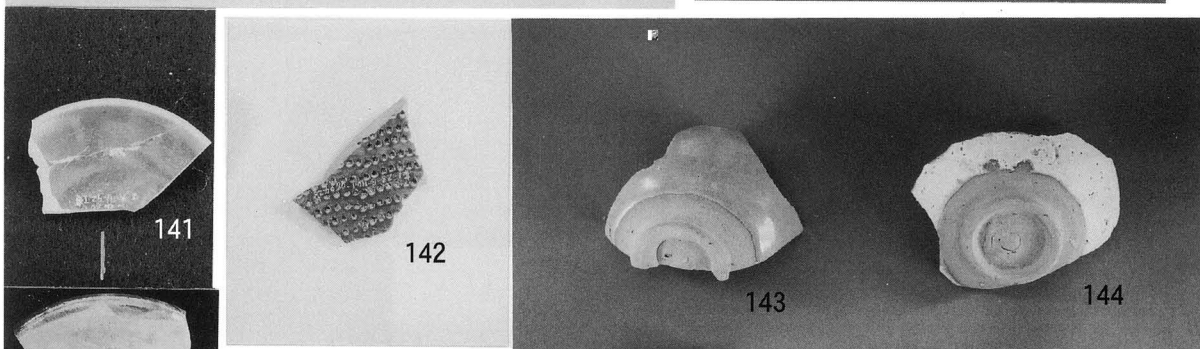
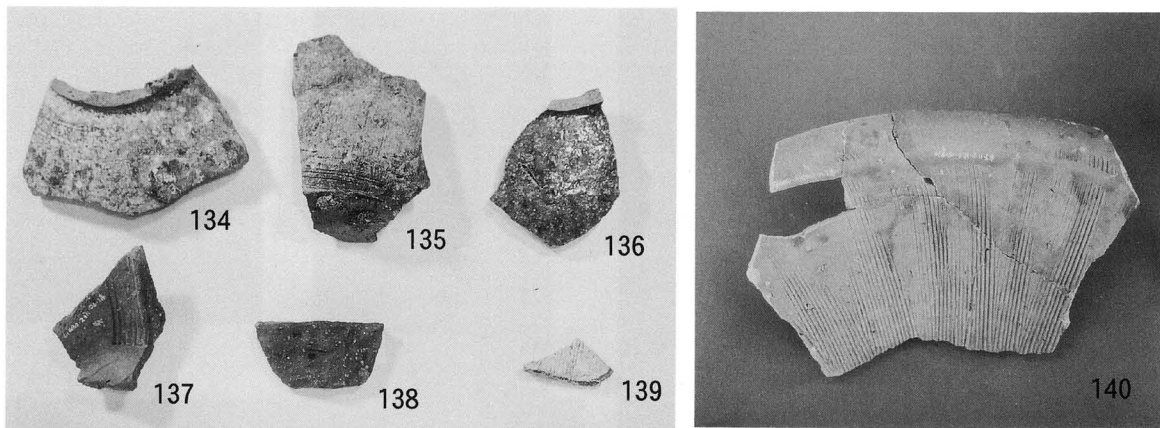


遺物 (2)

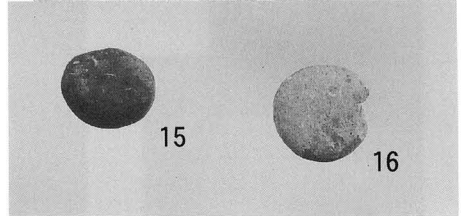
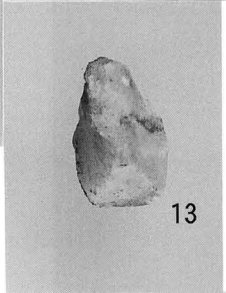
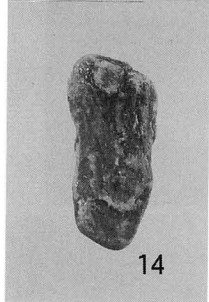
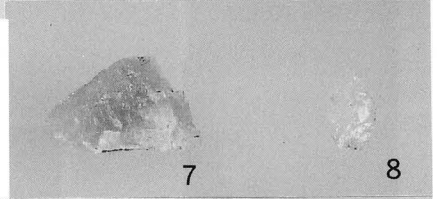
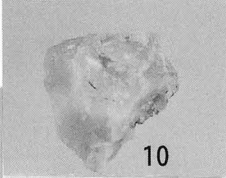
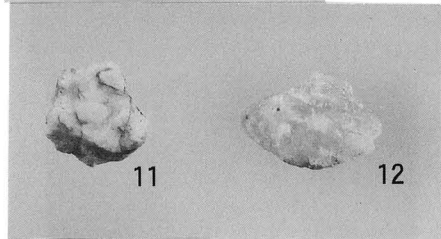
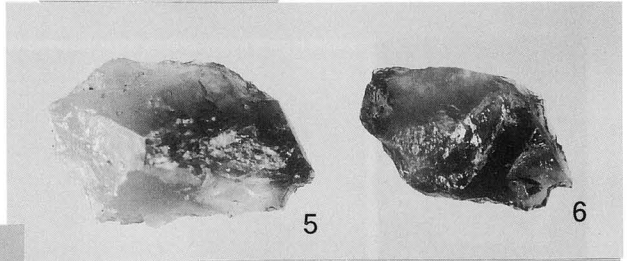
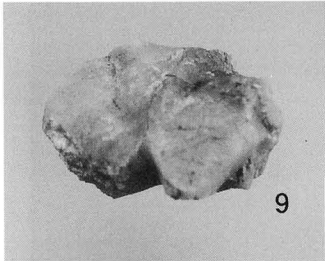
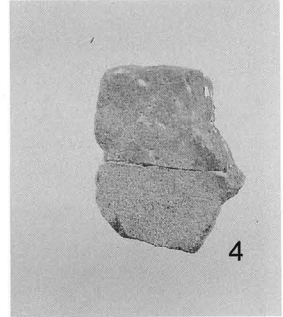
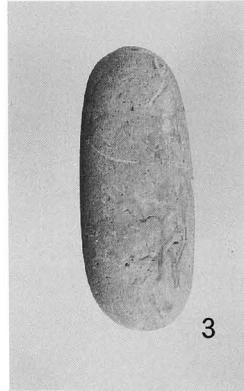
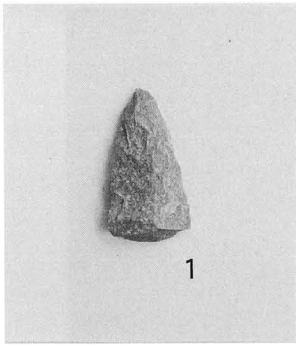
PL5



遺物 (3)

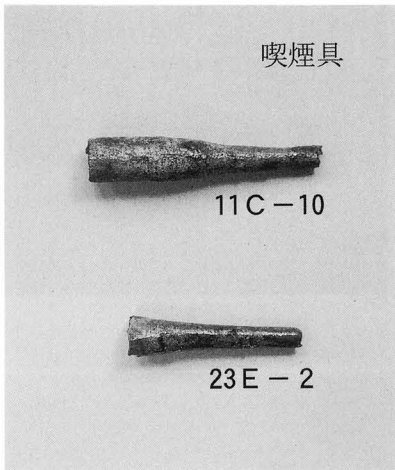


遺物 (4)

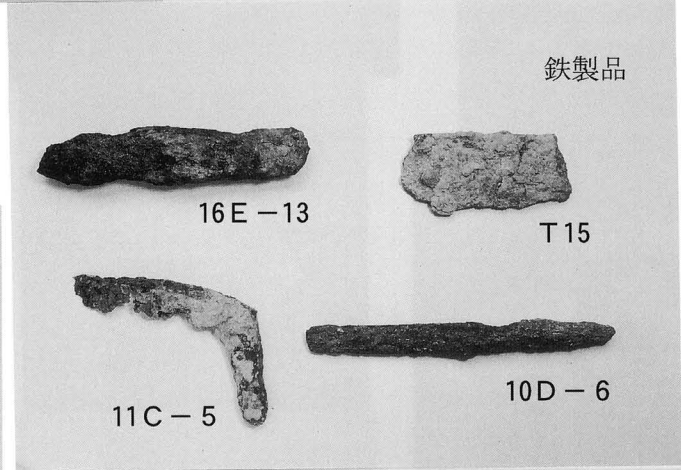


石類

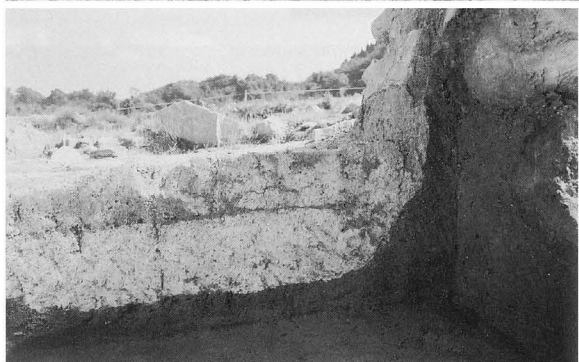
鉄製品



遺物 (5)



銅錢



6E-1 上 平面プラン
下 粘土敷・粘土巻きの残る遺構

切り合った遺構 10D-1・10C-5

タガ痕の残る桶遺構 10D-1



7C-1・7C-2 上 籬の残る遺構
下 籬の縊り(ナキワ)

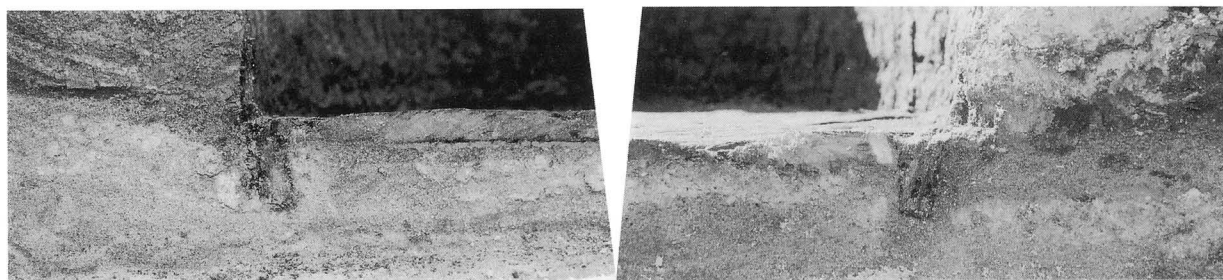
7F-1 上 底板と掘り方(切り合い)
下 半裁状況

桶遺構

PL9

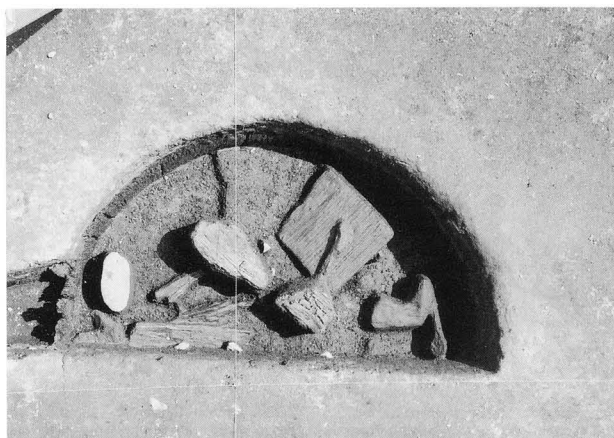


半裁状況

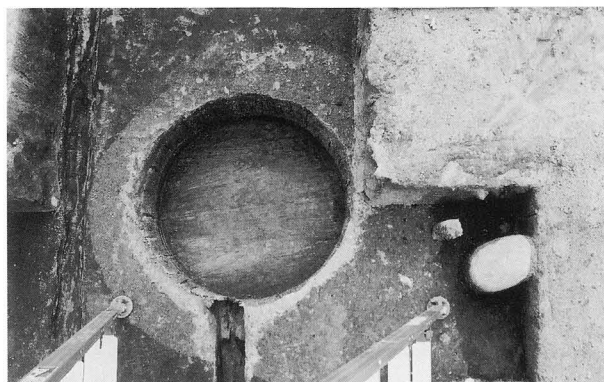


桶の底板と埋設状況

27D-1



桶落込み物



完掘状況

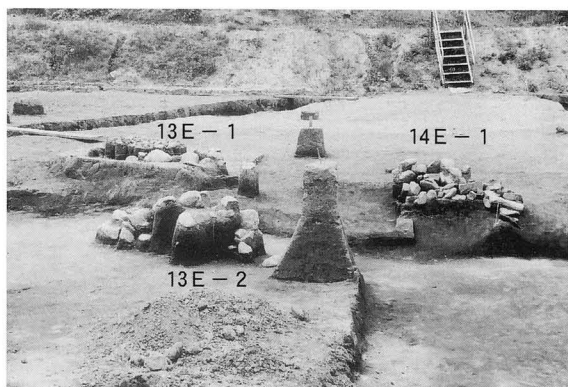


桶本体と覆屋の杭

桶遺構



(北東より)



(北西より)

火床と集石遺構



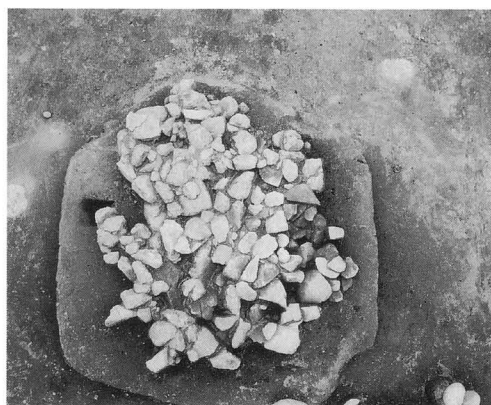
平面



断面

12E-1

焼石集積状況



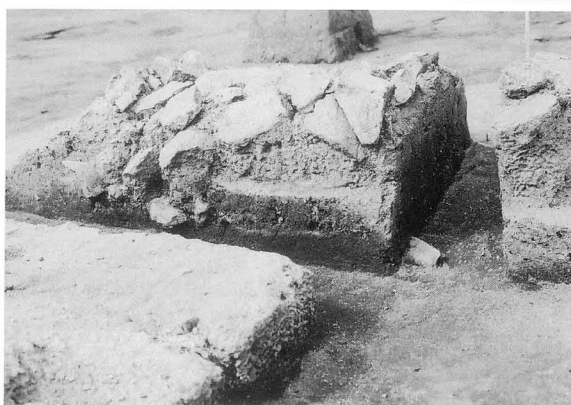
集積部断面



半裁状況

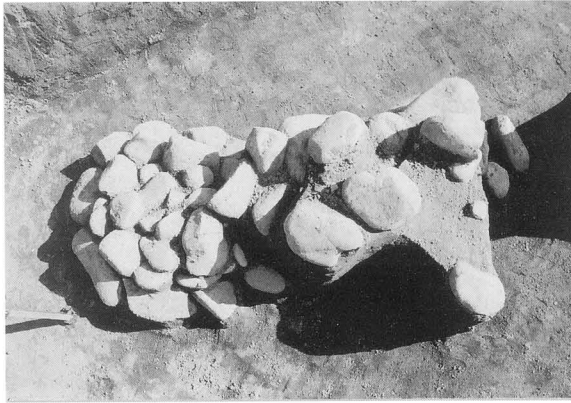
13E-1

火床遺構



炉底断面

集石遺構



13E-2 全景



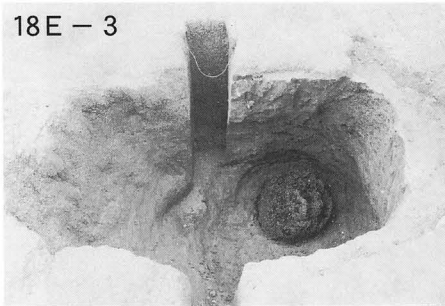
上段 除去後



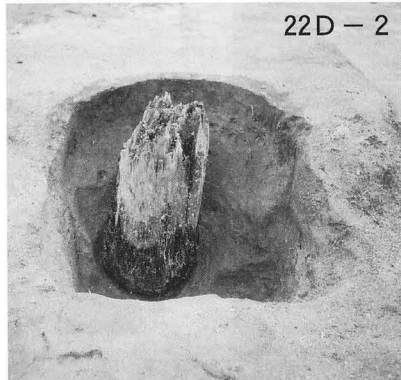
14E-1 全景



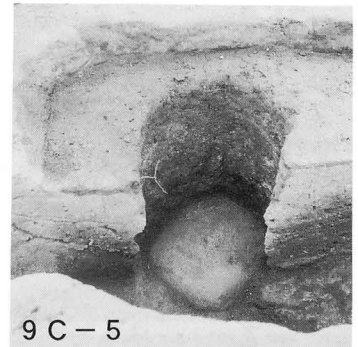
断面



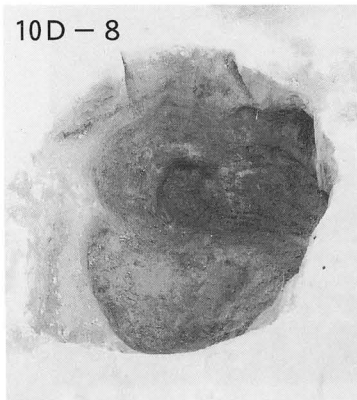
18E-3



22D-2



9C-5

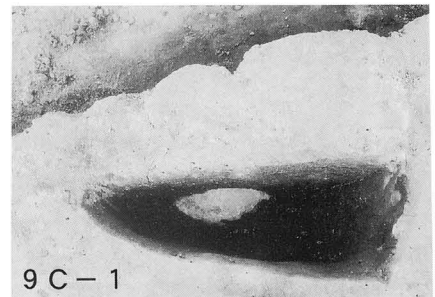


10D-8



23C-1

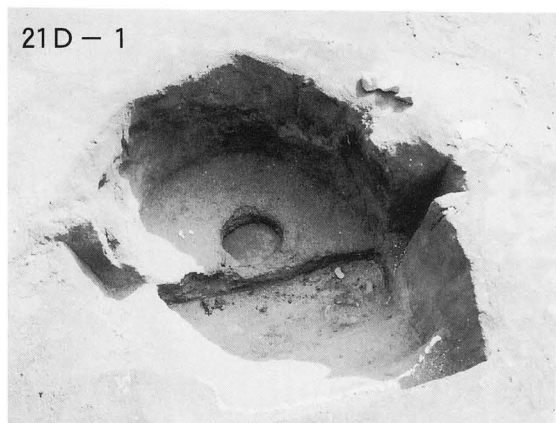
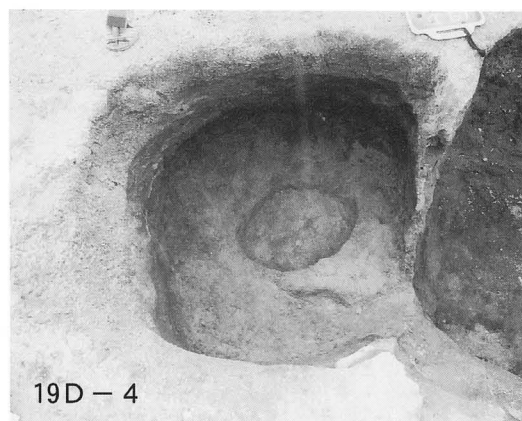
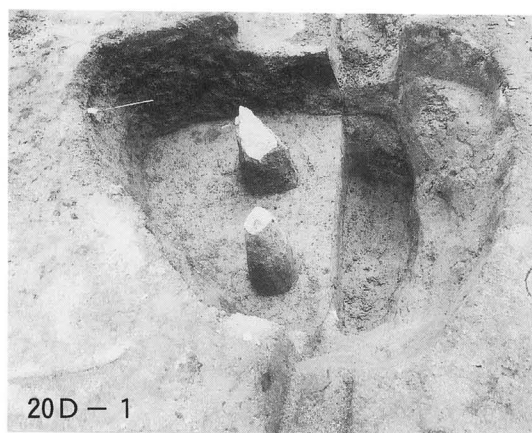
柱根・柱痕の残るもの



9C-1

礎板石の残るもの

小柱穴

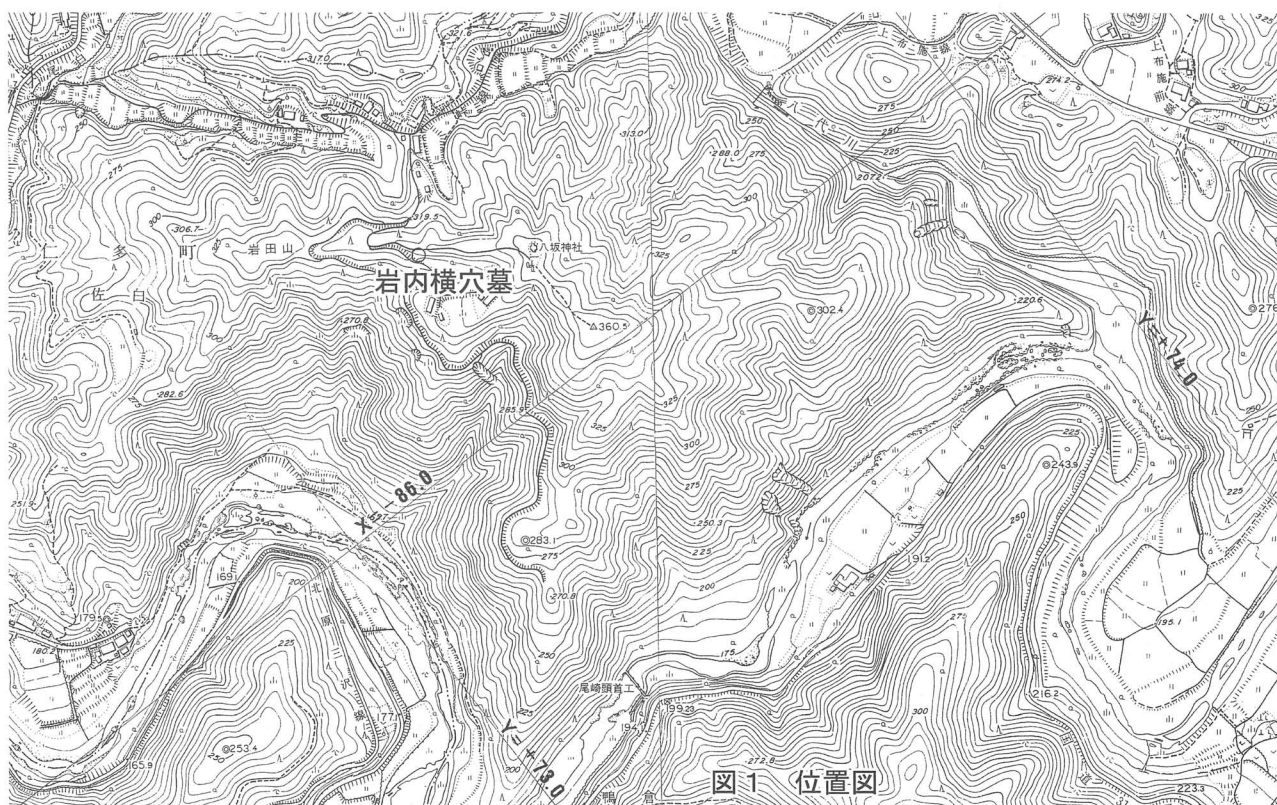


大型柱穴と作業風景

岩内横穴墓

I はじめに

この遺跡は、奥出雲町の行う尾原ダム建設関連森林管理道路新設の工事中に、平成20年10月16日に発見されたもので、地名により岩内（いわうち）横穴墓と呼称する。



当該遺跡は、南西眼下を西に流れる斐伊川からの比高150mの尾根上に所在し、標高333m。風化花崗岩（真砂）の脆い地盤に営まれた横穴墓である。発見は切土施工面に土器片数件の包含を認めたことによる。

II 調査結果

1 遺構

崩落土を除くと玄室床面であり、須恵甕の大割破片を粗に敷いた屍床であった。

残存したのは玄室半ばから奥へ約1mほどであり、玄室床面は残存し、奥壁・側壁はともにその基端を残すのみで、地山の地層理にそって後背上方から崩潰していた。またこれによって、敷かれていた土器片が跳ね上がったたり側面に刺さるなども見られた。

玄室床面のプランは奥壁沿いに広く、前方は窄まるようであるが失われていて明確でない。床

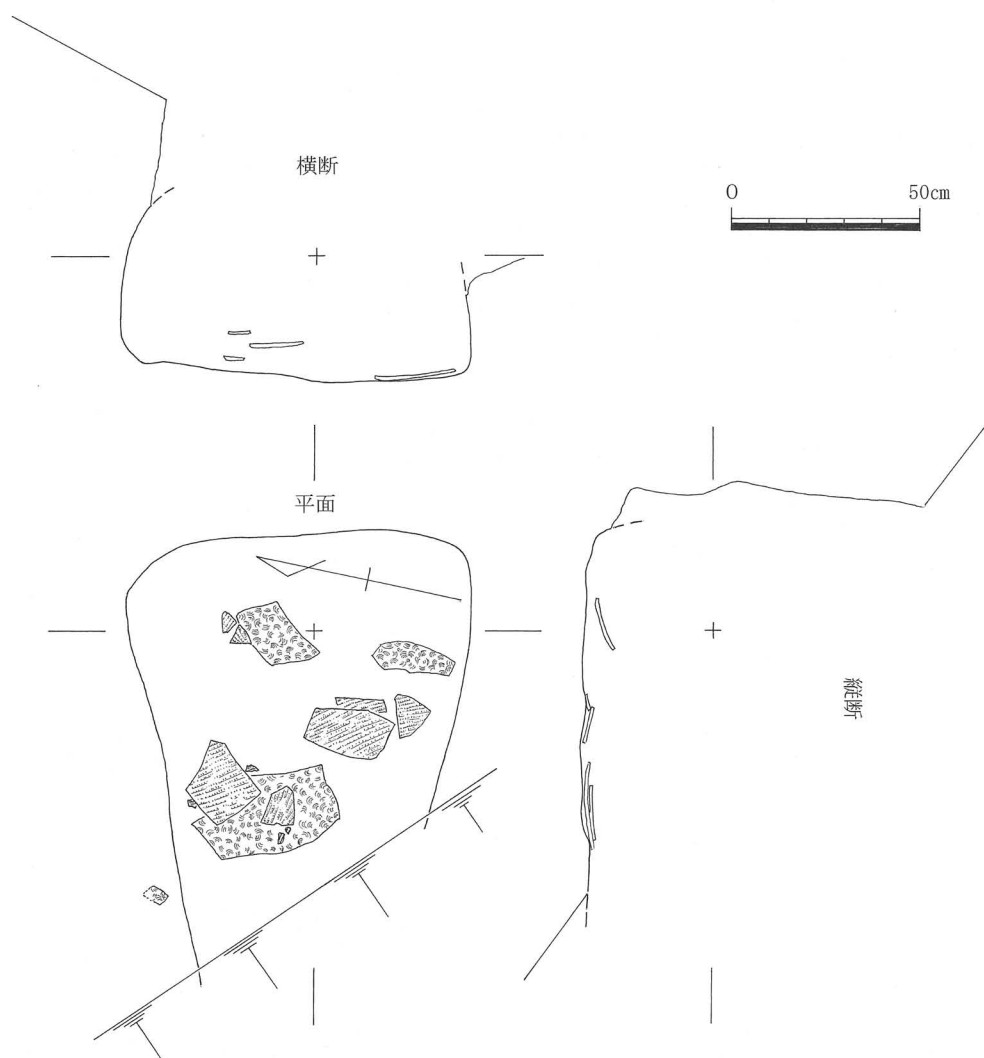


図3 遺構図

面の整形は粗略であり、その上に敷砂してから土器片を敷いたと見られる。玄室天井部については崩落破損して不明。

副葬品は全く見当たらない。

なお、残存部分からみて基軸方向は西南西に開口するプランであったと見られる。

そして、近隣地について踏査による分布調査を行ったが何らの所見も得られなかった。

2 出土土器

遺物は屍床に敷かれていた、須恵大甕の破片30片のみである、すべて胴部の破片であり、口頸部及び底部はない。内外ともに叩目で外面には周回するカキ目が認められるものもある。そして色調や内面の叩目からみて3個体であったことが判る。

個体1は外面叩目のち円周カキ目痕、内面は太目の円形叩目で胴下半分部分の破片。おそらく最大胴径は60cm以上であろう。厚さは1cm以下でそろっている。

個体2はカキ目なく、内面円形叩目の幅は狭く器壁は1.0~1.4cmで最も厚い。

胴中央部位で最大器径は70cm以上と見られる。

個体3もほぼ同様であるが、外面格子叩目がやや粗であり、内面の円形叩目は上記2者の中間

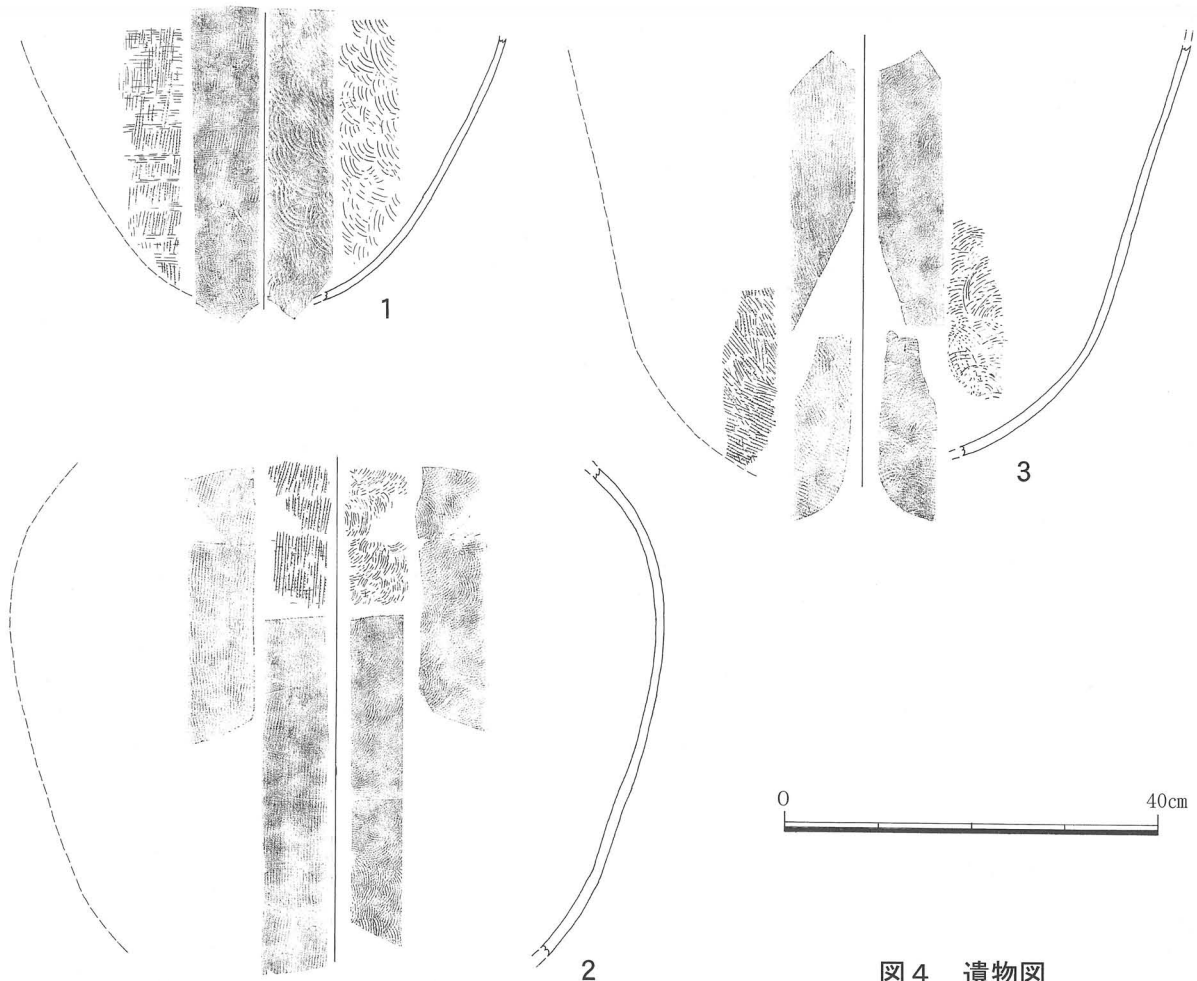


図4 遺物図

的である、器壁の厚さは0.8～1.2cmで部位により異なる。胴部下半部分の破片で最大径は70cmを超えるものとみられる。

Ⅲ むすび

岩内横穴墓は数十年以前の道路敷設と、今回の工事により遺構の大部分が失われ残存したのは玄室奥部のみで、しかも地質が弱いことから、造営後あまり時を経ないで落盤崩落したものと思われる。残存部の調査で、土器敷屍床であること、床平面プランが整った方形でなく、奥にやや広い変形が見られる。屍床に敷かれた土器は須恵大甕の破片で、3個体のそれぞれ胴部片であった。特徴ある部位がなく年代観は明確ではないが、おそらく7世紀中ば以降の品かと思われる。

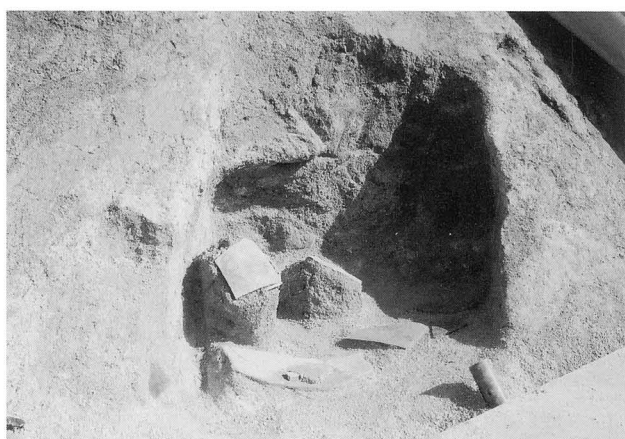
この横穴墓は、群をなすものかについて付近の踏査を行ったが、痕跡も認められなかった。或いはこれまでの長い期間の中で大規模な山崩れ等で完全消滅していることもあり得よう。



遠景（南西より）



発見時の状況



遺構

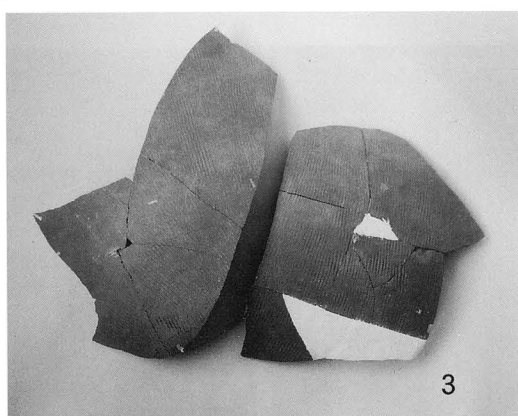
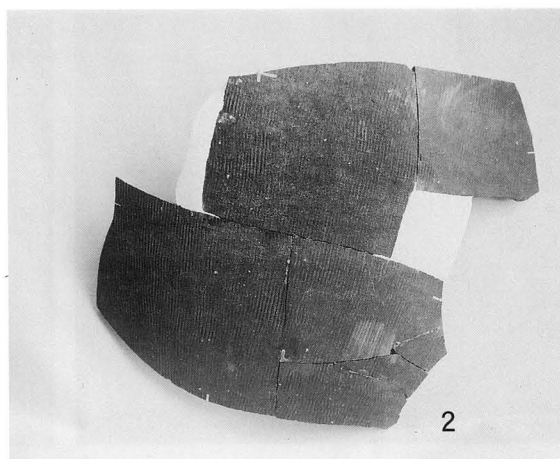
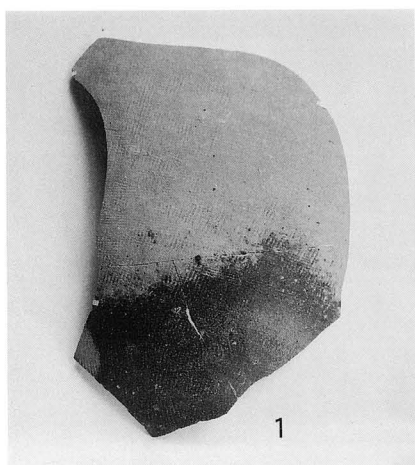


完掘状況



玄室内のようす（上より）

PL2



外面



内面

出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	いえのわきいちいせき いわうちおうけつぼ						
書名	家ノ脇 I 遺跡		岩内横穴墓				
副書名	尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ						
編集者	杉原清一 藤原友子						
編集機関	奥出雲町教育委員会						
所在地	〒699-1832 島根県仁多郡奥出雲町横田1037番地 TEL0854-52-2680						
発行年月日	西暦2010年2月						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号				
いえのわき 家ノ脇 I 遺跡	島根県 仁多郡奥出雲町 前布施1132-7他	32341	N146	35° 12' 58"	132° 58' 58"	2008. 4. 1 } 2008. 11. 14	ダム建設
いわうち 岩内横穴墓	島根県 仁多郡奥出雲町 佐白1483-40	32341	N152	35° 13' 40"	132° 58' 09"	2008. 11. 20 } 2008. 12. 01	ダム関連 森林管理 道路新設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項	
家ノ脇 I 遺跡	生産遺跡	近 世		火床遺構 桶埋設跡 柱穴	縄文土器 弥生式土器 土師器 陶磁器		
岩内横穴墓	横穴墓	古墳時代後期		横穴墓	須恵大甕片	工事中発見	

家ノ脇ノ遺跡 岩内横穴墓

尾原ダム建設予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ

2010年2月

発行 奥出雲町教育委員会
〒699-1832 島根県仁多郡奥出雲町横田1037番地
Tel. 0854-52-2680

印刷 (有) 木次印刷
〒690-2403 島根県雲南市三刀屋町1635

